
目隠し姫

草野 瀬津璃

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目隠し姫

【Nコード】

N5483U

【作者名】

草野 瀬津璃

【あらすじ】

舞台はウオルトホル領のすぐ側にある街、メリーハドソン。その街のトレーズ商会の長女であり、前髪を伸ばし、顔を隠して生きるフィオナは、「目隠し姫」というあだ名で呼ばれていた。そんなフィオナはある日、「鉄仮面」というあだ名で呼ばれている警備団の副団長ロベルトに助けられる。やや対人恐怖症気味な少女と無愛想な青年の物語。ほのぼのを掲げています。恋愛小説を書くのが苦手な、習作で書いていますので、更新はゆっくりとなります。一応、中編予定。あ、あんまり、期待しないで下さい……ね？

序章

「その顔を見せないで頂戴！」

継母がそうわめくようになったのは、フィオナが七歳になった頃だった。

フィオナが四歳の時に実母は亡くなり、その半年後に、父が子の為にと再婚した新しい母はとても美しい人だった。太陽の日差しのような金髪に、夏の日の草葉を思わせる緑色の目をしていて、健康的な美しさで彼女自身が輝いて見える程。連れ子である、フィオナの二つ年下のアイシスも母親似でとびきり可愛かった。

それでフィオナは思ったのだ。

私は相当に醜い顔みにくをしているのだろう。

だから継母はフィオナの顔を嫌がるのだ、と。

そのことに気付いたフィオナは、それ以来、前髪を伸ばして顔を隠すようになった。

義妹は人形のよう。姉は不細工。

フィオナの夢は幸せな花嫁さんになることだったから、誰もお嫁に貰ってくれないと思って哀しくなった。

それならば、仕方が無い。世の中そんなに上手く回るものではないと、商人である父はよく言っている。

だからフィオナは諦めて、一人でも生きていけるように勉強や商いの知識を詰めるのに励んだ。勿論、家事だって覚えた。

これで大丈夫。これなら、一人でも生きていける。

でも、もし小さな希望を抱いても構わないなら、どこかに自分みたいな人を貰ってくれる物好きな殿方が一人くらいいいものだろう。

うか。

フィオナは夜空の星に願いを呟き、
今日も針仕事に励むのだった。

序章（後書き）

こんばんは。書き手の草野瀬津璃です。

初めましての方、がっかりされないといいなと思います。そうでない方、お前また別作書き始めたんかいと突っ込まれたいでしょうが、どうかスルーをお願いします。

恋愛を書くのが苦手な作者が、不器用ながら習作で書いているお話ですが、楽しんで頂ければ幸いです。

他の小説の合間に、のんびり書きます。

一応、ファンタジーな感じの舞台です。それでちょっと西洋の童話風な感じの話です。

……あ、あんまり期待しないで下さいねー。恋愛苦手なんです。でもちよつと今、ラブが足りてないんで補充したいんです。ガムバリマス（↑青汁飲んだみたいな顔）

一章 目隠し姫と鉄仮面

「すつごく素敵なのよ、ハーシエル様って。ああ、一度でいいからお話してみたいわ!」

その日も針仕事に精を出しているフィオナの部屋にやって来て、いつものように椅子に座るなり、いつものように妹のアイシスは溜息混じりに呟いた。

「そうなの」

それにフィオナがそう答えるのもいつものことだったが、アイシスは話を聞いていれば満足なのか、更に続ける。

「あの太陽も真っ青な金色の髪と、空みたいに澄んだ青い瞳^{ひとみ}! 背も高くていらつしやるし、剣の腕も素晴らしいと聞くわ。あんな方がこの街の警備団の団長様だなんて、私、とってもついてるわ!」

妹が恋する夢の御方は、フィオナ達が暮らすウォルトホル領の主館のすぐ側にある街、メリーハドソンの警備団に勤める団長様だ。ウォルトホル領家の次男にして、容姿端麗で明るく社交的なハーシエル・クレスシェン・ウォルトホル様は、二十四歳という年齢と独身ということも手伝って、街の若い娘達、いや、領内の若い娘達の憧れの的だ。長男ではないから、貴族の娘と結婚して婿入りするか、もしくは市井^{しせい}の娘と結婚して穏やかに暮らすかのどちらかなので、平民の娘達が騒ぐのも仕方がないと言える。なにせ手の届くところにそんな素敵な人がいるのだから。

「でも、あの方はしょっちゅう誰かと恋していると聞くわ。アイシスなら上手くいけるかもしれないけれど、アイシスを大事にしてくれない方は姉さん嫌よ」

フィオナが静かな声で、そつと言うと、アイシスは頬を薄らと赤

らめた。

「そんな風に言ってくれるの、姉さんだけよ。母さんなんて、いい歳して夢見るのはやめなさいっていうの。いい歳ですって、私、まだ十六よ！ 夢見ていいと思わない！？」

つーんと唇を尖らせてみる仕草も、アイシスの綺麗な容姿を損なわない。それどころか可愛らしく見える。

そう、アイシスは姉の目から見てもかなりの美人だ。

フィオナより二つ年下の、義理の妹。フィオナが物心がつくかという頃に姉妹になったので、本当の姉妹のように仲が良い。アイシスは末娘ということもあつてか少しばかり我がままなくらいで、特に性格が悪いわけでもないから付き合いやすい。我儘といっても自室の改造について程度のささやかなものだから可愛いものだし、天真爛漫で明るい性格はまるで太陽のようだ。むしろ、こんな子のちよつとした我がままなら喜んできいてあげようという気になつてしまふタイプの可愛らしい娘だ。

（私みたいな醜^{みにく}い姉にはもつたいたない妹だわ）

フィオナはちらりと自室の隅に目を向ける。姿見が置いてあり、そこには腰まである緩やかに波打つ黒髪と、顔の鼻までを覆う前髪をした、背が高めな女の姿がある。着ている服も灰色で、夏だというのに薄めの長袖を着て肌を隠している。作業用の緑のエプロンが唯一色合いがある程度。あまりに醜い顔である為に、前髪を伸ばして顔を隠しているのだ。

「アイシスったら。そんな言い方、良くないと思うわよ。結婚適齢期ですもの、大事な娘を早く嫁がせたいんでしょう。私に貰い手が無い分、ね」

やんわりと微笑んで言うと、アイシスはむすつとむくれた。

「うるさい娘を追いだしたい、の間違いじゃないの？ それに、姉さん、そんな言い方しないで。あんな見る目のない男達のことなんか放っておきなさいよ。見た目だけで判断するような男なんて、それこそ姉さんにはもつたいたないわ。こないだの奴、もう、ほんつと

腹立つちゃって、私、濡れた雑巾（じしん）を背中に投げ付けてやったわよ！」

「……アイシス」

妹はどうも癪癪（かんしゃく）持ちなので、ときどき感情のままに動くところがある。その辺は義理の母にそっくりだ。

だからって、まさか、この前のお見合い相手に妹が無礼を働いたとは露と知らなかった。道理で、先方から怒り狂った断り状が送りつけられてきたわけだ。

「だってだって、『これが噂の醜い目隠し姫さまか』、なんて言うのよ！ あいつが姉さんの何を知ってるって言うのよ！ ああもう、ぐしゃぐしゃにして踏んづけてやりたいわ！」

思い出したらますます腹立たしくなってきたのか、アイシスはスカート（スカート）をぐしゃぐしゃと手で握りしめた。

「アイシス、皺（しわ）になるからやめなさい。もう、そんな風に言ってくれるのは、それこそあなただけよ？ 本当のことなんだから、気にしないでいいのに」

「いいえ、駄目よ！ 姉さんには姉さんをつんつと幸せにしてくれる男の人でなくっちゃ。あ、もちろん、私の相手だって私と幸せに生きてくれる人でなきゃ駄目ね」

にこつと明るい緑の目を緩ませて微笑むアイシスは、愛らしい春の女神のようだ。我が妹ながら芸術品みたいな娘である。

幸せにしてくれる、という表現でなく、一緒に幸せに生きると言う辺り、アイシスの前向きな性格が滲み出ている。

一方で、結婚を端から諦めているフィオナにとっては、アイシスがムキになると困ってしまうのだが。

（そんな人、一人いたら奇跡だと思うわ）

フィオナは心の内でそつと溜息を零す。

アイシスには悪いけれど、フィオナは、とつくの昔に一人で生きていく覚悟を決めてしまっていたから。

その日の午後、フィオナは買い物の為に街に出かけた。

フィオナの父は、トレーズ商会という、この近隣では有力な商会の会長をしている。名の通り、父の父、つまりフィオナの祖父が作った商会で、主に布地を取り扱っている。それでフィオナは商売の手伝いの傍ら、その布で見本品になるような衣服やハンカチなどを作っているのだ。

布地商であるから、当然、食べ物などは他の商店に買いに行かなくてはいけない。

忙しい父母の為、フィオナは家事の手伝いにも余念がない。母と姉妹で当番制にっていて、今日はフィオナが当番の日だった。

自分の容姿にコンプレックスを持っているフィオナは、人前に出るのが苦手だ。

通り過ぎる人達が、自分のことを好奇の目で見ているような気がするのだ。

だからフードをきつちりと被って、出来るだけ人目を避けていた。隠していると暴きたくなるのが人の性。そういう行動がまた人の好奇心を呼び起こすのだが、フィオナは気付いていなかった。

ぎゅつと買い物籠を握りしめ、身を縮こまらせて歩く。

早く終わらせて安全地帯に帰ろう。

そう思い、早々に用事を済ませて帰ろうと思ったのだが、帰る途中で急に目眩を覚え、道の端に座り込んでしまった。

貧血だ。

フィオナは慢性的な貧血を小さい頃から患っていて、ときどき思いついたみたいに貧血を起こして座り込んでしまう。病気がちだったという実の母に似た短所で、そのせいで父や妹はフィオナに甘かった。今の母も気にかけてくれるが、父や妹のように過剰反応は示さない。まあフィオナの心情的には母くらいの方が反応としては助かるのだけれど。

（よりによって外でだなんて……）

一刻も早く家に帰りたいのに。

でも動けない。

もったい。諦めてここでじっとしよう。

そのうち回復したら、家まで帰ればいい。うん。それしかない。
心を決めたところで、自身に影が落ちたのに気付いた。

「……どうした、具合が悪いのか」

「……？」

そろそろと顔を上げると、黒衣が視界を遮った。

黒髪黒目、日に焼けた肌をした物静かそうな青年だ。問いかける声も静かだった。けれど聞き取りづらいわけではなく、何となく耳を傾けてしまうような静かさだ。

夏の日差しの中、黒い半袖の上着とズボンを身に着けている男は、上半身に赤い懸章けんしょうをかけている。女神の描かれた盾の紋章を見て、ほっとする。この街の警備団の紋章だ。見回りの最中にフィオナを見かけたので、声をかけてくれたのだろう。

「すみません、貧血で……。あの、放つといってくれて構いませんので。そのうち治ります」

街を守る警備団の手を煩わせるのも嫌で、フィオナは小さな声でそう返す。具合が悪いせいで、弱々しい声しか出ず、聞こえたかどうかと不安になる。しかしそれは杞憂きゆうで済んだ。

「今日は暑い。具合が悪い者を外に放置するのは憚はばかられる。家まで送ろう。どこだ？」

青年は端的に問うてくる。軍人の見本みたいな話し方だ。

「い、いえっ、そんな、悪いですから」

「心配いらない。俺はこの後は休みでな。時間的な制約は存在しない。具合の悪い者を送り届ける程度、何の問題もない」

「お休みなら余計に悪いです……！」

そういう問題ではないと思い、気付けば珍しく声を張り上げてしまった。

人見知りをする性分なので、小さい声になってしまふことが多いのだが。

まごまごしていると、少女らしい高い声が響いた。

「ちょっと、そのあんた。うちの姉さんに何してんのよっ！」

「アイシス」

驚いて小さく声を漏らす。アイシスはわずかと歩いてくるや、青年との間にずっと割り込んだ。

「姉さんたら、なかなか帰って来ないから様子を見にきたら。またからかわれてたのね。ほんと男ってどうしようもないんだから！」
勘違いして怒っているアイシスの黄色いワンピースの腰辺りを、フィオナは軽く摘まんでそつと引く。

「違うのよ、アイシス。この方は、具合が悪い私を気遣って声をかけて下さっただけで……」

「具合が悪いって。姉さん、大丈夫なの？ ああ、暑い中、買い物になんて行かせるんじゃないわ！」

お願いだから、ひとの話を聞いてちょうだい。

フィオナは内心困り果てる。

「あの、ごめんなさい。妹が……」

フィオナが身を縮めて謝ると、青年は特に気にした様子もなく、口を開く。

「気にしていない。どうやら家族の者が来たようだが、女性では連れ帰るのにも苦労しよう。よければ手を貸すが」

青年がちらりとアイシスを見ると、アイシスは少し考え込んだ後、頷いた。

「確かに私一人では厳しいわ。手伝って下さい」

「了解した」

青年はあっさり頷くと、フィオナの横にすつと膝をついた。

「？」

なんだろうときよんとその動作を見た瞬間、体がふわりと浮かび上がって硬直する。

「さて、家はどちらにある？」

「なにも抱えなくても……」

予想外の動作に、びしっと石のように硬直している姉に同情しつつ、アイシスは頬を引きつらせる。

「暑い日差しの下での貧血を甘く見てはいけない。もしかすると熱中症かもしれない」

しかし思ったより朴念仁^{ぼくねんじん}らしき青年は、ややずれたことを言っ促す。

「……こっちです」

なんだか説明するのも面倒になり、アイシスは先に立って青年を誘導する。

（ひいひい、いやああ、恥ずかしいひいひい）

一方、静かではあったが、フィオナは顔を赤くして内心でもだえまくっていた。

*

「これはこれは、ロベルト殿ではないですか！ 娘を助けて頂き、まことにありがとうございます！」

青年に抱えられて帰って来た娘を見た、フィオナとアイシスの父であるノルマンは、目と口を開けて驚愕した後、ハッと我に返って頭を下げた。

どうやら父は青年を知っているらしい。

「父さん、この人を知ってるの？」

アイシスの問いに、ノルマンは頷く。

「知ってるも何も、警備団の副団長様じゃないか！ ロベルト・アスレイル殿だよ！」

「ええ！？ じゃあこの人が、あの噂の“鉄仮面”！？ むぐっ」

「これ、アイシス！ なんて失礼な口を！」

ノルマンが慌ててアイシスの口を手で塞ぐ。

冷や汗を浮かべたノルマンは、ゆつくりと青年を振り返る。

「はは……すみません、ロベルト殿。娘はその……口がときどき暴走しまして」

「構わん。言われ慣れている。それよりもう一人の娘御をどちらに運べばよろしいか？ 具合が悪いのだからに、気の毒だろう」

「ああ、そうでした！ 申し訳ありませんが、こちらまでお願い出来ますか。私はこの通り、膝の具合が悪いもので」

ノルマンは左膝を痛めていて、歩き方が少しぎこちない。かろうじて杖をつかずに歩けるけれど、人を運べる程ではないのだ。

ノルマンの案内でフィオナを自室まで運んだロベルトは、アイシスと言ったように「鉄仮面」らしく表情の変化に欠けている。

恥ずかしさといったたまれなさで放心気味だったフィオナだが、まるで荷物を運ぶ仕事を終えたというように、さっさと出口に向かうロベルトを慌てて呼び止める。

「あ、あの！」

「……？」

僅かに振り向くロベルト。

フィオナはそれはもう勇気を振り絞り、必死に頭を下げた。

「ありがとうございます……」

手助けしてくれて感謝している。かなり恥ずかしいので、あまり顔を上げられそうにないが。

「お大事に」

それにロベルトはそれだけ返し、ノルマンとともに階下に降りて行った。

閉まった扉を見つめ、フィオナは顔を赤くし、ばすつと枕に倒れ込んで頭を抱える。知らない男の人に運ばれた事実がもういたたまれない。

あんな所で座り込んでごめんなさい……！

どうせ運ぶのなら、フィオナみたいな醜女みにくより、アイシスみたいな美少女の方が良かっただろうに。顔色一つ変えずに運んでくれた

のだ。

なんて良い人！

（……あの方が、噂の“鉄仮面”。なんだ、噂って当てにならないのね）

警備団副団長の噂は、噂好きな同年代の女友達から聞いている。

団長であるハーシエルの乳母兄弟で、ハーシエルより剣の腕は良いが、物静かで常にハーシエルを立てる為にハーシエルからは絶大な信頼を得ているとか。更には、本人の性質の良さからか部下に慕われており、ハーシエルを影から支える有能な副官だという。ここまでは良い話なのだが、その後が続くのが、寡黙であり表情の变化が少ないせいで、妙な迫力があって恐ろしいという話だ。その為に、たいていの初対面の女性や子供には怖がられるらしく、ついたあだ名が鉄仮面。あだ名のように、金属のような冷たさがあるらしいが……。

（別に怖くはないし、むしろ親切で優しくかったと思うのだけど）

噂って本当に信用ならない。

フィオナも街の者の間で「目隠し姫」などと呼ばれているので、あまりそいつった噂に左右されるのは好きではない。似たようなあだ名被害者として同情してしまう。

フィオナは貧血を治す為にも掛け布の中におさまりながら、考える。

そんな噂云々はどうでもいい。とにかく、お世話になったのだから、今度会ったらお礼をしよう。

お礼の中身を考えながら、うつらうつらと目を閉じた。

一章 目隠し姫と鉄仮面（後書き）

妹のアイシスの恋愛も応援して頂けるとありがたいなあ。作者の親心ですが。

こういう恋愛小説だと、たいてい妹が嫌な役回りですが、仲の悪い姉妹というのが想像つかないので、これで行きます。ライトな感じじゃないと続かない自信がありますので。

あと、懸章っていうのは日本でいうタスキのことです。体に斜めにかけてるあれ。一応、補足しておきます。

二章 鉄仮面さん再び

ロベルトに助けられた日から三日後。

フィオナは人生の最難関を前にしていた。

緊張のあまりやや震えながら、アップルパイの入った籠を最後のよすがのように握りしめ、門を睨みつける。その隣では、アイシスが呆れた顔をしている。

「……姉さん。そんなに怖いんなら、私が一人で行ってくるわよ？」
「だ、ただだ駄目よ、アイシス。お礼なんだから、自分で言わなくちゃっ」

噛みながらも反論する。

それでも、アイシスについてきてもらわないと、とても一人では来れそうになかった。父にも直接礼に行けと言われてるし、何よりフィオナ自身がそうしなくては気持ち悪い。

そういうわけで、警備団の門前にこうして立っているわけだ。

煉瓦塀で囲まれた、黒い鉄柵の門の向こうにある警備団の本舎は、立派な白い石造りの建物だ。他には、修練場と馬屋と宿直用の建物が別にあるらしいという噂だ。確かにそれくらいあってもおかしくないくらいには広い。

門番に訳を話すと、少し待つように言われた。二人いるうちの一人が本舎に消え、ややすると戻ってくる。

「お会いになるそうです。どうぞこちらへ」

「あ、ああありがとうございます」

「ありがとうございます、門番さん」

ガチガチな返事をするフィオナの脇を、しっかりとよというようにアイシスは軽く肘で小突きつつ、笑顔を取り繕って礼を言う。綺麗な少女の花のような笑みに、門番の男は「いえいえ」と眉尻を

下げた。

やや対人恐怖症気味なフィオナには、人の多い警備団の中はとも恐ろしい場所に見えた。悪魔の畏か、竜の巣穴かといった具合である。

それでもなんとか門番の案内で副団長の執務室に通された。団長のよう立派な部屋ではないらしいが、副団長は手紙の仕分けや書類選別などの文書仕事が多いので、別に部屋を与えられているらしい。

廊下を歩きながら門番がアイシスに語った言葉だ。

（……門番さん、いくらアイシスが綺麗だからって鼻の下をのばしすぎです）

姉としては少し心配になるのだが。

「ロベルトさん、お客様をお連れしました」

「入ってくれ」

木製の分厚い扉の向こうから、抑揚の無い声が聞こえ、入室を促す。

（わあ……）

一步入った執務室は圧巻だった。

一番奥の、窓に背を向けた場所に重厚な造りのデスクがあり、そこに書類の山に埋もれるようにしてロベルトがいた。部屋の両側の壁を見ると棚と本棚があり、棚の方には書類の束が分類されて置かれていて、その手前に置かれた細長いテーブルの上にも、書類が山を築いている。そして、団員の証である懸章をかけた少年が一人、書類の山の間を行ったり来たりしていた。

「では、ロベルトさん。俺はこれで」

「ああ、ご苦労だった」

フィオナとアイシスを残し、門番が去ると、ロベルトは書類から顔を上げた。

「すまないな、ご婦人がたに立ち話をさせてしまいが……。さて、用件を伺おう」

フィオナはたちまち罪悪感に襲われた。

「すみません、こちらの都合で。お忙しいのでしたら、後日改めて参りますが……？」

「いや。ちょうど息抜きをしたかったところだ。気にしないでいい。――ハンス、少し休んでいていい」

「分かりました」

ちよこちよこ動いていた背の高い赤毛の少年は、一つ返事をする、と、すっと部屋の隅に移動した。

ますます邪魔して申し訳ないと思い、緊張が悪化してぶるぶる震えつつ、手にした籠をずいと差し出す。

「この間は、助けて頂いてありがとうございます。お、お礼にお菓子を焼いたんです。どうかお納め下さい！」

「……姉さん。お納め下さいって……」

後ろでアイシスがぼそりと呟くが、フィオナは必死過ぎてそれどころではなかった。部屋の隅からブツと吹き出した音が聞こえた気がしたのも、きっと気のせいだろう。

ロベルトはやや驚いた様子で籠を見つめ、少しして受け取った。

「ありがとうございます。……まさかこの為にわざわざここへ？」

「はっ、はい。あの、お礼は自分でするものですから……」

恐々と肩をすくめつつ、無意識に、じりじりと後ろに下がる。伸ばした前髪の向こうで、ロベルトが片眉を跳ね上げたのに気付いた。一気に青ざめる。

「も、もしかして、ご迷惑でしたか……？ それなら迷わず暖炉の種火にでもして下さいっ」

「いや、そんなことはないが……」

呆れたように返し、僅かに苦笑らしきものを浮かべるロベルト。

「俺が怖いんだろうに、わざわざ礼をしに来なくても良かったのに、と思っただけだ」

率直な言葉に、意味を理解するや慌てる。フィオナが人から距離を取りたがるのも、後ずさり癖があるのも、単に、人の相手が苦手なだけで、別にロベルトが怖いからではない。

「ち、違いますっ。私、その、怖くなんて……」

困り過ぎて泣きそうな声が出てきた。何て言おう。お礼を言いに来たのに、その相手を傷つけてどうする。

「そうそう、違いますよ、副団長さん。姉さんは人見知りをしているだけです」

アイシスが苦笑混じりに助け舟を出してくれたので、フィオナはそれに乗った。

「妹の言う通りです。私、人の多い所は苦手で……。確かに怖いですが、副団長さんが怖いわけではなくて……っ」

なんか駄目だ。言いたいことが口に出れない。

「うつつ、ごめんなさい！」

耐えきれなくなつて、謝るや妹の後ろに逃げ込んだ。

帰りたい帰りたい帰りたい。こんな所まで来てごめんなさいいっつ。

内心、謝罪と後悔の嵐が吹き荒れている。

でもでも、これだけは言おう。うん。あだ名被害者の同志であるロベルトにエールを送りたい。

「あの、私も、その、町の人にあだ名をつけられて……。だからその、副団長さんも大変でしょうけど、頑張つて下さい……」

「……………」

消え入りそうな声でそう言うと、ロベルトは怪訝そうに眉を寄せた。何か問おうと口を開きかけるが、その瞬間にフィオナ達の背後で扉が前触れなく開く。

「おい、ロベルト！ 来月の見回りのスケジュールで相談が……。つと、おや、お客さんか」

ひぎゃっ。

フィオナは飛び上がる程驚いて、妹の腕にしがみついた。

「……ハーシエル様！」

アイシスの喜色を含んだ声が響く。

「へ？」

フィオナは恐る恐るそちらを見た。金髪碧眼の背の高い美青年が立っている。青い糸で縁飾りや刺繍が施された白い上着と黒いズボン姿で、上半身には赤い懸章をかけている。そして、腰には警備団の紋章が刻まれた長剣を提げていた。

（き、キラキラしてる……っ）

フィオナはますます及び腰になった。アイシスの背中側に隠れる。怖い。なにこの絵本の中の王子様みたいな人。眩しくて居たたまれなくなるのだが。

「おや、僕のことを知ってるのかい？」

白い歯をきらりと輝かせ、好感のもてる笑みを浮かべるハーシエルに、アイシスは熱烈に頷く。

「ええ、勿論です！ この町の娘でハーシエル様のことをご存知ない娘なんて一人もいませんわ！ 申し遅れました。私、アイシス・トレーズと申します。それから後ろの方は、姉のフィオナ・トレーズです」

「ああ、トレーズ商会の所の娘さんか。しかもその姉ってことは……。へえ。じゃあ、彼女が噂の“目隠し姫”？ 本当に目を隠してるんだなあ」

じろじろと見られて、ますます居心地悪くて縮こまる。

「わ、私のような醜い者は、隠れている方がいいのです……。領主家の次男様の目にさらすものではありませんっ」

フィオナは小声ながらきつぱりと言い切った。

うう。ちよっと泣きそう。主に自分の言葉に。

フィオナがしょんぼりしたのが分かったのか、反対にアイシスの空気が苛烈になる。

「恐れながら申し上げます、ハーシエル様。女性の見た目について口にするものではありません！」

綺麗な少女に睨まれて、ハーシエルは後ろ頭をかく。

「これはこれは。申し訳ありませんでした、ご婦人方。噂に翻弄されるなど、警備を預かる者として失格でしたね。どうか許して頂けるとありがたいのだが……」

ちらつとハーシエルが伺うようにこちらを見るので、フィオナはぶんぶんと首を縦に振った。アイシスはそれで睨むのをやめて微笑む。

「姉は許すそうですね。もちろん、私も」

「それはありがたい」

ハーシエルは胸に手を当て、気障ったらしく礼をした。

フィオナは戦慄し、あわあわとアイシスを盾にする。どうせアイシスはハーシエルに見惚れているだろうから、気にしない。

「あ、あの。お忙しいようなので、この辺で失礼します。本当にありがとうございますでした。……行きましょう、アイシス」

「え？ ええ……。お邪魔しました。ハーシエル様、お会い出来て光栄でした」

「こちらこそ、麗しいレディー」

やや不満そうだったが、素直に頷いたアイシスに、ハーシエルは片目をつぶってみせる。途端にアイシスはぼつと頬を赤らめた。

フィオナは夢見がちにぼんやりするアイシスを引っ張り、大急ぎでロベルトの執務室を逃げるように後にした。

*

「隅に置けないなあ、ロベルト。いつの間にトレース商会の姉妹と知り合ったんだい？」

「三日ほど前に、具合が悪そうにしていたのを家まで送り届けただけだ」

ハーシエルとは乳母兄弟であり親友でもあるので、身分差はあれどロベルトは特に敬語を使わずに話す。そうしないとハーシエルが

嫌がるのだ。

あつさり答えると、ロベルトはちらりと籠を見た。そう言えば、菓子と言っていたがどんなものだろう。

ずっと書類仕事をしていたので、糖分が欲しい気がした。籠の中身を見ると、黄色い布の包みがあり、走り書きのされたメモが入っている。それを摘まんで目を通す。

“たくさん焼いたので、小腹が空いた折にでもお食べ下さい。甘いのが苦手でしたら、どなたかに差し上げて下さい。”

綺麗な字でそう書かれている。いったいどれくらいの量を入れたのかと布の包みを開ければ、籠のサイズ程の円形をしたアップルパイが入っていた。それも五枚も。

「へえ、ちなみにどっちを？」

ハーシエルが興味津津に問うてくるのを、ロベルトはやや首を傾げて見た。

「姉の方だ。——ああ、ハンス、茶を用意してくれないか。君の分も」

「分かりました、副団長」

「僕の分もよろしくね」

「……畏まりました、団長」

てきぱきと返事をし、ハンスが執務室を出ていく。

「なんだ、目隠し姫の方か。てつきり、春の女神のようだと言われている妹の方かと」

「その目隠し姫というのはなんだ？ それに、そんなにあの姉妹は有名なのか？」

ロベルトの問いに、ハーシエルは頷く。

「有名だとも。姉の方は、あまりの醜さに前髪を伸ばして顔を隠しているらしく、“目隠し姫”と揶揄やゆされているらしい。そして、反対に妹の方は、その可憐な美貌のために求婚者が後を絶たないとか。妹に近付く為に姉に求婚する輩もいるらしく、父親や妹がそれをはねのけているらしい。極めて姉妹仲が良いらしいね」

ロベルトは先程の二人の様子を思い出した。

フードを目深に被り、前髪で鼻の上まで隠した姉が、おどおどと妹の方に寄りそっている様子を。目隠し姫と呼んだハーシエルに、妹が憤然と抗議する様子を。

トレーズ家の姉へのあんまりな言いように同情が湧く。最初は、ロベルトと話す時の他の女性同様に、ロベルトの無愛想ぶりに怯えているのだと思って気にしていなかったが、それが単なる極度の人見知りのせいだと知ったから余計に。それに、よくよく考えてみれば、心根のいい娘だ。怖がっていても礼をきちんと言い、後日こうして礼にやって来るのだから。更に言えば、ロベルトと話す時よりハーシエルに声をかけられた方が怯えていたのが、少し痛快だったのもある。普段なら逆だ。

「ハーシエル、女性のことをそんなあだ名で呼んでやるな。仮にも女扱いに長けていると豪語しているなら、余計にな」

「仮にもってなんだい、ロベルト。本当のことだよ」
にやっと笑うハーシエル。

その傲岸不遜な、けれど女性にきやあきやあ言われる綺麗な顔立ちをロベルトは一瞥して溜息をつく。実際、女にもてるので、反論出来ない。

そこへハンスが茶器と皿を乗せた盆を携えて戻って来た。盆をロベルトの机に置くと、すぐにまた出て行き、椅子を一脚持って戻ってくる。

「どうぞ、団長」

「ありがとう、ハンス」

ハーシエルは礼を言い、椅子に座る。そして、ハンスの注いでくれた茶をおいしそうに飲んだ。

一方、ロベルトはハンスが持ってきた皿にアップルパイを乗せ、それぞれに配る。

そして、茶を飲んでアップルパイを口に運び、驚きに目を丸くした。

表情が読みとりにくい上司の変化にハンスは警戒する。まさか毒でも入って……？

「どうかしましたか、副団長」

「……美味しい」

ハンスの心配は杞憂だった。が、ハンスは逆に驚いた。ロベルトはあまり食事に執着しないタイプなのだ。

「そんな、鉄の表情が変わるくらいに美味しいんですか？」

思わず口から失礼な言葉がついて出たくらいには驚いた。ロベルトはあえて聞き流し、顎^{あご}をしゃくる。

「食べてみる」

「はいっ。では失礼して」

立ったまま、むしろりと遠慮なくがつついたハンスは、一口食べた姿勢のままぴたりと動きを止めた。青目に涙を浮かべる。

「お、おいしいいいいっ！」

そして物凄い勢いで完食すると、感極まって騒ぎ立てる。

「なんなんですか、これは！　こんなおいしいパイ、初めてですよっ！　風見鶏亭のものよりおいしいだなんて！」

風見鳥亭というのは、警備団から近い場所にある食堂で、地元でも人気の高い、とてもおいしい食事を提供する食堂だ。警備団の敷地内には食堂がないので、団員が愛用している店でもある。

「本当だ。これは美味しい」

ハーシエルまで驚いた顔をしている。

「姉でこの技量。妹殿もそれなりに上手なのだろうな」

そして、一人うんうんと頷いている。

先程からやたら姉妹の話をするので、ロベルトはうろんな顔をする。

「お前、もしかや……」

「なんだい、ロベルト。綺麗な女性を見かけたら、声をかけるものだ」

つまりは妹の方にちょっかいをかける気満々らしい。

まあ、一週間前に前の恋人と別れたはずだから、問題ないだろうが……。

「子ども相手に……」

「彼女は十六だよ。結婚適齢期。問題無い」

楽しげに笑うハーシエル。

「ほどほどにしておけよ。トレーズ商会を怒らせると、領主家が困るだろう」

「分かってるよ」

……本当に分かっているのだから。

ロベルトはアップルパイを咀嚼そしゃくしながら、妹の方が逃げ切れることを祈った。

が、まあ無駄だろう。ハーシエルを見た時の妹の方の態度といったら、完全に恋している娘そのものだったから。

三章 鉄仮面さんの悩みごと

「きゃあああ、姉さん姉さん！ 聞いて聞いてーっ！」

黄色い悲鳴を上げながら、どたばたと階段を駆け上がったきたアイシスは、フィオナの部屋の扉を勢いよく開けた。

（また、ハーシエル様のことかしら）

フィオナは検討をつけ、裁縫の手を止めて、体ごと扉の方を向く。今日は趣味でハンカチに刺繍していたのだ。あと少しで終わるところだった。

焦げ茶色をベースにしたフィオナの部屋は、ベッドと机と椅子、それから本棚や筆筒やクローゼットがあり、あちこちに花やフィオナ作の小物が飾られていて、女性らしい雰囲気になっていた。ここはフィオナの安全地帯であり、憩いの空間だ。

アイシスも料理や裁縫の腕はあるが、フィオナ程ではなく、ごく普通なものだ。だから、ときどきアイシスに頼まれて縫いぐるみや小物を作ることもあったし、アイシスの誕生日にはフィオナ手製の服やアクセサリーをプレゼントしていた。それを証拠に、部屋の隅には、作っている途中のワンピースをかけたトルソーがある。夏服を頼まれていたのだ。

アイシスはフィオナの腕を買ってくれていて、その辺の仕立屋よりセンスがあるから好きだと言ってくれる。それが嬉しくて、つい手をかけて作ってしまうのだ。それに可愛らしい妹に可愛らしい服を着て欲しいという姉心もある。……ややシスコン気味なのは自分でも分かっている。

「これ見て！ ハーシエル様が下さったの！ 今度、一緒にお食事

しませんか？　ですって、いやあああ！」

アイシスは花束を抱きしめて、身をよじって叫ぶ。
嬉しいのか嫌なのかどっちなんだろう。

「花を下さったって、まさかここまでいらしたの？」

少々の驚きをこめてアイシスを見る。

「ええ！　店にわざわざいらして、花束を下さって、デートの申し込みをして下さったのよ。素敵すぎるわ。今日は嬉しすぎて眠れない気がするっ」

まあそれだけ興奮していれば確かに眠れなさそうだ。

きやあきやあと浮かれているアイシスに、フィオナは確認をとる。
「それで、いつデートに行くの？」

「明後日よ！」

「良かったわね、アイシス」

「うん！　ありがとう、姉さん！」

アイシスが嬉しそうなので、フィオナも嬉しいが不安も残る。なにせ、あの、色恋に浮名うきなを流しているハーシエルが相手だ。平民の娘との恋愛を遊びと考えていたら、アイシスが傷つく可能性がある。でも、人知れず恋していたアイシスの思いに光が降り注いだのは幸運なことだ。

（大丈夫かしら……）

もし何かが起きたら、慰められるようにしておこう。

フィオナも覚悟を決めなくては。

（明後日なら、コサージユくらいは作れるかしら）

アイシスのことだ、めいっばいおめかししてデートに挑むだろう。そんな妹を応援したい。

フィオナの頭の中には、アイシスに似合う色のコサージユが浮かび始めていた。それに、材料も。

裁縫箱や布地や端切れを入れた箱を覗き、考える。布は足りているけれど、糸と飾りが足りない。どうせなら飾りボタンをつけた花

のコサージュにしたい。

「ちよつと買い物に行つてくるわね」

「えっ！」

フィオナの部屋でくると回つて喜びを体全体で示していたアイシスは、ぴたつと動きを止める。

「こないだ貧血になつたばかりでしょ。私も行こうか？」

「大丈夫よ。今日は調子が良いから」

穏やかに言うと、しばらくフィオナの顔をじろじろ見ていたアイシスは頷いた。

「うん、確かに血の気はいいみたい。それなら私は家にいるわ。今日は私が夕飯の当番だから」

「留守番よろしくね」

アイシスにやんわりと声をかけると、フィオナはフード付きの緑の外套を着て、フードを目深に被り、手に買い物籠と財布を持つ。

たまに、見本で作った品を見た客がそのまま買い取ることもあるので、その分のお金はフィオナの小遣いになっているから、フィオナは結構小金持ちだ。フィオナの作る見本品のお陰で布が売れることもある為、父母はフィオナが物作りに金をかけるのを奨励してくれている。ありがたいことだ。

フィオナはアイシスとともに自室を出て、トレース商会の隣に建つ自宅を出て行った。

*

午後三時過ぎ。

夏の日差しが少し緩やかになってきた時分、ロベルトはメリーハドソンの街の見回りに出ていた。

本来なら副団長のする仕事ではないが、ロベルトは自分の目で街を見て回ることを重要視していた。普段の状況を知っていれば、緊急時に対応がきく。

（しかし、暑いな……）

色の明るい服が苦手なので、黒や灰色をよく着ているのだが、この色は夏向きではないとつくづく思う。

内心で、こんな日に何故ハンカチを忘れてきたんだと自分の失態を呪いつつ、自分の執務室に置きっぱなしにしている鞆かぶとに思いを馳せる。

しかも、つい先ほど、メインストリートで引ったくりを一人捕まえた時に立ち回り、とても暑い。汗だけで気持ち悪いくらいだ。

引ったくりから取り返した鞆は盗まれた女性に返し、引ったくり自体は近くを通りがかった部下に引き渡した。お陰で暑苦しさは減ったが。

「はあ……」

さっきのことを思い出すと、溜息が出る。

被害者の女性がロベルトを見た時のあの顔ときたら。鞆を取り返した旨や、以後気を付けるようにと注意喚起をするロベルトを、笑顔を取り繕い損ねた引きつった顔で見て、話が終わるや礼を言っ
てそそくさと帰っていったのだ。

——何故だ。

ロベルトには訳が分からない。

小さい頃からそうなのだが、ロベルトは普通に話しかけているだけなのに、相手が異様に怖がるのだ。前にハーシエルに聞いたところによれば、無表情で淡々と語るのが怪談話をしているみたいで恐ろしいとのことだが。

女は強張った顔をし、子どもは急に泣き始める。お陰でロベルトは女や子どもが苦手である。その辺を歩いていた犬にまで怯えられた時は、本気でどうしようかと悩んだものだ。

一方、子どもを除いた男連中には、女に媚こびないところが格好良いなどと言われて慕われる。女性には努めて優しく声をかけているつもりであるロベルトからすれば、そんな風に言われる覚えはない。比較対象がハーシエルなら、確かにそう見えるのかもしれないが。

見回りを続行しながら、ふとロベルトは向こう側から歩いてくる少女を見かけて足を止めた。

緑色の外套がいろのフードを目深に被った少女。前髪のせいで鼻から下しか顔は見えない。道の端を歩く少女は、どこか浮かれた様子で軽やかに歩いている。

あの娘は、確か……。

「アップルパイの……」

思わず名前より先にそちらを思い出したことは、責められないと思われる。それだけあのアップルパイは絶品だった。

ロベルトの眩きを拾ったのか、フィオナはきよろりと周りを見回した。そして、ロベルトを認め、一瞬、ぎよつと後ろに後ずさる。

「ふ、副団長さん……」

フィオナの小さな唇が、小さな声で言葉を紡ぐ。

声は小さいが、綺麗な声をしている。

低い背をした娘の方が良いという価値観がある中、フィオナは若干背が高めだ。しかし、目が隠れているとはいえ、噂ほど醜いとは思えないのだが。

ハーシエルの話の思い出して、ついまじまじとフィオナを観察してしまっただけで、可哀想なフィオナはすっかり顔を赤くして縮こまってしまった。そういえば人見知りだったとロベルトが思い出した時にはもう遅い。

「あ、あの、私、何かしちやいましたか……？」

小さく、泣きだしそうな声が問う。

警備団員に睨まれれば、一般人は何かしたのかと不安に思っただろう。

「いや、すまない。何でもない。……あのアップルパイ、おいしかった」

少し焦った拳句、そんなことしか付け足せなかった。

しかしフィオナにはそれで十分だったらしい。すくめた肩から緊張が抜け、ほつと息を吐く。

「お口にあつて良かったです。副団長さんは見回りですか……？」

ぼそぼそと囁くような声で問うフィオナ。首を傾げる動作に合わせ、緩やかに波打つ黒髪が揺れる。髪黒さもあって、僅かに覗く肌の白さが際立って見えた。ロベルトも黒髪だが、日に焼けているからこんな風には見えないと思う。

「そうだ」

「副団長さんみたいな偉いお立場でも、見回りされるんですね」

「本来はする必要はないが、俺は好きで自分からしている」

「そうなんですか。副団長さんがご立派な方という噂、本当なんですね。その方が街の人達も安心しますし、同じ街の者としても嬉しいです」

静かな声が穏やかに告げる。打算も何も無い、心からそう思っているというような言葉だ。

「俺が見回りをすると、何故喜ぶ？ 誰が見回っても同じだろう？」

ロベルトの問いに、フィオナは首を振る。

「いえ。同じではないと思います。偉い方が街を見守って下さるとちゃんと街のことを考えて下さっているように思えますから」

「そ、そうか……」

真つ直ぐな言葉に、柄にもなく照れてしまう。

それならば、ハーシエルにも見回りをして貰った方が効果的かもしれない。だが、あいつが見回りをする、女に取り巻かれて仕事にならないから、邪魔かとも思う。

「……買い物か？」

特に口にすることを思いつかず、なんとなく買い物籠を見て問いかける。いや、買い物籠を持っている時点で買い物しか用事はないだろうに。

ロベルトの端的な問いにも、フィオナは気分を害した様子もなく頷く。

「……はい。あの、ハーシエル様が妹と食事に行くそうなので。妹の為に、アクセサリーを作ろうかと」

その材料の買い出しらしい。

しかし問題はそこではない。あの男、動くにしても早すぎやしないか。あれからまだ二日しか経っていないのに。

「ハーシエルが？」

念の為、確認する。

「はい。妹はとても喜んでいて。でも、少し心配です」

何が心配なのかは、言わずとも分かった。ハーシエルの浮名など街の者なら誰でも知っていよう。

「そうだな。……俺も心配だ」

主に、いつかハーシエルが背後からナイフで刺されないかが。

「しかし、君は器用だな。あの菓子といい、アクセサリーまで作る
とは」

「私は、家の手伝いをするくらいしか能がありませんので。私の家は布地商ぬのじしょうをしていますから、売る時の見本用に、ハンカチや服を作るのです。それで自然と覚えただけです」

どこか困ったように言うフィオナ。謙遜しているというより、正直に言っているという方が正しい気がした。

「見本になるものを作るのなら、大したものだ」

「……ありがとうございます」

恐縮したように身を縮めるフィオナ。褒められ慣れていないのだろうか。

「あ、あの。これ、よかつたら使って下さい……」

逡巡した様子で、籠から取り出した物をフィオナが差し出す。

「汗を、その、たくさんかかれていますようですから……」

見れば、白い木綿もめんのハンカチだ。オウムを模したと思われる、見事な鳥の刺繍が緑の糸で施されている。

思わずそれに見とれると、フィオナの手がぶるぶる震えだした。

「だ、大丈夫です。清潔です。まだ使ってません」

途切れがちな言葉。どうやらなかなか受け取らないのを、清潔さを疑っていると思っただけらしい。

このままでは引つ込めるだろうと思い、即座にハンカチを受け取る。四角に折りたたまれたそれを広げると、オウムの全体像が頭にあじわなった。

「……見事な刺繍だな」

「趣味で作ったものなので……。そんな褒められるものでは。そのまま使つて頂いて結構ですよ？」

「君が作ったのか？」

「え、ええ……」

フィオナは籠を握りしめ、肩をすくめた。

これはますますすごい。こないだの菓子もそうだが、裁縫の腕もプロ顔負けのようだ。

感心していると、急に落ち込んだフィオナが顔を上げた。

「す、すみません。出過ぎた真似を……。副団長さんでしたら、きっと素敵なお相手がいらつしやいますでしょうに、こんな不器量な者から物を渡されるなんて不快でしょう。気付かなくてすみませんや、やつぱり返して下さい」

伸びてきた手を避け、思わずハンカチを持った手を上げてしまう。「迷惑に思った覚えはない。正直、くれると助かるのだが。ハンカチを忘れてきてしまつてな、困つていたんだ」

「……そうですか？」

やや疑わしげに問い、けれど納得したのか頷く。

「お邪魔でしたら、暖炉にくべるなり、庭に埋めるなり好きにしてください」

「しないから安心しろ」

苦笑する。

いくらロベルトが鉄仮面と言われたり冷たいと言われたりしていても、そこまでひどい真似はしない。

「それでも警備団の副団長なのだが、そんなに俺は極悪非道に見えるのか？」

つい疑問が口から出た。客観的にそうなのかと思っただけだ。

が、問われた娘は仰天し、三步ほど後ずさると、ぶんぶん首を振る。

「ごめんなさい！　そういうつもりで言ったんじゃない。あの、大丈夫です。副団長さんは優しいと思いますっ」

その返答にはロベルトも仰天した。

優しいなどと。間違っても女子供には言われたことのない台詞だ。「それならありがたい。あんまり周りに怖がられるのでな、そう見えるのかと思っていたんだ」

「そ、そうですか……」

ロベルトがフィオナに怒ったわけではないと分かったのか、フィオナの恐慌は静まった。

「フィオナ殿、だったか？　ハーシエルのことと何か問題があるなら、いつでも俺の所に相談に来るといい。あいつとは親しいから、たいていのことはアドバイス出来ると思う」

「……よろしいんですか？」

恐る恐る問い返すフィオナ。

なんだろう。だんだん小ウサギのように見えてきた。あんまりびくびくこわごわしているの、外を警戒している小動物みたいである。

「ああ。では、俺は見回りを再開するので、これで失礼する」

「あ、はい。お気遣いありがとうございます」

小さく会釈をし、ロベルトの横を通り抜けて歩いていくフィオナ。そのほっそりした後ろ姿を何となく見送ってから、貰ったハンカチで汗を拭った。

そして、木綿のハンカチから花の香りがして、やや居心地の悪い気分を味わった。

なんだかどきつとしてしまったことについて、自分は悪くないと言いつける。幾ら鉄仮面といわれようとロベルトも男だ。良い香りのする貰い物をしては落ちつかない気分になるのも当然だと思うのだ。

（なんだかな。なんなんだろうな……）
なんとなく、この姿をハーシェルに見られたら笑われそうなのが
した。

三章 鉄仮面さんの悩みごと（後書き）

作者の独り言

ここまで書いてみて、だんだん自分がいたたまれなくなってきました。

やはり恋愛小説苦手です……。

ふあ、ふあいと。逃げるな自分。

四章 目隠し姫、相談する

「副団長、そのハンカチ、どうかされたんですか？」

書類を書く手を止め、ロベルトはハンスを見る。

ハンスは今年入ったばかりの新入りで、実家が商家で文字や数字に強いというので、ロベルトの手伝いをしてもらっている少年だ。

警備団は、体を動かすのに長けていても、書類仕事に不得手な者が多いからとても助かっていた。

「どうかしたとは？」

「昨日から、やたらそれを見てるので、何かあるのかと」

新人とはいえ、もう半年の付き合いだ。同室で仕事をしているのだから、ロベルトが普段と様子が違うのならすぐに気付くのだろう。ロベルトは少し苦笑をしつつ、なんとなくデスクの端に広げて置いているハンカチを見る。昨日、フィオナに貰ったものだ。

帰ってくるなり石鹸で洗って干し、乾いたものをデスクに置いて、何となく眺めたりしていた。あんまり刺繍が見事なので、芸術品みたいなのだ。何度見ても感心してしまう。

「昨日、見回りの時にフィオナ殿に会ってな。頂いたんだ」

「え、あのトレード商会の方ですか？ ええと、どっちですか？」

「姉の方だ」

「ああ、“目隠し姫”ですね！」

ハンスの切り返しに苦笑が零れる。

「ハンス、女性のことをそんな風に呼ぶものではない」

「あ、すみません。つい」

ハンスは首をすくめて謝る。

「このハンカチは彼女の手製らしい」

「そうなんですか？ すごいなあ。パイといい、裁縫まで得意だな

んで。これで器量良しなら向かう所敵無しでしたでしょうに……」
噂を思ってたか、ハンスは不憫そうに呟く。

「でも、ブスは三日で慣れるって言いますし、家に帰ってあの料理を食べられるんなら、結婚するのも悪くないかもしれないですね!」
あけっぴろげに言い切るハンス。ロベルトは頭痛を覚える。

「ハンス……。失礼だぞ」

「うっ、すみません!」

ハンスはまたもや首をすくめる。

仕方ない奴だと思いつつ、用件を言いつける。

「……フィオナ殿の妹が、ハーシエルと食事に行くそうだ。もしフィオナ殿が来たら通してやってくれ。……相談があれば乗ると約束した」

神妙にロベルトが言うと、ハンスは天を振り仰いだ。

「また一人、罪の無い女性が団長の毒牙に。あんまりです、神様」

そして、不憫そうに肩を落とし、ハンスは大きく頷く。

「分かりました。フィオナさんがいらつしゃったからお通しします。」

……出来れば相談に来ないことをお祈りしますが」

「ああ……」

それには全くの同意見だ。

フィオナがアイシスのことで相談にくるということは、間違いなくハーシエルがアイシスにひどい真似をしたということの意味する。「俺、嫌ですよ。修羅場に巻き込まれたり、女性が泣きながら団長に会わせるとわめかれる現場に立ち会うの」

つまりハンスは何度かそういう場面に立ち会っているわけだ。新人で、まだ半年目なのに。

「俺だつて嫌だ。しかも俺の顔を見たらますます泣くんだぞ。やってられん」

今度は、ハンスはロベルトへ不憫の視線を向けた。

「……副団長、お気を強くもたれて下さい。そういう感じに生まれている以上、仕方ないです」

「……………ああ」
なんていう失礼な奴だと思ったが、ハンスの目には励ましの思いが浮かんでいるので、苦言を呈するのをぐっところえたロベルトだった。

*

アイシスがハーシエルと食事に行く約束をした日。

明るい緑色のワンピースに、フィオナ特製のピンク色のコサージュをつけたアイシスが、迎えに来たハーシエルと出かけていくと、フィオナはほつと息を吐いた。

花を模したコサージュはアイシスにとってもよく似合っていたし、何よりアイシスの機嫌が最高潮に良くて嬉しいのだが、なんともなくもやもやするのだ。

きっと相手がハーシエルだからだ。大事な妹が傷つけられやしないかと、フィオナは気が気でない。

父母も、アイシスがハーシエルとデートに行くのには渋い顔をしていた。噂を知っているのだ、親としては心配して当たり前である。でも、これも一時の夢だと、それで諦めがつけばいいとも父は言っていた。高嶺の花への恋を昇華させるには、これくらい必要だと上手くいくのならそのままにしておけばいいし、とりあえず様子見をしよう。

フィオナ達はそう示し合わせ、アイシスの好きにさせることにしたのだ。

「よいしょ……………」

フィオナはトレーズ商会の倉庫で、棚から木箱を抱え下ろす。もやもやする分、働いて気を紛らわせようと思い、在庫の確認をしているのだ。

中身を確認し、帳簿につけ、新しく入荷した品を箱に入れて保管し、また帳簿につける。そういう作業の繰り返しだ。

倉庫は涼しいので、貧血になりやすいフィオナにも安全だから、父母も倉庫整理なら任せてくれる。ただ、フィオナが対人恐怖症気味なのを理解しているので、店番はしなくていいことになっていた。見本品作りや家事もしているし、裏仕事を支えているから構わないそうである。

代わりに、人当たりの良いアイシスがよく店番をする。

店には筒状の木箱や奥行きのある棚があり、そこにロールした布を置いていて、幅メートルから販売している。たまに仕立屋や行商人、領主家や貴族などがロール一本分を買っていくこともあり、それなりに繁盛している。

市井の者は、自分で衣服を作る者が多いので、そうした婦人の相手を店番がするわけだ。ときどき井戸端会議の場所と化していることもある。

ただ、糸やボタンなどは扱っていないので、布地だけになるのだが。

いくらこの町で有力な商会でも、人手はそんなにいらないので、従業員は男が三人いるだけだ。それも買い付けと運搬の為に雇っているようなものである。父であるノルマンの膝が悪いから、その分の人手だ。

その日は、そうやって過ごしていたが、アイシスが帰ってくるまで落ちつかなかった。

「すごく素敵だったわ、ハーシエル様。さりげなくエスコートして下さるし、食事もおいしかったし、お話も楽しくて」

夕方、ハーシエルに送られて帰ってきたアイシスは、フィオナの部屋で夢見がちにぼんやりしながら、ほうつと感嘆の息をついた。

フィオナは椅子に座ったまま、幸せそうなアイシスを見る。

「……そ、それで？」

その後何かあったりしないだろうかという不安が胸をよぎる。

アイシスは急に頬を赤らめた。

ふふふつと口元を手で覆って笑う。

（なになに、なんで急に赤くなるのっ）

まさかハーシエル様に何かされたとか！？

心臓が爆発しそうなほど落ちつかない。

「えへへー、こう、ね。騎士の礼みたいに、手の甲に口づけをして下さったの！ 物語みたいで素敵だったわ！ うふふつ、しばらく手を洗えないわあ」

きやあきやあと騒ぐアイシス。

フィオナはほっとした。

なんだ、手だけか。良かった。

「それからね、姉さん。今度は植物園の散策に行きましょうって言うて下さったの！」

緑色の目をキラキラと輝かせ、アイシスは両手を握りしめて言う。

「え、い、いつ？」

植物園ですって！？

フィオナは内心でかなり動揺した。

メリーハドソンの西にある植物園といえば、恋人達のデートスポットで有名だ。他には高台で夜景を見るコースや、東の森にある花畑散策コースも有名である。

植物園はその中でも少し上品なデートコースで、入口付近でお茶を飲めるスペースがあるらしい。そこで注文して茶を頼んでもいいし、お弁当を持ちこんでも良いのだとか。

「一週間後よ！」

アイシスは浮き浮きと答える。

「あの、アイシス……。ハーシエル様とは、その、お付き合いすることになったの……？」

恐る恐る尋ねる。

浮かれた気持ちに水を差すなら悪いけれど、はっきり聞いておきたかった。

アイシスは愛らしい顔をぼつと赤く染め、目を潤ませて頷く。

「実は、そうなの。恋人扱いして下さるって！」

フィオナは目を丸くした。

まさかデート一回目にして付き合うことが決定するとは予想外だった。ハーシエルが女遊びの激しい人だというのは本当だったのか。信じられない気持ちが通過すると、次にやって来たのは喜びだった。

「おめでとう！ よかったわね、アイシス！」

「ありがとう、姉さん！」

目を潤ませたままのアイシスと手を取り合って、部屋の中をきやあきやあ飛びまわる。フィオナも目が潤んできた。

ああ、あんな風に恋していた妹が、思い人と結ばれるだなんて。なんて素敵なことだろう。

そして、遅れてもややがやって来て、複雑な思いに駆られる。

もしかして静観する選択は間違いだったのかしら？ アイシスはハーシエルと付き合わない方が幸せのまま、夢を見たままで済んで良かったんじゃないかしら？

でも、幸福そうに微笑むアイシスの綺麗な笑顔を見ると、心配するのも場違いな気がしてくる。

何となく、脳裏にロベルトの顔が浮かんだ。

ハーシエルのことと相談があればいつでも来ていいと言ってくれていた。

（せめて本気かどうかだけでも分からないかしら……）

そうしたら、このもやや感も少しはおさまりどころが見つかる気がする。

乳母兄弟のあの方なら、その辺りのことが少しは分かるかもしれ

ない。

＊

フィオナが訪ねてきたという知らせを聞いて、ロベルトは瞠目^{ごもく}した。

（……幾らなんでも早すぎやしないか）

ハーシエルの奴、もう問題を起こしたのか？

相談を受けると言ってから、まだ二日しか経っていない。もしかアイシスが食事に行った先で何かあったんだろうか。

一応、ハーシエルは紳士的な男だと信じていたのだが、ロベルトの勘違いだったとか？

内心で激しく動揺しつつ、やって来たフィオナを出迎える。デスクの椅子を立ち、戸口まで歩いていく。

「フィオナ殿、何か問題が？」

「……すすすみませんっ、お忙しいのに何度もお邪魔して！」

ロベルトが近付いた瞬間、フィオナは後ずさって、案内した門番が閉めていった扉に背中から激突した。そしてぺこぺこ頭を下げる始める。

謝る声はすっかり泣きそうだし、前に執務室に来た時みたいに怖がつているらしく、手にした籠の取っ手を掴むほっそりした手は、ぶるぶる震えている。

フィオナの恐慌っぷりを見て、ハンスが横でぶつと吹き出した。

確かに大袈裟な仕草ではあるが、笑うことはないだろうに。

部下を軽く睨^{にら}んでから、やや距離をとって顔を上げるように言う。
「そんなに謝らなくていい。……ハーシエルが妹殿に何かしたのか？」

こんなに怖がるのにやって来るのだから、よっぽどのがあったのだろう。

真面目に問うと、笑っていたハンスも緊張したようにフィオナを

見つめた。

「……実は、ハーシエル様とアイシスがお付き合いすることになりまして」

「ふむ？」

その何が大問題なんだ？

ロベルトはよく理解出来ず、僅かに首をひねる。ちらりとハンスを見ると、そちらも怪訝そうな顔をしていた。

「あの、ハーシエル様は、そのう、たった一度デートしただけで、お付き合いを申し出るのが普通なのでしょうか……？」

小さな声が、不安そうに問うてくる。

ロベルトは今までのことを思い返す。概ね、そんな感じだった。

「普通だな。一度デートして、合わなくてそれっきりのこともあったが。付き合う気になったということは、少なくとも妹殿のことが気に入ったんだろう」

「そ、そうなんですか……」

答えを聞いて、フィオナはほっと胸を撫で下ろす。

そしてじつと爪先を見つめた後、思いきったように訊く。

「ハーシエル様は、本気なんでしょうか……？」

ここに来て、ようやくフィオナが何をそんなに心配しているのか分かった。

たった一度、食事に行っただけで付き合おうと言い出すハーシエルが、妹と本気で付き合う気があるのか、遊びではないのかと心配しているのだ。

だが、こればかりはロベルトはハーシエルではないので分からない。

「……すまない。そこまでは分からないな。あいつが何を考えているのか、俺もときどきよく分からなくなる時があるのだな」

「……そうですよね。こんなこと訊いてごめんなさい。アイシスがあんまり喜んでいるので、気になったものですから……」

緑色のフードを被った頭が、しょんぼりと下を向く。

「いや。相談に乗ると言っておきながら、肝心なことを答えられず申し訳ない」

「いいえっ、厚かましく相談をもちかける私も悪いのですっ。父や母とは、様子見をすることに決めたのに、落ち着かなくて……」

消え入りそうに弱々しい声が呟く。

顔も分からない少女なのに、見ているととても手助けしたい気になつてくる。不思議なものだ。

落ち込んだフィオナを前に、どうしたものかと後ろ頭をかきながら、ロベルトは途方に暮れる。

正直、女こどもに怖がられるせいで、あまり若い女性と長く関わったことがないのだ。こういう風に頼られるのも初めてで、どう対応するのがベストなのか、すぐに思いつかない。

ハーシエルと同じ二十四歳だというのに、なんだろう、この差は。「あ、あの。相談に乗って下さってありがとうございます。少しすつきりしました。これ、差し入れに持ってきたので、よろしかったら召し上がって下さい」

しかしフィオナは一人納得したらしく、ふいに顔を上げると手にした籠をロベルトの方に差し出した。

「差し入れなど、よかったです……」

「いえっ。相談に乗ってもらうのに、手ぶらでなんて来れませんっ。大したものではありませんし、もっと気のきいた物を持ってこることが出来たらよかったんですが……」

また落ち込みそうになっているので、急いで籠を受け取る。

フィオナは浮き沈みが激しいというか、やや後ろ向きな思考をする。放っておくと、また、暖炉にくべるだの庭に埋めるだの言うに違いない。

「ありがたく頂くことにする。……中を見ても？」

「は、はいっ」

了解を得て、籠の中の布包みを開く。ほうれん草のキッシュが入っていた。焼き立てなのか、籠があたたかい。

「……男の方は食べ物の方がいいかと思ひまして。お口に合わなかったら、捨て」

「捨てないから、安心しろ。暖炉にもくべないし、庭にも埋めない」
やはり言い出したので、きっぱり否定する。

「そ、そうですか……？」

気の抜けた様子で小首を傾げるフィオナ。
何故そこで疑うのか謎だ。

「せっかくだ。休憩にしよう。君も一緒にどうだ？」

「わっ、私もですか！？ いいえ、そんな。もう退散しますっ！」
フィオナは裏返った声で返事をした。

「暑い中ここまで来たのだから、喉が渴いているだろう。ハンス、第二客室に茶を用意してくれ。三人分だ」

ロベルトの指示に、ハンスの目が輝いた。

「ありがとうございます、副団長！ 俺、ここ勤めで良かったです。
うまいもんが食える！」

本音を叫びつつ、ハンスは執務室を出ていった。

「こないだのパイを気に入ったらしくてな。俺もあんなうまいものは初めて食べた」

部下の発言をごまかしついでに言うと、フィオナの口元が笑みを
作った。

「おいしいと感じたのなら、きっと母のお陰です」

「母親の？」

「はい。料理を教えてくれたのは、母なので」

穏やかに、自分より教えた母がすごいのだと嬉しそうに微笑むフ
イオナの姿に、ロベルトも自然と笑みを浮かべた。

「——そうか。母は偉大だな」

「はい」

笑みを含んだ声が答える。

なんだか胸の奥がじんわり温まる言葉だ。

仕事ばかりで疲れているのだろうか。こんな遣り取りが、ほっと

心に響くのは。

その後、さりげなく客室まで誘導したら、我に返ったフィオナがわたたと帰ると言い出した。

が、ハンスが、せっかくお茶を用意したのに……と残念そうな顔をした瞬間、帰るのを諦めた。どうも人が良いらしい。

＊

「フィオナさん。俺、今度はケーキが食べたいです！」

「ええ？」

キッシュを食べ終わるや、ハンスがいきなりそんなことを言い出したので、フィオナはきよとした。

家族以外の人に食べ物のメニューをリクエストされたことがなかったので、びつくりしたのだ。

「……ハンス、厚かましいぞ。すまん、フィオナ殿。部下の教育が足りていなかったようだ」

淡々と口出ししながら、ロベルトが妙な威圧感をもってハンスを見たので、ハンスは頬を引きつらせて背筋を正した。

「明日辺り、特別に訓練をつけてやろう」

「ひいい、そんな、副団長ーっ！」

青い顔をして悲鳴を上げるハンス。

そんなハンスをフィオナは目を丸くして見る。

「そんなに副団長さんの訓練は大変なんですか？」

「大変なんてものじゃないですよ、フィオナさん！ 副団長の訓練は鬼と言われていてですね！」

それをちらりと見るロベルト。

「……ほう。ハンス、それを言った者も連れて来い。鬼というレベルでなくなるまで、鍛えてやる」

「ひいい、やっぱ鬼じゃないですか！ すみません、レネ先輩にゲ

イク先輩っ！ 巻き込みます！」

さりげなく先輩二人を巻き添えにしつつ、ハンスはまた青い顔で叫ぶ。

見ていたフィオナは吹き出した。あんまり怯えるので、滑稽だったのだ。

「……今の時期なら桃のタルトかしら」

「えっ、作ってくれるんですか！」

ハンスはばあたと表情を明るくする。

ハンスがアイシスと同年代くらいに見えるので、なんとなく我儘をきいてあげたくなった。ケーキが食べたいなど、アイシスの我儘と同じで可愛らしく思える。

「はい。だから、訓練頑張って下さいね」

「うわあああ、味方がいないいいいっ！」

ハンスが顔を腕で覆って、絶叫した。

しかしすぐに復活し、キラキラした目をフィオナに向けてくる。

「ってことは、もしかして明日持ってきてくれるんですかっ？」

「……お邪魔でなければ」

邪魔になりそうなら来る気はない。

フィオナの答えを聞いた瞬間、ハンスのキラキラした双眸はロベルトに向いた。

「副団長、邪魔じゃないですよね！ ね！」

「邪魔ではない。……ハンス、いい加減に落ち着かないと窓から放り出す」

「……すみませんでしたっ！」

うるさげに眉を寄せ、ロベルトが短く脅すと、ハンスはすぐさま謝って静かになった。

確かに鬼だ。

フィオナはとても納得してしまった。

（つい約束してしまったけれど。そういえば私、なんでこんな所にいるのかしら……）

今更だが、不思議に思う。

知らない人が苦手だというのに、そんなに親しいわけでもない二人と、しかも男の人と、こうして茶を飲むなんて数日前までは考えられないことだった。

そこでここに来た用事に思いを巡らせ、ふと、アイシスの次のデートのことを思い出した。

「……植物園かあ」

ぼつりと呟く。

いつかフィオナも誰かと行ける日が来るんだろうか。

「植物園？ トマス・レーゼルデン植物園のことか？」

一瞬、意識が違う場所に飛んでいたので、ロベルトに問われて驚いた。びくつと肩を揺らして、ソファアの上で身を引く。

「は、はいっ。アイシスの次のデート、そこらしくて……」

「さっすが団長おー。デートコースを分かってますね」

ハンスが顎に手を当ててうなる。

（うーん。またもやもやしてきた……）

一週間後のことを思うと気が重い。フィオナは小さく溜息を吐く。「あと高台からの夜景と、東のシェーレの森手前の花畑でしたっけ。他には、収穫祭も外せないですよね！」

指折り数えてデートスポットを挙げるハンス。少し意外だ。

「何故、お前はそんなに詳しい？」

ロベルトがうろんげに問うのに、フィオナも全面的に同意する。

「え？ 俺、姉が三人いるんですよ。それでねーさん達がよく話してたんで」

「……そうか。彼女がいるのかと」

ぼそりと呟いたロベルトに、ハンスはきょとんと言う。

「え？ いますよ？」

「……！」

「えっ」

ロベルトとフィオナはハンスを凝視した。

「お前、十六じゃなかったか？」

「十六でいたらいけないんですか？」

あつさり問い返され、言葉に詰まるロベルト。

「と言つても、幼馴染なんで、小さい頃から仲が良いんですけどね。付き合いだしたのは十四からですが」

フィオナは絶句した。口元を手で覆う。

「そ、そんなに早く……？」

ハンスは不思議そうに首を傾げる。

「だって、早く告白しとかなないと、誰かにとられちゃうじゃないですか」

「……………」

「……………」

なにこの子、男らしい……！

啞然とハンスを見つめる。

「デートするなら、俺はシェーレの森の花畑をおしますね。お金がからないし、綺麗だし」

「……………そうね。あの花畑は確かに綺麗」

フィオナはこくと頷いた。あそこは街に近いのもあって、たまに出かけるのだ。人もいないし。

「……………」

「……………」

「え、な、なんですか？」

今度はフィオナに視線が集中したので、フィオナは戸惑う。

「フィオナさん、実は彼氏がいるんですか？」

「ま、ままままさか！」

わたわたと手を振る。

「毎年、春になるとあの花畑にイチゴ狩りに行くから……。それに私、こないだもお見合い相手に振られてしまったし……。きっと一生一人だと思います……」

小さな溜息とともに呟く。無意識からの呟きだったので、ハツと

我に返ると驚いた。室内の空気がこれでもかというくらいに重くなっていたのだ。きゃーっ、なんてことをっ。

「あの、大丈夫ですよ。私、一人でも生きていけるように、家事もお仕事も勉強してるんでっ」

「そういう問題じゃないですよ」

ハンスが情けない顔をする。

「っていうか、料理がやたら上手い理由がそれって哀しいです……」
いたわしそうに、目蓋に手を当てるハンス。ロベルトまで無言で口元を片手で覆っている。

言われてみると確かに哀しいかもしれない。フィオナも切なくなっただ。

ああ、この空気をどうしよう。

気まずさにソファアーの上で身じろぎしていると、ふと壁際の棚に置かれた時計が目に入った。

針が午前十一時を差している。ここに来た時は午前十時半くらいだったのだ、いつの間にか三十分もお邪魔していることになる。

「い、いけないっ。長々とお邪魔しすぎてしまいました。……私、帰りますね。お茶をご馳走様でした。お話出来て楽しかったです」

小声ではあったが、ちゃんと礼を言っただち上がる。

キッシュを入れてきた籠をハンスから受け取ると、ぺこつと会釈した。

「明日、待ってます！」

ハンスの元気の良い声に、こくつと頷く。

「気を付けて。また相談事があればいつでも聞く」

必要事項を述べているような淡々とした声も横合いからかかる。
フィオナはロベルトにも頷き返した。

「はい。ありがとうございます。……では失礼します」

そして、客室を後にした。

妹や女友達以外で、こんなに親しく話せた人達は初めてで、少し嬉しい。

しかしそれで心が浮ついていたのは執務室を出る前までで、一歩出ると、人の多い警備団内に恐れをなす。

（や、やっぱり来るんじゃないかった……）

早速後悔しつつ、フードをすっかり目深に被り直し、小走りに門の方へと向かうフィオナだった。

四章 目隠し姫、相談する（後書き）

ロベルトが鉄の表情以外の理由で冷たいと言われているのは、主に鬼のしごきのせいだったりします。

五章 目隠し姫、訓練を見学する

「あら、いいにおいね」

台所でタルトを焼いていると、甘い香りに誘われてレティシアが顔を出した。フィオナの継母であり、アイシスの実母である女性だ。アイシスによく似た、美しい金髪とぱっちりした明るい緑色の目をもち、色白で輝かんばかりの美貌は、今年四十歳になった今でも翳りを見せることはない。

はきはきとよく働く、見た目にも清々しい女性だ。

「お母さん……」

フィオナは伸ばした前髪の下で、目を緩ませた。

小さい頃は顔を見せるなと怒鳴られたりもしたけれど、フィオナはレティシアのことが好きだ。娘二人、血の繋がりなど気にしないで、公平に扱う立派な人であるし、なによりよく働いてよく笑っている姿が素敵なのだ。こんな人が、義理とはいえ母というのはフィオナの誇りでもある。

「桃のタルト？ そういえば、今が時期ねえ。……あら、二つ？」

「うん……。アイシスの大好物だから、別に作っておかないとすねちゃうでしょ」

「よく分かってること」

レティシアは短く息を吐いた。

「あの子、ほんと子どもっぽくて我儘なんだから。あんまり甘やかせすぎちゃ駄目よ？」

「でも……喜んでくれると嬉しいし」

ほそぽそと囁くような声で答えるフィオナ。

レティシアは仕方ない子ねえと肩を落とし、フィオナの頭を軽く手で撫でた。

「これがアイシスの分なら、こっちは何なの？」

ふと、不思議そうにもう一つのタルトを見るレティシア。

「あ、あの。ちょっと差し入れに……」

フィオナはもじもじと指を絡めた。アイシスのことが気になって、警備団の副団長の所に相談に行っているなど知れたら、迷惑になるから控えなさいと叱られるのは目に見えていた。

「ケーキ、作ってって頼まれて……」

「そうなの？ そういえば、昨日もキツシュを作ってたわね。まさか、フィオナ……！」

はっとしたレティシアは、にやーっと笑った。

え、な、なに。

よく分からないが良い予感はない。

戸惑うフィオナの頭を、レティシアは豪快に撫でながら、そうかそうかと笑っている。

「いいわよ、好きになさい！ やつとあなたにも春が来たのね。母さん嬉しいわ！」

「へ？ あの、お母さん？ 春って……？」

春が来たという表現の意味が分からないフィオナは、首を傾げる。しかしレティシアは鼻歌混じりに機嫌よく笑うだけだ。

「家に引きこもってばかりのあなただから、出かけるのはいいことよ。ただ、体が弱いんだから、気を付けなさいね」

「は、はい……」

ご機嫌な後姿を見送り、台所に所在なく立ちつくすフィオナ。いったい、なんだったんだらう……。

「あなた、フィオナにもついに春到来よ！」

「ぶっふうっ！」

その後、機嫌の良い妻が落とした爆弾に、休憩で飲んでいた茶を思い切り吹き出した父・ノルマンの姿があったとか。

＊

（な、なんでこんなことに……）

そう連日お邪魔するのも申し訳ないから、門番にタルトを託して帰ろうとしたのだが、それを見越していたハンスに修練場まで案内するように手回しされていた為、フィオナは今日も警備団内を歩いていた。正直、帰りたい。すれ違う団員達の好奇の眼差しが居たたまれない。

緊張のあまり、ぶるぶるがたがた震えているフィオナを、門番は今日もすごい震えっぷりだと感心気味に見つつ、本舎の西側にある広い空間に案内する。

「まだ訓練中ですよ。よかったですね、フィオナさん」

四十代くらいの門番は、無精髭の目立つ顔でにまりと笑った。

「へ？ 何がですか……？」

フィオナはきよんとする。

門番は勝手にこう思いこんでいた。フィオナが我らが副団長に懸想して、差し入れを持ってくるのだと。だから、訓練の姿を見たら喜ぶだろうと。

が、その考えは逆だった。

暴力事に慣れていないフィオナは、木剣で激しく打ち合い、ロベルトに容赦なく投げられ、喝を入れられているハンスやその他二人を見て、すっかり怖気づいてしまった。

（なんで私、こんなとこにいいいっ）

泣きそうだ。

無表情で、淡々と攻撃をいなして返り討ちに行っている副団長さんが怖い。初めて怖く見えました。なるほどこれが“鉄仮面”の由来！

凍りついているフィオナには気付かず、おせっかいな門番は特別訓練中の四人に声をかける。

「ロベルトさん、お客さんですよーっ！」

なんて楽しいんだと笑みを浮かべながら、浮き浮きと声をかける門番。全く女性の噂を聞かない副団長なので、嬉しくなってテンションが上がってしまった上司馬鹿である。

動きを止めたロベルトが門番の方を振り返る。

「だーっ！」

その隙についてハンスが打ちかかるが、

「脇が甘い！」

ロベルトはあっさり受け流して、ハンスの脇腹に木剣を叩きこんだ。そのまま地面にべちゃっと倒れるハンス。

「全然駄目だな。なっていない。もつと腕力を鍛えろ。レネとゲイクもだ！ 腕立て伏せ、百回だ。始め！」

「ひいひい」

「もう嫌だーっ」

「ハンスのアホ、呪ってやるーっ」

ハンスは悲鳴を上げ、巻き込まれた先輩二人は悪態をつく。しかしすぐにその場で腕立て伏せを開始した。そうしないとどんどん数が追加されていくのを経験上知っていたのだ。

ひいひい言っている部下三人を横目に、ロベルトは門番とフィオナの方に歩いて来た。

「見苦しいものを見せて申し訳ない」

やって来るや、部下をちら見して、ロベルトはぽつりと言った。門番が顔を引きつらせる。

「いや、ロベルトさん。あの訓練メニューを見苦しくなくこなせるのは、あなたか団長くらいですよ……」

団長であるハーシエルは、例え必死でも、汗をかいていても、美形ゆえか全てが爽やかに見えて格好良いのだ。ロベルトに剣で負けたとしても、それすらも格好良い。全く暑苦しく見えないのだから、人間、見た目が全てなのかと哀しくなる程。

一方のロベルトは、疲労が顔に出ないし、いつも涼しい顔をして

さらっと訓練を終わらせる。一応、それなりにきついそうだが、全くそう見えないので人間離れして見えて怖い。

ほんと、うちの団長と副団長はただ者ではないと、つくづく思う門番である。

「……君も参加していくか？」

ふとロベルトが問うと、門番はびしっと額に手を当てる敬礼をした。

「仕事がありますので、失礼しますっ！」

そして物凄い勢いで去っていくのを、ロベルトはどこか寂しげに見る。

「大勢で訓練する方が面白いのだが……。残念だ」

がっかりと呟くロベルト。そのロベルトの向こうでは、あのクソ親父、逃げやがってこんなにやろう、と、しごかれている三人が壮絶な目で門番の背中を睨んでいたりする。

（こ、こここ怖い怖い怖い）

一部始終を見てしまったフィオナの震えは悪化するばかり。こんなに暑い日差しの中で、こんなに震えられる人間もそういないだろうというくらい、震えている。

やがて百回分の腕立て伏せを終えると、三人は地面に倒れ果てた。死屍累々の有り様である。

そんな部下を見て、ロベルトは一言。

「まったく、これくらいでだらしのない奴らだ」

鬼だ。まさしく鬼だ。

昨日、ハンスがロベルトの訓練を鬼だと言っていた理由が分かった。

「あ、あの、だ、大丈夫ですか……？」

思わず、ハンスの側にちょこんとしゃがんで問いかける。ハンス少年は大の字になって上向きに倒れ、せいぜいと肩で息をしている。げっそりした声が答える。

「大丈夫じゃありません……」

そこでハンスはフィオナを見て、ぱああつと表情を明るくして叫んだ。

「あつ、桃のタルトさん！」

そしてがばつと半身を起こす。現金な奴である。

「……………ハ、ン、ス」

横から、地を這うような低い声がハンスの名を呼ぶ。瞬間、自分の失言を悟ってハンスの顔から血の気が引いた。

「ふいつ、フィオナさん！ フィオナさんですよ、はい！ やだなあ、間違っわけないじゃ。いだだだ、痛いです副団長——っ！」

「痛くしているのだから当然だ」

「ざまあみる、ハンス！」

「我らを巻き込んだ報いだ、アホ！」

ハンスに右手でアイアンクローをかましつつ、はつきりと答えるロベルト。地面に倒れ伏している青年と女性がそれぞれ悪態を漏らす。ロベルトはすぐにハンスの頭から手を放すと、溜息をつく。

「お前は昨日から失言が多いな。口のきき方がなっていない。ハーシエルに頼んで、マナーを一から学び直させようか」

「ええつ、団長の地獄のマナー講座をですか！？ すみませんでした、副団長！ お願いしますからそれだけは勘弁して下さいいっ」

半ベソで頭を下げるハンス。土下座の勢いだ。

ロベルトの特訓より嫌そうである。

（鬼の特訓に、地獄のマナー講座って……）

警備団にはとんだ災厄が眠っているらしい。

ハンスがあんまり嫌がるので、ロベルトは小さく息を吐く。

「分かった。今回は勘弁してやる。以後、気を付けるように」

「はいっっ！」

びしつと屹立して返事するハンス。返事だけはとても素晴らしい。

「あの、地獄のマナー講座というのは……？」

フィオナが恐る恐るロベルトに問いかけると、ロベルトは何でも無いことのように言う。

「ハーシエルは、新入り団員に礼儀作法とルール遵守を徹底的に教え込むからな。そのことだ。講義中、話し方や受け答え、扉から中へ入る動作や、上の者や市民への対応を試験して、ミスをするところ場で腕立て伏せや外の走り込みが追加されていく」

「……そ、そうなんですか」

「体に覚え込ませる方が早いというのもあるし、体力もついて一石二鳥だ。俺も、母が乳母をしていたから、領主家に仕えている時に領主家で地獄のマナー講座を受けたのでな。あの地獄ぶりは理解できる」

「……………」

新人という割にハンスの受け答えがしっかりしているのは、そんな理由があったのか。

「というか、ウォルトホル領主家、怖い……」。

「今もお仕えされてるんじゃないんですか……？」

乳母子だったらそうなんじゃと問うと、ロベルトは首を振る。

「母が六年前に病を患ってな。領主家を辞したのだ。街の生活の方が、買い出しなどの負担が少ないからな」

「……そうですね。領主館は丘の上にありますし」

納得のいく理由だ。

しかし、聞いてはいけないことを聞いたような気もする。

でもなんだか謝るのも変な気がする。

フィオナはごまかすように、両手で持った幅の広い籠を前に突き出す。

「あ、あの。とりあえず、休憩されたらどうでしょう……？ 切り分けてきたので、皆さんで召し上がって下さい……」

おずおずと切り出すと、ハンスが挙手した。

「はいはい！ 俺、お茶を用意してきます！ 井戸で水筒を冷やしてるんですよ。副団長、先輩がた、木陰に敷物を置いているので、そちらで待つて下さいっ！」

そして、たたーと本舎の方に駆けていった。

「……急に元気になったな、あいつ」

「とりあえず、後でシメよう」

先輩二人が呟く。

なんか、最後に不穏な言葉が聞こえた気がするのですが、気のせいでしょうか！？

フィオナはまた泣きそうになりながら、ぶるぶる震えた。

*

…… また帰り損ねました。

（どうして私も休憩を一緒にしてるんでしょう）

ハンスの用意してくれた茶の入った木のコップを両手で持ったまま、フィオナは内心で疑問に思う。

「お前、こういう所だけは気がきくよな」

「準備良すぎだが、助かる」

「えへへ、そうでしょう。ゲイク先輩、レネ先輩っ！」

フィオナの視線の先では、木綿のシャツと黒いズボンを着た四人が、幅広の麻布の上に座り、息をついている。どうやら訓練着らしく、皆、同じ型の衣服だ。警備団には制服がない為、懸章をかけるのが常だが、訓練着だけは支給されているらしい。

ハンスの先輩だという二人は、ハンスが冷やしておいた茶をありがたそうに飲んでいる。ゲイクは二十二、三歳くらいの青年で、短い茶色の髪と紺色の目をしていて、がたいが良い。顔もどこか四角い印象だ。身長だけなら、高身長なロベルトと並ぶかもしれない。そして、もう一人のレネ先輩は、驚いたことに女性である。背が高くキリッとした面立ちをした、凛々しい空気漂う女性だ。長くて綺

麗な明るい茶色の髪をポニーテールにし、日焼けしている肌は健康的で若々しい。二十代くらいだろうか。ややきつめな目は赤茶色で、意志が強そうだ。

三人がよく喋るせいか、ロベルトの寡黙さが際立つ。さっきから黙々と桃のタルトを頬張っている。

「こんなにおいしいタルトのご相伴ごほうみょうに預かれるなんて、今日はついでるな。ありがとう、フィオナ嬢」

レネがにこやかに言い、嬢なんて大層な言葉を語尾につけられたことのないフィオナはうるたえた。

「あ、あのっ、フィオナでいいです。普通に、フィオナで……」

「では私のこともレネと呼んで欲しい。フィオナはすごいな。私は野外科理はともかく、菓子を作るといったことは不得手でね」

「そうだなあ。レネは川魚を焼くくらいしか出来ないもんな」

ゲイクがそう言っで、くくくつと肩を揺らして笑った。それをレネがぎろりとねめつける。

「わ、私は、レネさんみたいに武芸は出来ませんから……。あんな風に動けるなんてすごいです……」

困ってそう言っで、レネはあははと笑う。

「そうかい？ そう言っでくれると嬉しいよ。どうも大雑把な性分だね、こういう生活の方が性にあってるんだ」

さばさばとした話し方も格好良い。

心から楽しそうに生きている女性は素敵だ。キラキラしていて眩しく見える。

「あっ、そうだ。フィオナさん、団長と妹さんのデートって次はいつなんですか？」

「えっ？ ええと、六日後ですが……」

急にどうしたんだらうとハンスを見ると、悪戯小僧のような笑みを浮かべていた。

「日曜ですね。やった。俺、ちょうどその日、休みなんですよ！」

「はあ……」

「だから、俺の彼女、紹介しますね！」

「はい??」

妹のデートとハンスの彼女の紹介の関連性が見えない。

「俺の彼女、アイラっていうんですけど、フィオナさんと気が合いそうな気がするんです！ 三人で張り込みしましょう！」

「はりこみ……?」

って何だろう。

意味に心当たりがあるか探ってみるが、出てこない。なんだろう。はりこみ……。

「……おい。俺の前で堂々と計画を練るな」

意味が分からないのだが、ロベルトが渋い声を出しているということ、あまりいいことではないのか？

「そーだぞ、ハンス。ばれてみる、団長に殺されるぞ」

ゲイクが横から口出しする。

「ええ!？」

思わず声を漏らす。

“はりこみ”というのをするのがばれたら、ハーシエル様に殺されるらしい。

そんなに物騒なの!？

青ざめるフィオナの前で、ハンスは快活に笑っている。

「大丈夫ですって。俺、隠れるの得意なんで！」

「あまり褒められることではないな」

呆れた声で言うのはレネだ。

どうやら“はりこみ”は隠れることらしい。

いまいち全体像が見えない。

「じゃあ、フィオナさん。その日は十時に広場で会いましょう。あ、保護色になるような緑色の服を着てきて下さいね！」

「はあ……」

よく分からないが、ハンスの彼女に会うのは少し興味がある。こうやって人の輪が増えていくのか。あまり人付き合いが得意で

ないフィオナにとっては、目から鱗うろこの気分だ。女友達は、糸やボタンを売る雑貨屋の娘が一人いるくらいだから余計に。しかも幼馴染な上、父親同士が仲が良いからという繋がりだ。自分から友達を作ろうとしたことはない。

フィオナはハンスに頷き返しつつ、当日に思いを馳せる。

（緑か……。いつものフードでいいかなあ）

その隣で、ロベルトが頭が痛そうに額に手を当てているのには気付かなかった。

五章 目隠し姫、訓練を見学する（後書き）

お約束とか王道とか、けっこう好きです。（↑フィオナの父の反応）

あと、団長ハーシエルも、団長だけあってただ者ではない感じですよ。

六章 目隠し姫、お見合い相手と再会する

「はりこみ」って、覗き見のことだったんですか!？」

「しーっ！ 静かに、フィオナさん!」

「見つかつちゃうじゃない、フィーちゃんたら!」

アイシスの植物園デート当日。よく分からぬままにハンスとその彼女アイラと待ち合わせ、トマス・レーゼルデン植物園までやって来た所でようやく意図を知り、フィオナはすっとんきょうな声を上げた。それにハンスとアイラが声を揃えて静かにするように注意する。

（で、でも、だって。覗き見だなんて、趣味が悪いわ。しかも人さまのデート現場を……）

なんていうことだ。居たたまれなすぎる。

頬に手を当ててぐるぐると目を回して混乱するフィオナを放置し、茂みの向こうを覗きこんでいるハンスとアイラ。

ハンスはともかく、アイラまで浮き浮きしているのはどうだろう。

この二人、絶対に似た者同士だとフィオナは思う。

ハンスの彼女であるアイラは、肩の高さまでの薄茶色の髪と目をした、素朴だが小さくて可愛らしい印象の娘だ。ハンスと同じで十六だという。頭の左側だけを緑色のリボンで飾り、緑色のワンピースを着ていて、動きやすそうな膝丈までのブーツを履いていた。笑うと笑窪が浮かんで可愛らしく、はきはきと明るく話しかけてくる。前髪で顔を隠し、更に緑の外套のフードを目深に被っているフィオナに驚くこともなく笑いかけてくれて、良い子なのだろうなあとすぐに思った。二歳年下だが、話しやすい。人見知りのせいで小声

でしか話せないフィオナの言葉も、嫌がらずに聞いてくれる。

そう。年下なのだ。だが、アイラはしょっぱなから「名前可愛いねー。フィーちゃんて呼んでいい？」と、にこにこ訊いてきた。いきなりのあだ名呼びに目を丸くしたが、馴れ馴れしさはなく、つい頷いてしまった。可愛いのは、フィオナの名前ではなくてあなただと言いたい。

（い、幾ら妹のことが気になるからって、こんな真似は出来ないわ……）

茂みの後ろにしゃがみこんだまま、頭を抱えていると、後ろからわくわくした声が聞こえてくる。

「あつ、団長だ。おおー、流石は女たらし。あのエスコートっぷりを見てよ、アイラ」

「見てるわ、ハンス。……きゃああー！」

突然、アイラが悲鳴を上げたので、フィオナは思わず飛び上がって茂みの向こうを見た。

（ああアイシス！？）

まさか妹に何か！？

その視線の先には、ガラス張りの植物園の建物の中にあるカフェテリアで、お茶をしているアイシスとハーシエルの姿があった。そして、ハーシエルに右手を持ち上げられ、その甲にそっと口づけられて赤くなっているアイシスの姿が。

「……………」

ついガン見してしまった後、フィオナまで顔を真っ赤にして茂みの後ろにうずくまる。

（見てない、見てないわよ、私っ！）

心臓がバクバク騒がしい。

アイシスのあんな顔を見た衝撃と、手の甲に口づけるなどという絵本の王子様みたいなことを本気でする輩がいることへの衝撃のダブルパンチである。

（いえ、ハーシエル様はまさしく“王子様”だもの。そういうこと

したっておかしくないわ……)

あの美貌。あの物腰。別にしてもおかしくないし、相手がアイシスみたいな美少女なので絵面的にも悪くはない。むしろ画家なら嬉々として題材に選ぶだろう。

「か、帰りましょう。お願いですから。帰りましょうよぉー」

フィオナは本気で泣きそうになりながら、キラキラした目でデパート現場をガン見しているアイラの服を引っ張る。

「何言ってるの、フィーちゃん。これから面白くなるっていうのにつ」

キラキラどころかキラキラした光がアイラの目に灯っている。…

…怖い。

「そうですよ、フィオナさん。団長が本気が気になるんでしょう？」
ハンスまで付け足す。

本当は単に好奇心にかられているだけだと思う。

「む、無理です。これ以上は見ていただけませんか。わ、私だけでも退散しますう」

フィオナの涙腺は決壊した。妹とその彼氏のあまあまなデート現場を真正面から目撃したせいで、ガラスの心が粉々に砕けてしまったのだ。

見たくなかった身内の恋愛事情を見てしまい、えぐえぐと泣きながら、よろよろと四つん這いで茂みの反対側を移動する。こうしないと、あちらから丸見えなのである。

ハンスが隠れるのが得意と言っていたのは、こういうスキルが必要だかららしい。

「ええー、帰っちゃうんですかー」

「もつと見ようよお、フィーちゃん」

幼馴染カップルが口を尖らせて言うけれど、フィオナは疲労たっぷりに返す。

「……お二人はどうぞ残っていて下さい」

そう言つと、二人は小声ながら明るく声を揃えた。

「「はい」」

仲が良くて結構です。

なんとも言えない敗北感を味わいつつ、フィオナは必死に茂みを伝つて、植物園から姿が見えない場所まで来ると、脱兎の勢いで逃げだした。

*

疲れた。

ほうほうのていでメリーハドソンの中央部にある広場までやって来たフィオナは、ぐったりと肩を落としてメインストリートを歩いていた。

このまま東に行けば、トレース商会兼自宅がある。
植物園まで結構距離があつた上、夏の日差しと心へのダメージでくじけそうだ。

しばらく家から出ないで引きこもりたいくらいである。

「おい、お前！」

爪先を見つめるようにして、俯き加減に道の端を歩いていたフィオナだが、突然右肩を掴まれ、振り向かされた。

「……………！？」

驚きすぎて声が出ない。

何だと目を見張つて後ろを見ると、金茶色の髪をした青年が険しい顔をしてフィオナを睨んでいた。

「だ、だれ……………」

白いシャツの上に着た刺繍入りの青い外套は質が良い。肩に斜めにかけている鞆も上質な皮製だ。一目で青年の育ちの良さが知れた。顔立ちも整っているのだが、明るい茶色の双眸は憎々しげだった。フィオナは混乱した。

こんな風な目で見られるようなことをした覚えはない。買い物以外はほとんど引きこもっているのだから、関わりようが無いのだ。

「“誰”だと……？ 随分な言いようだな。一月前のことをもう忘れたのか？」

「え？ えと、一月……」

「一ヶ月前？ 一ヶ月前というと、確か……」。

「あつ！ ろ、ロンドリネさん、です、か……？」

お見合いをした頃合いだ。ウォルトホル領の東隣にある別領、そこで幅をきかせているロンドリネ商会の次男と見合いをしたのだ。珍しく、アイシスではなくフィオナ宛に来た見合い話で、一度会ってみるよう父に言われて会ったのだ。結局、怒りに溢れた断り状が届いたが。

フィオナの頭から爪先まで、ずっと血の気が引いた。

フィオナを醜い目隠し姫呼ばわりしたことで怒ったアイシスが、彼に濡れた雑巾を投げつけるという無礼を働いたことを思い出したせいだ。

「そうだ。ライナス・ロンドリネだ。思い出したか？ 目隠し姫」
はつきりとした悪意をこめてあだ名を呼ばれ、フィオナは凍りつく。

どうやら、一ヶ月経った今でも、まだ怒っているらしい。

見合いの席では、あんなに人が良さそうに笑っていたのが嘘みたいだ。

「あ、あの、ごめんなさい……。妹が、失礼な真似をしたそうで……」

……

「まったくだ。お前みたいなのと見合いさせられた拳句、往来で雑巾を投げられたのだからな。侮辱もいいところだ……！」

耳朶を打つ低い言葉に、フィオナはびくりと身をすくませる。

怒りの空気も眼差しも怖い。体が勝手に小刻みに震えだす。

「で、でも、妹のことはともかく、お見合いの話はそちらからで……」

……

「父が決めたことに逆らえるわけがないだろう！ くそ忌々しい。トレース商会が魅力的だったんであって、誰がわざわざお前みたいな醜い奴に求婚するか！」

目にじわつと涙が浮かぶ。

そんなことくらい、分かっている。

現実を叩きつけるようなこと、言葉にしくなくても分かっているのだ。

「この一ヶ月、腹が立ってたまらなかったぞ。商談の為とはいえ、またこの街に来るとは思わなかった。再会できて嬉しいよ、フィオナ・トレース」

憎悪のこもったライナスの笑みを真正面から見てしまったフィオナは、背筋がぞつとした。震えが止まらない。

「……………あの……………きやつ」

どう謝ったら気が治まるのだろうと真つ白な頭で考えた時、ライナスに左手首を掴まれた。

そのままずんずん歩きだすので、半ば引きずられるように歩きながら、フィオナは手を引つ張り返す。

「は、放して……………」

よく分らないけれど、まずい気がする。

ライナスは一言も返さず、フィオナを路地裏へと引つ張っていく。何も言わないから、余計に恐怖を煽られる。

きつと恥をかかせた意趣返しをする気なのだ。

これだけ怒っているのだから、殴られたりするのかもしれない。

体中の血が冷たくなったような気がした。

怖い。どうしよう。逃げたい。

ぐるぐると考えるけれど、力が強くて振り解けない。それがもつと怖い。

幾らか奥まった所に来ると、ライナスは足を止めた。辺りは閑散としていて人氣がなく、あまりの静かさにおののいた時、ライナスは掴んだままのフィオナの手を引つ張った。よろめいたところで、

背中を壁に押し付けられる。

「うつ」

息が詰まって苦鳴を漏らしたフィオナだが、顔を上げてすぐに凍りついた。

「……ロンドリネ商会も、お前の所と同じ布地商だ。商売道具もおんなじだ」

薄らと笑みさえ浮かべてライナスが鞆から取り出したハサミの刃に、目が釘付けになる。

「……………」

ハサミだつて刃物だ。十分、凶器になりうる。

「安心しろよ。怪我はさせないから。俺だつて捕まりたくはないし？」

「……………じゃあ、どう……………」

どうする気なのかと訊きたいのに、声が震えて言葉を紡ぎきれない。

まさかお見合い相手にこんな風におどかされる日が来るなんて、夢にも思わない。よく出来た悪夢を見る心持で、ライナスの冷たい目を見る。

「目隠し姫。お前が普段隠している顔をさらしたら、さぞ小気味いと思わないか？」

「……………！」

びくつと肩を揺らす。

「やつ、やめっ」

慌てて逃げ出そうとするが、肩を左手で壁に縫いとめられる。

「暴れるなよ。——怪我したくないだろ？」

「っ」

ハサミだが、刃物を顔に近づけられているという事実には思い至り、フィオナは動きを止めた。

フードが取り去られ、肌に風を感じる。

「……………！」

身じろぎも呼吸も忘れ、フィオナは近付いてくるハサミの刃を絶望に染まった目で見つめた。

*

（ああ、くそ。落ち着かん……！）

ロベルトはその日、朝から落ち着かなかった。昼頃になるととうとう辛抱できなくなり、手にしていた羽ペンをデスクに放り出した。皮張りの椅子にもたれて、溜息を吐く。

今日はハンスが休みの日だ。つまり、アイシスとハーシエルの植木園デート当日である。

警備団に日曜なんてものは存在しないから、ロベルトは今日も仕事だった。ロベルトの執務仕事は、団長であるハーシエルへ渡すべき書類や手紙の分別であり、必要書類の作成や、必要な手紙の応答である。簡単な手紙や書類作成なら、部下にも回すが、それでも処理しきれない分が来るのだ。

つまり、副団長という仕事は、いつも書類と手紙に埋もれるような超多忙な仕事なのである。

もちろん、団長の仕事も、必要書類に目を通してサインしたり、団長の立場でないと返信出来ない内容の手紙に返信したりと忙しい。警備団の代表なので、何か催し事があれば挨拶をする立場でもある。副団長はそういった晴れ舞台が無い分、気が楽であるが、滅多とないものの、団長代理で集会に出席したりもする。それなりに忙しい立場だ。

だが、時間を上手にやりくりして、日課としている早朝訓練と見回りもきちんとこなしている。

（ちょうど昼時だ。見回りもかねて休憩にしよう。よし）

フィオナ達がハーシエルのデートを張り込みに行くと言っていたのが気になって、どうも集中出来ない。

ハンスがフィオナに迷惑をかけていないかが、気になって仕方が

無いのだ。ハンスはまだ子どもらしさが抜けていない所があり、失言も多いし、浅慮な所がある。また失礼な発言をして、フィオナの傷をえぐるような真似をしていなければいいのだが……。

気になって仕方ないなら、様子を見に行く方が早い。

ロベルトは即決して、警備団を出るや、メインストリートを南に下る。警備団の本舎は、領主家に近い北側にある。メリーハドソンの街は、街を四つに区切るようにして十字にメインストリートが走っており、東西南北それぞれに門がある。中央には広場があり、祭りや催し物はたいていそこで行われた。

「副団長さん！ 副団長さん！」

「む？」

その広場に差し掛かった所で、横合いから呼び止められた。

街の東側、ちょうど商店が多い区画へ通じるメインストリートへと、広場から少し入った所にある果物売りの露天商で、女主人が手を振っている。ただならぬ雰囲気、そちらに走り寄ると、女主人は慌てたように言った。

「副団長さん！ 今、そこでね。女の子が、すごい剣幕の男の子にその路地裏に連れてかれちゃったんだよ。怖くて声をかけらんなくって。何かあったらいけないから、見に行つてあげてくれない？」

身ぶり手ぶりで路地裏を示す女主人。おろおろしているのが端目からも分かる。この人とはよく見回り途中で話すので、それなりに親しい。感情がすぐ態度に出る人なので、困っているのは一目瞭然だった。

「分かった。任せておけ」

ロベルトは一言返し、ためらうことなく路地裏に足を向ける。

「よろしくね！」

後ろから声がかかる。見知らぬ他人のことなのに、人の良い女性だ。

ロベルトは路地裏を奥へと進みながら、腰に提げている長剣を意識した。これを使うことにならなければいいが。

そして行き着いた先で、ハサミを持って呆然と立っている青年と、壁際に座り込んで顔を覆って泣いている少女を見つけた。

「警備団だ！ そのお前！ 白昼堂々、何をしている！」

ハサミで相手を切り付けたのかと思い、駆けだしながら怒鳴る。

青年はハッとしたようにこちらを見て、舌打ちをして逃げだした。
「待て！」

そのまま追いかければ捕まえられただろう。だが、被害者がいるし、ここにいる警備団員はロベルトしかない。被害者を放置出来ない。

青年を放置し、ロベルトは少女の側に膝をつく。

「君、大丈夫か……？」

薄暗い中、泣いている少女を覗きこんで、ハッとする。

「……もしか、フィオナ殿、か？」

ロベルトの問いに、まるで肯定するかのように少女の肩が揺れた。

六章 目隠し姫、お見合い相手と再会する（後書き）

作者の独り言

王道って言わないで。でも王道、好きだよ！

ありがちな展開来ました。

我ながらかゆい！ 特にひねったストーリー展開にはしてないし、分かってるけど、かゆい！

見合い相手のことを思い出したかったら、一章のアイシスの愚痴を読み返して下さい。以上。

七章 目隠し姫の素顔

壁際に座り込んで、顔を手で覆って泣いているフィオナを目の当たりにし、ロベルトは体の芯が冷たくなるような衝撃に見舞われた。「フィオナ殿、大丈夫か？ いったい何が……」

フィオナの側に膝をついたまま、泣いているフィオナの肩を掴んでなんとか安否を問うと、かすれ気味な声が出た。それくらい動揺していた。

「……つく……ひつく……」

フィオナは俯いて顔を手で押さえたまま、泣きじゃくるばかりだ。いつもあんなに目深に被っているフードが外れていて、艶やかな黒髪が肩にかかっている。

ロベルトは、ハツと思い出す。先程フィオナの側に立っていた青年が、ハサミを持っていたことを。

その為、顔を手で覆っているのではなく、顔に負った怪我を手で押さえているように見え、ロベルトは傷を確認しようと、咄嗟にフィオナの両手を掴んだ。

「やつ、やめてっ。見ないで!」

途端に強い口調で拒絶するフィオナ。しかし怪我をしていると思いつ込んでいるロベルトは、まさか顔を見られるのが嫌なだけとは気付かない。

「怪我をしているのだろうか？ 傷口を見せろ。手当てを……」

「やだっ」

「!」

無理矢理、手をどけて顔を覗きこんだロベルトは、息を飲んで動きを止めた。

鼻までを覆っていた前髪は眉の辺りで切り落とされ、今まで隠れ

ていた顔があらわになっていた。

「どうやら怪我はないようだが、前髪ががたがたと不揃いなといい、あの男にハサミで適当に切られたのだろうという予測がついた。怪我はないな……」

目立った外傷が無いことにほっと安堵すると、今度はフィオナの顔をはつきり認識した。

「……………！」

ロベルトは言葉を失くし、フィオナの顔を凝視する。

色白の肌は滑らかそうで、小さな顔は卵形をしている。柳のような綺麗な形の眉をしていて、鼻梁はすつと通っている。唇は小さくてまるで花びらのようだ。ぼろぼろと透明な雫を零す二重の目は切れ長で、玻璃はりのような青色をしている。

まるで朝露のような、儚さの漂う美しい顔立ちに息すら忘れそうになった。

「……………」

フィオナの唇がわなないて、嗚咽おえつを漏らす。

涙がぼろぼろと零れる。雫そのものが、まるで水晶のように透明だ。

「……………ひ、ひどい、です。幾ら、醜いからって……、そんな、言葉を失くすほど……………」

耐えきれないというように、涙が次から次へと溢れて頬を伝う。

あまりに綺麗なそれを見つめ、呆然としていたロベルトだが、耳がフィオナの言葉を遅れて拾うや、ハッとして掴んでいた手を離れた。ちよつと掴んだだけでも折れてしまいそうなくらい細く、少し怖くなった。

自由になった手で、フィオナはまた顔を覆ってすすり泣く。

途端に、月が雲間に隠れてしまったようで、なんとなく残念なような心許ないような気持ちになる。

「……………フィオナ殿。君の、どこが醜いんだ……………」

内心、混乱の嵐である。

前髪で顔を隠すくらい、醜い顔をしているという噂ではなかったか？ フィオナの顔など気にしたこともなかったが、予想外に良すぎたので混乱が酷い。

もしかしてロベルトの目がおかしいとか？

「俺の目には、とても美しいように見えるのだが……」

戸惑いとともに呟くように言うと、フィオナは顔を手で覆ったまま、ぶんぶんとかぶりを振る。

「嘘……！ そんなの嘘よ！」

その声に、紛れも無い傷ついた色を読みとって、ロベルトは沈黙する。何がフィオナを傷つけたのか分からなかったのだ。

「だって、だって。それならどうして、母さんは、私に、顔を見せるなって、言うの？ 私が、醜い顔を、してる、からじゃない！ 分かってるんだから！」

フィオナにしては珍しく、激しい語気で感情を吐露し、また泣き始める。しゃくり気味で引っかけり気味の声だが、言っていることは聞き取れた。

フィオナはロベルトの言葉に傷ついたのではない。記憶にある母親の言葉に傷ついているのだ。

「な、なんでこんな……。あの人に、こんなこと、されなくちゃいけないの……？ そ、そりゃあ、アイシスが、失礼なことをした、のは、悪いけれど、見合いたいって言ったの、あっちじゃない……！」

嗚咽混じりに呟きながら、フィオナは震えながら泣く。

「……どう、しよう。顔が、見えたら、また、怒られる……。私、他に、行く所なんて、ない、のに……」

嫌だと、悲鳴のように呟く。

「嫌。嫌。嫌われたくない。嫌わないで。お願い。お願い……っ」
がたがたと震えながら、両手で自分自身を抱きしめるようにして、懇願し続ける。

あまりに痛々しい姿に、ロベルトの胸はえぐられるように痛んだ。

それと同時に、フィオナをこれほどまでに傷つけた母親が、恨めしくなる。

フィオナはロベルトが怖くないと言ってくれた。優しいとも言ってくれた。怖がついていても礼を言える、優しい女性だ。一人で生きていけるようにと、料理と裁縫と商売の勉強を頑張っている努力家だ。少し話をするだけで、こちらまで穏やかな気分になる、素晴らしい人だと思う。

そんな人が、苦しんでいる。

——助けたい。

でも、どうすればいいか分からない。

余計に傷つけるかもしれない。

どうすればいい。

どうすれば……？

ロベルトはさんざん迷った挙句、そっとフィオナを抱きしめた。

一瞬、フィオナがびくりと震える。

「……大丈夫だ。嫌ったりしない」

母親を引っ張って来て、この台詞を言わせるのが一番なのだと分かっている。

でも、ここにフィオナの母親はいないし、とりあえず落ち着かせるのが一番だと思った。

宥めるように背中をぼんぼんと軽く叩くと、フィオナのパニックは治まり、ふうと体から力が抜ける。

「不安なら、共に君の母親と話をする。それなら、怖くないだろう……？」

子どもにするみたいに、努めて優しく声をかける。いつもなら無駄に終わるのだが、フィオナには効いたようだった。

まだ、かすかにしゃくりあげていたが、ロベルトの胸にもたれている頭が僅かに上下した。そして、やや遅れて、両手がぎゅっとロベルトの服を掴む。

たったそれだけのことが、まるで頼りにされているみたいで、愛

しく思えた。

ついたまらず、両腕をフィオナの背中に回してしまふ。が、すぐに我に返り、嫌がられるかもしれないと不安になった。しかし、腕にすっぽり収まった小柄な体は逃げていたりはしなかった。

そのことに妙に安堵して、心の内で苦笑する。

フィオナを慰めているつもりで、いつの間にか、ロベルトの方が慰められているような、そんな気がしたので。

*

あつたかい……。

心地よい温もりにゆるゆると目を閉じると、目尻に残っていた涙がまた零れた。

泣きすぎて頭がぼうつとする。

目の前の黒いシャツになんとなくしがみついたまま、ふと気付く。黒……？

なんだか、こんなことが、前にもあつたような……？

ぼんやりした頭のまま、なにげなく顔を上げる。

そこにある顔に、びしりと動きを止めた。

「落ち着いたか……？」

黒炭みたいな黒い目が、気遣わしげな光を宿してフィオナを見下ろしている。日焼けした肌をした、シャープな顔立ち。目付きは若干鋭く、薄い唇は静かな声を紡ぐ。無表情な表情ばかりが目につくけれど、ロベルトの顔立ちは整っている方だ。ハーシェル程の派手さには欠けるが、日々を誠実に生きている、いい顔立ちをしている。その顔が、頬に息がかかるくらいの距離にあるのに気付いて、フィオナはたちまち頭が真っ白になった。

（え？ あれ？ な、なんで……？）

ライナスに前髪を切られるなんていう真似をされ、ショックでパニックに陥っていたのだが、落ち着いてみればこの状況は何だ。

（あ、あれ、これって、ええと、抱きしめ……！？）

口から心臓が飛び出そうなくらい驚く。

盛大な混乱の中、なんだかあったかくて居心地がよくて、もう少しこのままでいたいような気がして、その思考がまた更なる追い打ちをかける。

「え、えと……あの、私……」

頬が熱い。どうしていいか分からなくて、涙目になってしまふ。

あわあわとロベルトの腕の中で身じろぎすると、幼子おとなにするように、ぽんぽんと背中を叩かれた。

「ど、どうして、ここに……？」

しがみついたまま、ぐるぐると目が回ってくる。

ここにロベルトがいる理由が分からない。

どうやら自分はあまりにもひどく混乱していたらしい。

「見回りの最中に、すごい剣幕の男が女の子を路地裏に連れていったと街の者に知らされてな。様子を見に来たら、君がここにいた。他にも、逃がしてしまったが、ハサミを持った男も」

ハサミと聞いて、びくりと震えた。

ライナスの憎悪の混じった眼差しも思い出してしまう。

震える声で、事情を話す。

「……あの、人。私が前に振られたお見合い相手なんです……。私とのお見合いが嫌だったらしいのと、その、アイシスが失礼なことをして……それで怒っていたみたいで……」

「それで女性の髪を切ったのか？ ……最低な男だな」

低い、うなるような声でロベルトが呟く。怒っているのだろうか、腕に力がこもった。

「あ、あの。すみません。……は、放してもらっても、いいですか……？」

これ以上は駄目だ。

恥ずかしくて死んでしまふ。

幾らパニックになっていた人間を落ち着かせる為とは、だ、ただ、

抱きしめられているなど……っ。

きつとロベルトにとっては、泣いている子どもにするようなものと同じだ。

落ち着くのを、フィオナ。

ロベルトは優しい人だから、放つとけなかったんだろっ。

うん。

そうではなくては、こんな醜い女を抱きしめたりしないだろう。

「す、すまん！」

フィオナの言葉に、ロベルトは慌てて手を離した。

その顔が赤くなっているのには、いたたまれなくてうつむいていたフィオナは気付かなかった。

恥ずかしさで顔を手で覆い、その場でぺこぺこ頭を下げる。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ、こんな不器量な者にこんなことさせるなんて。拷問もいいところですよね！」

「フィオナ殿……」

ロベルトがやや呆れたように名を呼ぶ。

それすらも恥ずかしくて顔から火を吹かんばかりになっていると、ロベルトは言い聞かせるように続けた。

「先程も言ったが、君のどこが醜いんだ？ どう見ても、綺麗だろっ」

「ええ！？」

さっき？ さっきっていつ？

っていつか、綺麗ってなに！？

慣れない褒め言葉にますます顔が熱くなる。

「そ、そそそんな、お世辞でもそんなっ」

「俺は嘘は言わん」

「……うっっ」

そうだろう。いかにも嘘はつかないタイプだ、ロベルトは。

目を覆っていた前髪が短くなった為に、なんだかスースーして落ち着かない。よく見える視界の先で、ロベルトが苦笑している。

「信じられないか……?」

困ったように問われ、フィオナは少し黙り込んだ後、首を振る。

「……いいえ。副団長さんの言うことなら、信じられます」

「そ、そうか」

なんだか気まずげに目をそらされた。

フィオナは首を傾げる。

もしかして照れているのだろうか？

「そろそろ行こう。家まで送る」

「えっ!？」

フィオナは家と聞いて怖気づいた。

顔があらわになっていゐるのに、帰ったらまたレティシアに怒られるかもしれない。小さい頃に、顔を見せるなと怒鳴られていた記憶がよぎる。

フィオナが気遅れしたのが分かったのか、先に立ち上がったロベルトは、フィオナの手を取って立たせると、やんわりと言った。

「大丈夫だ。俺も一緒に行って、君の母親と話をする。さっき約束しただろう?」

「……いいんですか?」

さっきというのがやはり思い出せなかったが、フィオナにはロベルトが神様のように見えた。

こくりと無言で頷くロベルト。

優しすぎて泣きそうだ。

「あ、ありがとう、ございます……」

思わず俯いて、口から礼の言葉を絞り出す。

「や、やっぱり、副団長さん、優しいですね……」

親身になってくれて良い人だなあ。つい笑みが零れる。

「そんなことを言うのは、君くらいだ」

やはり困ったように苦笑して、ロベルトはフィオナの外套のフードを被せた。

疑問をこめて見ると、短く告げる。

「……目が赤くなっている」

「あ、すみませんっ。一緒にいる副団長さんが疑われますねっ」

女泣かせの悪い奴だと見られるのは確かに問題ありだ。フィオナは慌ててフードを目深に引き下ろした。

「……では行こう」

取ったままの手を引いて、ロベルトが歩きだす。

あつたかくて大きな手だ。

フィオナはなんとなく手を放すのが惜しくなり、そのまま手を引かれてついていった。

でもやっぱり少し気恥かしくて、足元しか見れなくなった。

*

「フィオナ、ごめんね！」

トレーズ商会に帰り、ロベルトから事情を聞かされたレティシアは、今にも泣き出しそうな顔をしてフィオナをぎゅっと抱きしめた。
「あなたの顔が見えたって、もう怒ったりしない。あなたはなんにも悪くないの。私が、心が狭いから、全部それがいけなかったの！」
「お、お母さん……」

怒られるとか出ていけと言われるんじゃないかとか、ここに来るまで抱えていた不安が全て弾け飛んだ。

フィオナは抱きしめられたまま、目を白黒させる。

「お母さんね、あなたの本当のお母さんに嫉妬してたの」

フィオナの両肩に手を置いて、レティシアは真剣に告げた。

「え？」

予想外の言葉だった。

嫉妬？

フィオナの実母に？

「どんどん綺麗に育ってくあなたを見て、前のノルマンの奥さんは

こんなに綺麗だったんだって、私なんかじゃ釣り合わないんじゃないかって。それで不安でたまらなくなつて、あなたの顔を見るのが辛かった……」

レティシアの明るい緑の目から涙が零れた。

「フィオナが醜いんじゃないの。醜いのは私の方」

そして、またぎゅうつと力いっぱいフィオナを抱きしめる。

「ごめんね。ごめんなさい。こんなこと、今更言えた義理じゃないけど。お母さん、もう、大丈夫だから。あなたがもつと綺麗になつても、受け入れられるようになったから。もう何も心配しないでいいのよ……！」

レティシアの豊満な胸に顔をうずめる形になり、フィオナは内心とても焦りつつ、けれど、涙が溢れてきた。

フィオナが悪いんじゃない。レティシアの心の準備が出来ていなかったただだと、知らされたから。

それに思い返してみれば、レティシアは顔を見せるなどは言ったが、フィオナが不細工だとは一言も言わなかった。父のノルマンや妹のアイシスもそうだ。

「でも、じゃあ、なんで……そう言ってくれなかったの？」

言ってくれたら、こんなに悩まなかったのに。

そつとレティシアの青いエプロンドレスの袖を引っ張って問う。

「あなたを追いこんだ私が、そんなこと切り出すのもおかしい気がして……。……いいえ、違うわ。単に勇気がなかっただけ。こんなこと言ったら、お母さん、フィオナに嫌われるんじゃないかって思つて」

本当、身勝手に最低ね。

レティシアは身を放し、涙を指先で拭いながら、自嘲気味に呟いた。

そして、フィオナを、伺うような、怯えたような、そんな目で見つめた。

ああ、この人も怖かったんだ。

レティシアの目を見て、フィオナの心の奥がことんと音を立てた。感情がすんなり落ち着いた、そんな音。

「……私も。嫌われるんじゃないかって、怖かった。だって、私、やっぱりお母さんのこと好きだもの」

傷つくことを言われても、それでも。ちゃんと愛されていると理解していたから、余計に。

ぽつりと、囁くような声だったが、レティシアには十分に届いた。レティシアは目を丸くして、感極まったみたいに口をわななかせ、もう一度、力いっぱい娘を抱きしめた。

「フィオナ……！ お母さんも大好きよ！」

そして、フィオナとレティシアは、誰に憚^{はばか}ることなく抱きしめあって泣いた。

隣にいながら離れていた、心の距離を埋めるみたいに。

*

上手くおさまったのを見て、ロベルトはほっと安堵の息をついた。視線の先では、血の繋がらない母娘が抱き合って泣いている。ここにいても野暮だと思い、黙ってトレーズ家を出ていこうとしたら、ノルマンに無言で手招きされた。

涙ぐんで鼻をぐずぐずいわせているノルマンに、裏庭に連れていかれる。

何の用だろうかとノルマンを見ると、ノルマンが頭を下げた。

「ロベルト殿、フィオナを連れ帰ってくれてありがとうございました」

ぐずつと鼻を鳴らし、ノルマンは、ズボンのポケットから取り出した木綿のハンカチで涙を拭う。

ひよろりと背の高いノルマンは、短く刈った茶色い髪と、フィオナとそっくりな青い色の目をしている。涙で前が見えないらしく、細縁の眼鏡をとって、ひたすらハンカチで涙を拭う。

「いいや」

そう答えたロベルトは、ノルマンに困った視線を向ける。

彼は涙もろいのかもしれない。

それぐらい、涙が止まる様子がない。

若い女性は元より、泣いている中年男をどう慰めるかというのも、ロベルトにはかなりの難題だ。困った拳句にしたことは、びしょびしよで使い物にならなくなってきたハンカチの代わりに、自分のハンカチを差し出すことだった。

「うぐ……すみません。ありがとうございます……っ」

ありがたそうにハンカチを受け取り、また涙を拭うノルマン。

「構わないが……。……大丈夫か？」

脱水症状にならないか不安になってきたロベルトである。

「へえ、大丈夫です。すみませんな。ったく、昔から涙もろくていけない」

そういえば、トレーズ家の現会長は、穏やかで好人物だが、涙もろくて人が良いと聞いたことがある気がする。そこがまた、街の者に好かれる由縁らしいとかなんとか。

「ずっと気を揉んでいたんです。娘には、お前は醜くないから気にするなど言っていたんですが……。やはり幼い頃に言われたことってのは、後々まで響くものですから」

「……そうだな」

子どもの頃に受けた仕打ちは、大人になっても引きずることが多い。

ノルマンの言う通りだ。

「フィオナの母親が死んだ後、娘の為にもとレティシアと結婚したが、彼女とは子どもが出来なくてね。それで余計に気に病んだみたいで。私も強く言い切りませんでした。不甲斐ない父親です」

落ち込んだように肩を落とすノルマン。

しかしすぐに顔を上げ、きつと眉を吊り上げた。

「しかし、娘の前髪を切ったってという奴が、娘の見合い相手ってい

うのは本当なんですか？」

「どうやらここまでロベルトを連れてきたのは、礼を言つのと、それを聞いたかつたかららしい。」

「ああ、そう言っていた。名前までは聞いていないが……」

ノルマンは憤慨したように、齒を噛みしめる。

「あの野郎、見合いの席では人が良さそうにしてたつてのに、猫被つてたのか。珍しくフィオナ名指しで見合いしたいというから受けたつていうのに……。こんなことをするなんて！ 女の髪を切るなんて、最低な野郎だ！」

父親だから、余計に腹立たしいのだろう。

しかもどうやら心当たりがあるらしい。

「しかも、あの野郎のお陰で、こうして纏まつてるんだと思うと、尚更腹立たしい……！」

心中、複雑なのだろう。それがまた怒りを増幅させているらしい。気持ちには分らないでもない。

「せっかく、変な噂があるのを利用して、噂に惑わされないような男の所に嫁がせてやろうと思つてたのに。とんだ誤算ですよ！」

「かつかと怒りながら、親馬鹿丸出しの発言をするノルマン。」

「そういう思惑だったのか？」

「当たり前です！ なまじつが、うちの娘はどっちも綺麗ですからね。しかもフィオナは気が弱い。噂なんかに翻弄される程度の男に嫁がせたら、可哀想な目にあつるのは娘なんですよ！」

「わ、分かつた。分かつたから落ち着いてくれ」

鼻息荒く主張するノルマンから、一步距離を取る。勘弁してくれ。
「しかし困りましたな。ああして顔を出すことになると、今度はいらん虫が湧いてきそうだ」

「はあ。」

溜息をつくノルマン。

「そつだな……。フィオナ殿は性格が良いから、きつと大変だろう」
他の男に言い寄られている様を想像すると、なんとなく胸の奥が

ちりちりする。

なんだ……？

ロベルトは眉を寄せた。

よく分からない感覚に、内心で不審に思う。

「顔のことは言わんのですな」

ノルマンが驚いたようにロベルトを見た。

「……彼女は俺が怖くないらしい」

返事に困り、それだけ返すと、ノルマンは納得したようだ。

「なるほど」

何をどう納得したのかは分からないが、納得したのならばいいかとロベルトは頷く。

ノルマンは急に笑顔になり、穏やかに言った。

「あなたが信頼できる方だというのは本当のようですね。もし良かったら、暇な折にでも娘と話してやって下さい。娘が怖がらない他人というのは、なかなかないもので」

「……分かった。ああ、トレース殿」

彼女にとって、ロベルトが少し特別な位置にいるのは、なんとなく嬉しい気がした。

顔には出ないが、少しばかり機嫌を良くして、ロベルトはノルマンに声をかける。

「ノルマンでいいですよ」

「では、ノルマン殿。もう一人の娘御のことで、そう、ハーシエルのことと相談があるなら、いつでも来るといい。大した相談には乗れないが、アドバイスくらいは出来ると思う」

前にフィオナにも言ったことを、ノルマンにも言う。

これだけ親馬鹿なのだから、アイシスのことも心配だろうと思ったのだ。

「ありがとうございます。ロベルト殿は優しい方ですね」

そう言って青の目を緩めて微笑むノルマンを見て、ああ、この人は確かにフィオナの父親だと、ロベルトは頭の隅で考えた。心が温

かくなるのを感じながら。

そして、その後。帰り際にふと思った。

あれだけの美人と立て続けに結婚するノルマンは、実は一番の人物なんじゃないかと。

(……ハーシエルなんかよりすごいんじゃないか?)

なんとなく、ノルマンの昔の話を聞いてみたくなったロベルトだった。

七章 目隠し姫の素顔（後書き）

作者の独り言

癒し系父娘。みたいな。

書いている私も涙腺が決壊してましたな回です。

展開が早いのはわざとです。

ここ最近で一番恥ずかしい。ぐあー。逃げたい。

あと、フィオナの顔がどんな風に醜いか書いてない理由が、これでお分かりになったかと思います……。妹も、作中では姉を不細工とか言ってないんですよ。ふふふふ。

と、とりあえず。お気に入り登録やポイント入れてくれたりなど、ありがとうございます。

王道スキーさんが多いのかな。

面白いようでしたら嬉しいです。

精神力がガッスガッス削られてる甲斐があります。ふつ。肉を切って骨をたつみたいな。

ほんとなんで私、とち狂って恋愛物書きでしたんですかね……。ラブが足りないとかよく分からない理由だから不思議だ。

お客様がた、ここまで読んで下さってありがとうございました（

^^^

感謝、感謝です。ありがたや〜。

八章 鉄仮面さん、怒る

たくさん泣いて、泣き疲れて、夢も見ないでぐっすり眠った次の日の朝。朝食を食べに下りた食卓でアイシスに会い、フィオナはびっくりした。

「どうしたの、アイシス！ ひどい顔色をしてるわ！」

アイシスはウサギみたいに目を真つ赤にした上、目の下に薄らと隈が出来ている有り様で、フィオナはたちまち不安に襲われた。

「もしかして昨日、ハーシェル様と何かあったの……？」

思いつく原因といえば、植物園デートくらいだ。

フィオナの問いに、すでに食卓についていたノルマンの眉がぴくりと動いたが、フィオナは気付かない。四人掛けのテーブルの、隣の席にいるアイシスの顔を覗きこむ。

たちまちアイシスの目からぼろぼろと涙が零れ落ちた。

突然、わっと泣きだした上に抱きつかれ、フィオナは仰天する。

「ごめんね、姉さん！ 私が、あいつに余計なことしたばかりに

！ 前髪とはいえ、髪の毛を切られちゃうなんて思わなかったの！」

「え？ あ？ ええ？」

硬直したまま、目を白黒させるフィオナ。

まさかフィオナのことを気に病んでいたとは思わなかったのだ。

どうやら、アイシスは泣いていた上に眠れていなかったらしい。

それならこの顔色の悪さも納得だ。

レティシアと和解したことですっかり安心してたフィオナは、完全にライナスのことを記憶の外に放り出していた。まあ、しばらく一人で外出するのは怖くて出来そうにないが……。また会ったらと思うと背筋が凍ってしまう。

子どもみたいにわんわん泣いているアイシスに、フィオナは小さ

く笑いを零す。気にしてこんなに真剣に大泣きしてしまうくらいフィオナを心配してくれるなんて、本当に可愛い妹だ。そして同時に、感情をあらわに出来るアイシスの性格が羨ましいとも思った。

「……アイシスのせいじゃないわよ」

ぽつりと言うフィオナに、ノルマンも頷く。

「そうだぞ、アイシス。女相手に最低なことをするあの野郎の度量が狭すぎるだけだ」

きつぱりと言う声には、確かな怒りがこめられている。

ノルマンはあまり怒らない人だから、フィオナは首をすくめた。心配して怒っているのは分かるのだが、フィオナは怒気が苦手だ。安全地帯まで全力で逃げたくなってしまう。

「——でも、失礼なことを言ったからって、ぞうきん雑巾を投げるのはやめなさいね」

苦笑気味に背中をなでると、アイシスは眉尻を下げ、伺うようにフィオナを見る。

「ごめんなさい。……でも、私、あいつに今度会ったら、たぶん、雑巾ごとバケツも投げちゃうと思う……」

しおらしく言っているが、中身はなかなか苛烈だ。更には横からレティシアが口を出す。

「アイシス、ついでに腐った卵もオマケしておきなさい。大丈夫、私が許します」

「お母さん……」

苦笑いを浮かべるフィオナ。

頼むからアイシスを煽らないで欲しい。

「や、やめて。お願いだから。それでアイシスに矛先が向いたらどうするの？」

慌ててアイシスとレティシアを止めると、アイシスは動きを止め、またがばつと抱きついてきた。今度は満面の笑みだ。

「ほんと優しいんだから、姉さんてば！　ありがとう！」

「ええ、本当にフィオナは良い子ね。あなたそっくり」

「レティシア……。お前の育て方が良かったんだよ」

あの、すぐ側でうつとりと見つめ合うのはやめて下さい。

父母の仲の良さは、再婚した時から全く変わらないのだから驚きだ。

居心地の悪さに、フィオナは椅子の上で身じろぎする。さっきまで泣いていたのが嘘みたいにからっと笑っているアイシスは、隣の椅子に戻った。

フィオナは食事に手をつける前に、もごもごと家族に問う。

「あ、あの。でも、私、しばらく家にいていい……。かな。ちょっと、まだ、その……」

怖い。そう口にするのをためらっていると、アイシスが頷いた。

「いいわよ。買い出しなら、私が行くから。落ち着くまで、家にいたらいいわ。むしろ、いて欲しい」

ノルマンとレティシアもそれが当然だと頷いてくれたので、ほっとする。

「せっかくだから、アイシスの夏服、完成させちゃうわね……。？」

そう言っただけで小さく微笑んだら、アイシスは緑の目をつるつるさせた。

「わーん！ 姉さん、大好きー！」

再びフィオナに飛び付いたアイシスは、また、わんわん大声で泣きだした。嬉しいんだか悲しいんだかフィオナには判断がつかないが、今日はかなり情緒不安定みたいだ。

（……アイシス。そういうことは、たぶん、ハーシエル様に言っただけの方がいいと思うわ……）

口には出さなかったが、フィオナは真剣に心の中でつぶやくのだった。

*

「ロベルト、この書類なんだけどさあ」

ノックの後に入室してきたハーシエルは、ロベルトのデスクにある書類がいつもより減っていないのに気付き、ん？ と片眉をはねあげた。

「なんだ、ハーシエル。何か問題が？」

書類から顔を上げるロベルトに、とりあえずハーシエルは用事を済ませようと書類の束を手渡した。

ロベルトはちらりと書類を一瞥する。

「一ヶ月後の、シェディール様の花嫁パレードの警備配置か。これがどうした？ 主な警備は領主家の私兵が担当するから、俺達はその周りを警備するんだろ？ 問題点があるなら、俺ではなく領主家と相談してくれ」

シェディール様は、ハーシエルの三つ上の兄で、現ウォルトホル領主だ。南のリューエン領から姫君を娶ることになり、ウォルトホル領主家まで壮麗なパレードをする予定になっている。確か、シェディール様が南の領境まで花嫁を迎えに行き、共に帰ってくるようになっていたはずだ。

ざっと要件を思い出したロベルトに、ハーシエルは苦笑いして返す。

「その領主家からの変更報告だよ。ほら、南のリューエンは地竜ちりゅうを馬代わりにしているだろ？ それで、あちらの花嫁パレードは地竜が馬車を引くのが一般的らしくてね。地竜に乗ってやって来るんだそうだ」

「なんだと……！」

驚いた。

最初の予定では、ウォルトホル領からは馬を使うはずではなかったか？

「なんでもお姫様が愛竜を連れてきたがってるらしくてね。まあ、一頭くらい、可愛いお願いじゃないかっていうのが兄上意見。ヨランダ姫にべた惚れだからね、あの人」

「なるほど。つまり地竜により民衆に混乱が起きないような警備配

置に変更しろと」

「話が早くて助かるよ」

ハーシエルはにこやかに笑う。

「そういうわけだから、練り直しよろしく。一応、重要箇所だけは詰めておいたから」

「分かった」

ふむ。ロベルトはうなり、書類を見下ろす。

真面目に配置を考えだすロベルトをじっと見て、ハーシエルは面白そうに口元をゆがめる。

「しかし、君が、今日はなんだか溜息ついたりぼんやりしていたりと、変な感じで気持ち悪いって聞いたけど、ほんとだったんだね。仕事も減ってないみたいだし？」

いつもなら、これ全部片付いてるでしょー。

ロベルトは書類から目を放し、またハーシエルを見上げ、眉を寄せる。

「それを言ったのは、ハンスだな？」

「彼しかないでしょ。気持ち悪いから団長どうにかして下さいって頼まれちゃってさあ。あ、ちなみに彼には雑用頼んでるから、しばらく帰って来ないよ」

……道理で、一度、書類の配達に向かわせてから戻って来ないわけだ。

ロベルトは小さく息を吐く。

「昨日、ちよつと一悶着あつてな。警備関係のことではないが……」

正直に話さなくても、こいつのことだからすぐに調べるだろうと思ひ、ロベルトは少し考えてこれだけ付け足す。

「フィオナ殿の顔を見た」

「目隠し姫の!？」

これは予想外だったのか、ハーシエルの声が裏返る。

青い目がキラキラと好奇心に輝きだした。

「で? どうだったんだい? あんまり女性の顔のことを詮索する

のはマナー違反だけど、誰も見たことが無い彼女の素顔は気になるなあ！」

ロベルトは大きく溜息を吐く。

「……醜いなんてものじゃない」

相当な美人だという意味でロベルトは呟き、席を立つ。

「確かにお前の言う通り、集中出来ていないらしい。気分転換に見回りしてくる。ハンスには、怒らないから仕事をしておけと言っておいてくれ」

そしてすたすたと扉に向かうロベルトの背に、ハーシエルは慌てて声をかける。

「ええ！？ それってどっちの意味で……？ ちょっと、ロベルト

！……あーあ、行っちゃった」

パタンと閉まった扉をうらめしげにハーシエルは睨む。

「そんな、何度も思い返すくらい変な顔だったのかなあ」

好奇心がうずうずと首をもたげてくる。

ロベルトが言った意味合いとは、正反対の意味にとったハーシエルは、変な顔をあれこれ思い浮かべて、首を傾げるのだった。

＊

ちょうど昼時だ。軽く見回りをしたら適当な食堂に入って昼食を摂ろうと計画を練りつつ、ロベルトは東通りの方を目指していた。

昨日が昨日だったから、フィオナがちゃんと落ち着いたのか気になっていた。そんなに世話焼きな方ではなかったはずだがな、と、

ロベルトは自分に笑ってしまう。

今回ばかりは、見回りの方がついでだ。トレーズ商会に顔を出して、安否を聞ければそれでいい。

そうしてトレーズ商会の前まで来た所で、不審な人間を見つけて眉を寄せた。

トレーズ商会の反対側の建物の陰から、トレーズ商会の様子を伺

っている青年がいる。どこから見ても挙動不審だ。通り過ぎる人達が、不審気にちら見しているのに本人だけが気付いていないらしい。
(あれは……)

あの金茶色の髪、昨日見た、ハサミを持った男に似ている。しかし確証はないので、とりあえず警備団の者として、誰何^{すいか}することにした。逃げられないように足音を消して近付き、すぐ側まで行くと問いかける。

「やあ、今日も暑いな。日陰で休憩中か？」
なにげない問いを投げる。

どんなに気安さを装ってみても、初対面の相手には恐怖で引きつった顔をされてしまうのだが……。

案の定、青年もそうだった。ぎよつと強張った顔をする。青年の口が「あ」という形で開き、瞬間、青い外套を翻して逃げだした。

(——当たり前だ)

自分の勘も捨てたものではない。

ロベルトは逃げだした青年を追いかけて、後ろ襟を掴むと、力任せに引いて、そのまま左手に放り投げた。

「わ！」

背中から壁に激突して、座り込む青年の前に立つ。

まだ部下の方がましな逃げ方をする。第一、不審がられて問われた時点で、素知らぬ振りをして演技で受け流すのが正解だ。

潜入捜査をしているわけでもないのに、ロベルトは青年の行動に評価をつけた。訓練をよく見ているせいであつた哀しい癖だ。

「やはりな。お前、昨日のハサミ男だろう」

「……ちっ」

舌打ちして立ち上がりとうする青年の右側の壁を、ロベルトは思い切り蹴った。ガツと激しい音がする。

「——逃げるな。なんだつたら、こいつを使って脅してもいいんだぞ？」

「……っ」

腰に提げた長剣の柄に手をかけると、青年の顔色が目に見えて変わった。ぴたつと大人しくなる。

素直なのはいいことだ。

ロベルトは内心で頷き、右足を戻し、直立で立つ姿勢に戻る。やや目を細め、青年を睨み下ろすと、淡々と問いかける。

「——そこで何をしていた？」

「……日陰で休んでたんだ」

膨れたように、青年は明るい茶色の目を横に反らしてぶっすりと答えた。不機嫌そのものだ。

青年はロベルトより年下に見えた。十代後半か、二十代の始めか。まだ子どもの域を抜けきっていないような、生意気な印象がある。質の良い服を着ているのといい、甘やかされて育ったのだろうと思っ

「君が昨日、ハサミで髪を切った女性は、そのトレーズ商会の娘だ。関係がないと言う気か？」

「……………」

「今度はだんまりか。一つ忠告しておくが、相手の了解もなしに女性の髪を切るのは、立派な傷害罪だ。いや、婦女暴行罪でも通用するな」

冷やかに告げれば、青年はきつと顔を上げた。

「俺は怪我なんてさせてない！」

その返答に、なんだかとても苛立ったロベルトである。しかし心は不思議と凪いでいて、不快だと思いながらも青年を観察している自分もいる。

「あんな真似をされて、傷つかない者がいると、そう言いたいのか……？ 身勝手もいいところだな」

低く吐き捨てる。

「まあ、おおかた想像はつく。謝りに来たとしても言う気なのだろう？」

「そうだよっ！」

やけになつたみたいに、声を荒げて返す青年。ロベルトはそれを鼻で笑う。

「謝つてどうする気だ？」

「なっ」

「君は彼女を傷つけた。謝りたいと言つて、彼女の両親が君に会わせるだけでも？ それに、見合いが嫌だったのだろう？ いったいどういふ心境の変化だ？」

ロベルトはじつくりと言い、青年の心を折っていく。傷害罪で逮捕するのはたやすい。だが、どうやらまだチャンスがあると勘違いしているような輩では、またフィオナや、その家族が面倒な目にあわされる可能性がある。それを予防するには、青年に分からせる必要があつた。お前のしていることの先に、望みは全くないということ。

黙り込んだ青年は、悔しそうに歯がみする。

「お、俺だつて……。あんな……」

「美人だと思わなかつた？ 綺麗だと知っていたら、もっと優しくしたのに？ そう言いたいのか？」

心情を読んで口にしてやれば、青年はたちまち顔を怒気で真っ赤にした。

「——っ」

どぎつい目で睨んできても、ロベルトは涼しい顔で受け流す。

「それは残念だったな。そう思っている時点で、君はフィオナ殿と結婚する資格はない。噂に翻弄される程度の男に娘をやる気はないとフィオナ殿の父君が言っていた」

「——！！」

「そして、残念ついでだ。警告をしよう。今後一切、トレーズ商会の前に留まるな。フィオナ殿には一切接触するな。守られなかった場合は、上等な豚箱送りにしてやる。分かりやすくいいだろう？」

冷笑混じりに警告する。

今回は若気の至りとして見逃すと、そう譲歩したつもりだ。
青年がトレーズ家の前で、未練がましく立っている時点で、ロベルトはだいたいのことを悟っていた。

不細工だと思っていた見合い相手が実はかなりの美人だと知り、急に惜しくなったのだろうと。フィオナに会いさえすれば、どうにかなると思いついて入っているのだろうとも。

歯噛みし、顔を赤くしてぶるぶる震えていた青年は、望みがないことを悟っても、まだ諦めきれないのか、苛立ちを目の前にいるロベルトにぶつける。

「なんなんだ！ なんなんだよ、お前っ！」

「この街の警備団で副団長を務めている者だ」

名まで名乗る気はなかった。知りたければ自分で調べるだろう。

「お前！ 副団長のくせして、横暴だ！ 差別している！」

ロベルトは大きく肯定する。

「差別して当然だろう。君のその外套にある紋章には見覚えがある。東のガルウィック領の者だろう？ この領地の者でも、この街の者でもない相手、しかも街の者に危害を加えたのだから、差別しない方がどうかしている」

「……………」

言葉を失くす青年に、ロベルトはもう一度だけ、はっきりと告げる。

「もう一度警告する。今後一切、トレーズ商会の前に留まること、および、フィオナ・トレーズへの一切の接触を禁じる。守られなかった場合は、豚箱に送る。——分かったな？」

低い声で、威圧をこめて睨む。

青年は反論の余地がないことを悟ったのか、青ざめた顔のまま頷

いた。

ロベルトは威圧を解くと、青年の腕を掴んで立たせ、そのままメINSTRIOTの方に押し出した。

「では、とっとと行け！ 約束は守れよ」

「……………くそっ」

青年は何か言いたげだが言葉にならず、短く舌打ちしてロベルトを一度睨んでから、メインストリートを広場の方向へ向けて走っていった。

（……………これで、大丈夫だろう。あとは念の為に、この辺の見回りの連中に注意喚起しておくか）

せいせいした気分で肩を落とし、ロベルトは対策を考える。ああいう輩は総じてしつこいものだ。ストーカーや付きまといなどへの相談への対応をしたことがあるので、ロベルトは特に懸念していた。警告した直後はまだいい。

だが、一ヶ月ほど経った頃に、もうほとぼりも冷めただろうと勝手に思っ、また出てきたりするのだ。

その後は、トレーズ商会に顔を出し、ノルマンに注意を促した。フィオナの調子はとうだと問えば、怖いらしく家から出たくないそうだという返事が返り、少し後悔した。

（一発くらい殴っておけばよかったな……………）

物騒なことを考えて、いやいやと首を振る。

自分は警備団員なのだから、あれで良かったのだと思い直す。

そして、やけにもやもやした気分ながら見回りをし、警備団の本舎に戻って溜息をついた。

昼食を食べ損ねたのに気付いたのだ。

もういい、今日は茶だけで過ごす。

なかば自棄^{やけ}になっ、書類仕事に専念していたが、暴言がばれてロベルトに訓練を科されるのを恐れたハンスが差し入れを持ってきたので、ありがたく頂戴した。

本当に、こういう所にだけは妙に気がつく奴である。

八章 鉄仮面さん、怒る（後書き）

作者の独り言

ロベルト、こてんぱんにのす。な、回でした。

副団長らしい所も見せないだね。

あと、豚箱っていうのは牢屋って意味です。一応、補足しておきますね。

あと、ファンタジー要素を少しだけでも入れようと思い、地竜を出しました。地面を走るしか出来ない小型の竜って感じです。馬の代わりにしてるくらい。

でも魔法とかはない設定です。そこまでしると、違う話になる……。

基本、ほのぼのなので。

あとハンスは世渡り上手な感じです。

九章 目隠し姫、やっぱり隠れる

家に引きこもり始めた翌日、フィオナに客が来たというので階下
に下りてみると、ハンスとアイラが小さな花束とバスケットを抱え
て立っていた。

いつもの癖で、フィオナは外套のフードを目深に被って応対する。
幾ら美人だと言われようと、フィオナ自身は人目にさらすなんてと
んでもない不細工だと信じて生きてきたので、なかなか大っぴらに
顔をさらす気になれない。恥ずかしいのだ。

「ハンスさん、アイラさん。どうかしたんですか……？」

フードの下で目を瞠って問いかける。

フィオナを訪ねてくる人がいるという時点でも驚きである上、ハ
ンスにバスケットを、アイラに花束を差しだされて、動きを止めた。
（え？ 花とお菓子……？ 今日はずちの誰かの誕生日じゃないし、
お祝い事があつたわけでもないし……）

受け取りかね、無言で思考を巡らせると、ハンスがあいている左
手を振った。

「お祝いの品ではありませんよ。 お見舞いです」

「お見舞い……？」

「はい。副団長からお話を聞きました……」

ハンスは気落ちしたように肩を落とす。

「すみませんでした。 幾ら張り込みが楽しかったからって、若いご
婦人を一人で帰すべきではありませんでした。 警備団員失格です……」

……

「私もごめんなさい。 警備団員の彼女だったら、送るべきって言う
んだった」

アイラもしゅんとうなだれている。

すっかり落ち込んだ様子で謝る二人を見て、フィオナは慌てると同時に、不謹慎にも胸がきゅんとした。

（な、なにかしら。二人が子犬に見える気がするわ……）

飼い主にしかられてぶるぶる震えている子犬ちゃんみたいに見えるてしまい、当然、怒る気にもなれない。

「いいのよ、気にしないで。二人が悪いんじゃないですから。だいたい、送っていくだなんて。私はただの町娘で、貴婦人ではないんですよ？ それに、お昼時なんて人の多い時間帯でしたし、普通は気を付けようなんて思いませんか」

しかしハンスは首を振る。

「いいえ。前に貧血で立ち往生されてたそうじゃないですか。完全に俺の配慮ミスです。だから、せめてものお詫びにお見舞いに来たんです。これ、受け取って下さい」

「分かりました。だから、もう気にしないで下さいね」

受け取らないと引いてくれない気がしたので、フィオナは仕方なくバスケットと花を受け取った。

ハンスとアイラ、双方とも、なんとなくほっと安堵したように顔を見合わせる。

アイラは胸に手を当てて、小さく息を吐く。

「私ね、あの日、フィーちゃんが先に帰って良かったと思ってたの。まさか嫌がらせに来た人と遭遇してたなんて思わなくて。そうじゃなかったら、ほんとのほんとに帰って良かったよ」

「そうですね……。ほんと……」

アイラだけでなくハンスまで遠い目をしているのはどういうことだろう。

怪訝に思っていると、ハンスが暴露する。

「実は、フィオナさんが帰った後、張り込みが団長にばれまして……」

「え……！？」

フィオナは青ざめた。

ハーシエル様にばれたら殺されるのではなかったか？

「だ、大丈夫だったんですか？ その、レネさんやゲイクさんが、ばれたら殺されるっておっしゃってましたけど……」

恐々尋ねると、ハンスとアイラは意味深に目を合わせる。

「殺されるわけではないけど……。お説教されちゃったの……」

なにやら涙目になるアイラ。

「穏やかな笑顔で、淡々と。いつそ怒鳴ってくれた方が怖くなかったよう」

思い出してか、アイラはがたがた震えだす。

「ええ……。怖かったです。とつっても。俺なんて、昨日は団長の雑用地獄にあいましたし……」

ふふつと乾いた笑いを零すハンス。完全に意識が遠くに向いている。

「しかも、笑顔で、彼女を奪られなくなかったら、二度とするんじゃないぞって脅されました。本気でこええええ！」

頭を抱えるハンス。こっちも涙目だ。本気で恐ろしいのか青ざめている。

……。それはそれは。

フィオナは同情たつぷりにハンスを見た。

確かに怖いだろう。ハーシエルは女性を口説くことにかけてはかなり優秀なのだ。しかもハンスはハーシエルの動向をよく耳にしているから、その恐怖もひとしおだろう。

ハンスには悪いけれど、ハーシエルが本気を出したらハンスはあっさり負けてしまうに違いない。しかしそこはアイラが否定した。

「心配しなくて大丈夫だよ、ハンス。私、美形は苦手だし。それに高嶺の花なんて彼氏にたくないよ、同性の嫉妬が怖いもん」
たかね

「うぐ……。それは、嬉しいような、複雑なような」

遠回しに美形ではないと言われ、ハンスは傷ついたように胸を手で押さえる。しかしアイラは容赦なく続ける。

「ハンスくらいの手に届く範囲の人の方が、私の好みぴったりだ

から。心配しないでね」

「う、うん……。ありがと………」

につこり笑顔でアイラはなだめるけれど、言われた方のハンスのダメージは更に積もったようだ。なんだか泣きそうな顔をして、横に視線を反らしている。

（流石、ハンスさんの彼女さん……。ハンスさんと似て、失言が多いです……）

わざとじゃないのが、余計に性質が悪い気がする。

そこまで似ていなくても良かるうに。

「あれ？ 落ち込んだじゃった？ ふふっ、ハンスかわい〜」

アイラがにこにこ笑う。

いや、違った。わざとだった。

落ち込んだハンスを見て、アイラは楽しそうにくすくす笑っている。

（まさかの虐めっこ側……？）

戦慄するフィオナであるが、それでも二人は一応は恋人同士なのか、不思議と甘い空気が漂っている気がして少し胸焼けを覚えた。

アイラは落ち込むハンスを放置して、フィオナにぺこんと頭を下げる。

「こないだのことは本当にごめんね。もし良かったら、今度、遊びに来てもいいかなあ？」

おっとりと問い、ちょこんと小首を傾げるアイラは、素朴な顔立ちながら可愛らしい。所作の一つ一つが妙に可愛らしく見えるのだ。小柄な体格をしているせいでもあるだろう。

「いいですよ」

フィオナがやや照れながら小さい声で答えると、アイラは「駄目だよ」と言った。

「お友達なんだから、敬語で話しちゃ駄目。“さん”も駄目だよ。フィーちゃんの方がお姉さんなんだから、気にしなくていいの。あ、ハンスはフィーちゃんのお友達じゃないから敬語でいいよ」

「…………アイラ」

ハンスがそろそろ本気で泣きそうだ。がっくりとうなだれている。しかしアイラはわざとなのか天然なのか判別がつかないが、それを無視して続ける。

「それでね、次に会ったら、こっそりお顔見せて欲しいな。ほんとは綺麗なんだって聞いちゃったから、遠慮しないことにしたの。嫌だったらいけど、でも、女の子同士の秘密にするから」

上目遣いでじっと見つめられて、フィオナはどもりながら頷く。

「いいけど……。ほんとに秘密にしてね」

まだ恥ずかしいので、少し抵抗はあるが、女の子同士で慣れていたらいとも思う。

「やったあ！　じゃあ、フィーちゃんに似合いそうな髪飾りとか探して持ってくるよ。髪の結び合いっこしようね！」

結び合いっこ。なんて可愛い響き。

友達同士でそんなことをしたことがないフィオナは、期待感に胸を膨らませる。

「う、うん。じゃあ私も、あの、あ、アイラちゃんに似合う髪飾りを作っておくわ……」

気恥かかったが、ちゃん付けで呼んでみたら、アイラが花みたいに笑った。

「ありがとう！　また今度ね。行こ、ハンス。休み時間終わっちゃうよ」

「うん。それでは失礼しました、フィオナさん」

会釈をすると、ハンスはアイラと連れだって仲良く帰っていった。フィオナはしばらくぼーっとした後、はっとして玄関の扉を閉める。

「友達っていいなあ……」

アイラを紹介してもらえたのは本当に幸運なことだったと、フィオナは知らず知らずのうちに口元に笑みを浮かべていた。

「もーっ、姉さん、なんでまだ顔を隠してるのっ！」

前髪が短くなったのが気になって、自室以外ではフードを目深に被りだしたフィオナに、アイシスが癩癩を起した。

ばこんとクッションを叩く。

「だ、だつて。恥ずかしいし、落ち着かないの……」

フィオナは皿洗いをしながら、ちらりと後ろを振り返る。

トレーズ家の一階、食堂と同じ部屋、ちょうど暖炉前にある長椅子に座つてはたばたと足を鳴らして暴れているアイシス。

「でもでも、家の中くらいいいじゃないっ」

「家の中でも落ち着かないのだもの……」

「私はちゃんと目を見て話したいのっ！」

ばこばことクッションを連打するアイシス。

フィオナは布が破けたら繕わなくてはとのんびり考える。

「それにそれに、お洒落させてみたいし、化粧してみたいし、それから髪もアレンジしてみたいしっ」

「……姉さんはお人形さんじゃないわよ、アイシス」

「ずつとしてみたかったの！ 母さんのことを気にしてたの知ってたから、何も言わなかったけど……。それに、ほんとに灰色の服より明るい色の服を着て欲しいのよ」

そう言つたアイシスだが、首を傾げてじろじろとフィオナを見る。「でも、どうしてかしら。姉さんが着ると灰色の服が地味じゃなくて品良く見えるのよね……。前髪を伸ばしてた時もそうだったけど」

「ありがとう。それなら問題ないわね」

明るい色の服を着るのは気後れする。フィオナは灰色が好きだ。黒は流石に髪色もあつて魔女みたいになつてしまうから、あまり着たくない。それで気付けば灰色の服ばかりが手元にあるわけだ。

「問題ないわけないでしょっ！ 姉さんはもつと女の子であることを楽しむべきだと思うのっ！」

やたら熱をこめ、両手を握りしめて主張するアイシス。そんな妹に、フィオナは首を傾げる。

「楽しんでるわよ……？ 裁縫に、料理。とても楽しいわ」

「そうじゃなくてっ」

そこで、パンパンパンパンと手を鳴らす音が響いた。

「はい、アイシス。そこまでになさい。フィオナが楽しいって言うんだから、いいじゃないの」

レティシアだった。休憩時間なのか、台所の方に歩いてくるので、フィオナはそっと押しとどめる。

「お茶の用意をするから、座っていて……」

「ありがとう。助かるわ、フィオナ。ほんと、どこかの我儘なアイシスちゃんも見習って欲しいわねえ」

「私も準備するわっ！」

じとつと横目で見られ、アイシスは長椅子から立ち上がって台所に駆けてくる。

お茶の用意が済むと、三人でテーブルを囲んだ。ノルマンは仕事場だろう。交代で休憩するのが常だからだ。

「アイシスの気持ちも分かるわよ。でも、こういうのはもっとゆっくり進めていかなくちゃ。だから、落ち着いた頃にでも仕立屋に行きましようね」

お茶を一口飲むと、レティシアはにっこり笑った。

どうやら拒否権はないみたいだ。これだけは譲らないという笑みだ。

フィオナは引きつり笑いを返す。今すぐではないのだから、まあいいか。問題の先送りだとは思うが、どうせ逃れられないことならば、ここで駄々をこねても仕方がない。

「そういえばアイシス。植物園デート、どうだったの？」

「ごたごたしていたから聞いていない。」

フィオナが問うと、アイシスは照れたように笑った。

「のんびり植物園内を散策して、一緒にお茶をしたのよ。その後は、

外の庭園をお話しながらゆっくり歩いて……。素敵だったわあ」

両手を握りしめて、うつとりと呟くアイシス。

レティシアはふんと鼻で笑う。

「あら、それだけなの？ ハーシエル様は恋愛の手練みたいなのに、手の一つも出さないのね。男らしくないわ。私のノルマンなんて、ちゃんと出すところでは出すんだから」

張り合ってくる母に、アイシスも負けじと返す。

「私だって、手をつないで歩いたりしてるもの！」

「そっちの手じゃあないわよ、アイシス。ふふ。まだまだね」

ふふつと大人の余裕たつぷりの笑みを浮かべるレティシア。

むーっと頬を膨らませるアイシス。

むくれていても可愛い妹である。

美人って何しても可愛いのね。

フィオナは感心気味にアイシスを見る。

「ハーシエル様が紳士的なだけだもん。別に私に魅力がないわけじゃ……。ないわよね？ 姉さん……！」

緑の目に薄らと水の膜が張った。

「アイシスに魅力がなかったら、この街の女の子の大部分が魅力無しってことになるんじゃないかしら……？」

フィオナはそつと呟く。

「あら。男の人にも色んな好みはあるし、それに女は顔だけじゃないわ。でも、うちの娘に限って、好み以外で魅力がないなんてことはないはずだけど。ちゃんと礼儀作法も教えているし……」

レティシアはじろじろとアイシスを見て、こくりと頷く。

「これであなたが振られたら、きっとハーシエル様の目が曇りに曇っているか、ポンコツなのよ。自信をもって挑みなさい。大物を釣り上げたいのならね」

ぱちんと片目をつむるレティシアは、それは魅力的に微笑んだ。結婚した女特有の色っぽさが漂っている。

「うん、私、頑張る！」

俄然やる気を出すアイシス。

「そうね。殿方は胃袋をつかめばこっちのものよ。次のデートには手作りのお菓子を持っていきなさいな。お母さん、特訓してあげちゃう」

「いいの？　ありがとう、お母さん！」

「こちらこそ。学ぶ側はどう呼ぶのかしら？」

「先生、よろしく願います！」

のりのりなレティシアとアイシスの遣り取りを見つつ、フィオナはそつと溜息を吐く。

普通、娘が男の人と付き合っていて、娘に手を出さないなら親としてはほつとすることではないかしら？

父であるノルマンなら心からほつとしそうだと思うと、なんとなく複雑な気分になるのだった。

九章 目隠し姫、やっぱり隠れる（後書き）

作者の独り言

後日談、的な感じで。さりげなく八章がハンスの雑用地獄の伏線だったりします（笑

あと、母は強し、みたいな。

十章 - 1 強盗事件

「おばさん、こんにちは」

緑色の外套のフードを目深に被ったフィオナを見て、野菜売りの露天商をしているおばさんはおやと笑みを浮かべた。

「フィオナちゃん、久しぶりだね。ここんとこ見なかったけど、どうしたんだい？」

「少し風邪を引いていたんです。でも、もう大丈夫です。……その芋を五つ下さい。あと、人参を三本」

「まいどあり」

代金を払うと、おばさんが野菜を籠に入れてくれた。

「今日も暑いね。倒れないようにお気を付けよ」

「ありがとう。おばさんも気を付けて」

フィオナはぺこんと会釈をすると、他の買い物も終わるべく、南通りを更に下っていく。

「あ、いけない。ここいらは最近物騒だって言い損ねた……」

ほっそりした後姿がだいぶ小さくなったところで、おばさんはしまったというように額をぺちつと叩いた。

久しぶりに外出したら、日射しが強くて目が痛い。室内にいないのでは、視覚的にだいぶ異なる。

フィオナはフードを目深に引き下ろし、ふうと小さく息を吐いて籠を持ち直す。

あとは肉屋で鶏肉を買っただけだ。

南通りを、いつものように道の端を静かに歩いていると、ふと人だかりが目についた。

(なんだろう……)

ざわざわと不安なざわめきが聞こえる。

人だかりは薬屋の前にいた。しきりに店の中を覗いている。

せめて話くらいは拾えないかと人だかりに近付く。他にも人だかりを気にしている人がいて、人だかりの中の適当な人物に声をかけたので、聞き耳を立てる。

「ちよつとどうしたのさ、これ」

「ああ、ここで強盗があつたらしい。真昼間に。店番をしていた息子さんがナイフで刺されたんだと」

「えっ、どうなったんだい、その子」

「刺されたのは腕だったらしくてね、家が薬屋だったのもあつて手当てしたから大丈夫だそうだよ。まあ医者^{いしや}の所に行ったけど」

「それで犯人は？」

「逃げちまつたそうだよ！ 小柄な男つて話だけど、詳しい特徴は分からないらしい」

「そつえば、昨日もその通りで……」

そこで声が途切れた。

捜査中の警備団員達が野次馬を追い払い始めたのだ。

「はいはい、散った散った！ ここにいと営業妨害になるだろ。全く！」

ぶつぶつ言いながら、人混みにまばらに消えていく人だかり。

なんとなくそれを見送っているうちに、フィオナだけがぽつんと道端に取り残された。

「あれ、もしかしてフィオナか？」

「え？」

顔を上げると、警備団を示す赤い懸章をかけた、白シャツの上にチュニック型の皮鎧を着た女性が立っていた。黒いズボンに皮製の長靴^{ちよつか}が凛々しい。腰には細身の剣を吊っている。

「レネさん……！」

警備団で知り合った、女性警備団員の名を呼んで、フィオナは目

を丸くする。

警備団員は五人いて、そのうちの二人が女性だった。それなりに女性もいるらしい。最近では、平民の女性が兵士職に就くことが増えてきていた。前代領主の奥方が、女性を守るには女性の力も必要だとして、改革に乗り出したからだ。

とはいっても、男性が女性を守るのが当然と考える傾向がいまだ強く、女性兵士数は男性に比べれば全然少ないように思える。

でも確かに、見回りに女性警備団員がいると、なんとなくフィオナは安心するので、前代領主の奥方のお考えは素晴らしいと思っていた。

「一人？ 副団長から話は聞いてるよ。大変な目にあつたらしいね。
ひるひなか 昼日中とはいえ、あまり一人でうろつくものではないよ」

さばさばとした口調でたしなめるレネ。フィオナは首をすくめる。「でも、もう一週間になりますし……。いつまでも家にいるというのも。今日は店にお客さんが多くて、家族に声をかけてから来たんです。護身道具ももらいました」

そう言つて、籠から小さな瓶を取り出す。片手で包める程の小さな四角い瓶に琥珀色の液体が詰まり、底に赤いものが沈んでいる。

「なに、それ？」

「トウガラシをつけたお酒です。危なくなったら、相手の目になさいと言われて……」

「……目つぶし水か。みずもしかして手作り？」

「恐らく。母が嬉々として鍋をかき混ぜていたので、そうだと思います」

「………そ、そうか」

気まづげに目を反らされた。

フィオナも気まづい。どんな家族だと思われていたら恥ずかしい。すぐに瓶を籠に仕舞う。

「そついや、副団長とは上手くやってる？」

「はい？」

何のことだと目を瞬く。

「あれ？ おつかしいな。副団長、何度かトレース商会まで訪ねていったみたいなんだ。少くらしい会わなかった？」

「いいえ？」

フィオナが首を傾げて答えると、レネは突然、腹を抱えて笑いだした。

「なんだ、ほんとに注意喚起にだけ行ってたのか、あの人。さっすが顔と同じで真面目の権化^{ごんけ}！」

「……誰の顔がなんだって？」

「ぎゃーっ！ 出たーっ！」

気配を消してレネの後ろに立ったロベルトの問いに、レネは幽霊を見たような顔で飛び上がった。

「ふ、副団長！ 何故ここに！」

「何故……？ 連続強盗かもしれないから、一度現場を見て欲しいという要請を貰ったんだが。なんだ、来ない方が良かったのか？」

ちらとレネを見た後、その向こうにいる班リーダーの青年を見るロベルト。青年はぶんぶんと首を振った。

「とんでもないです、副団長！ ご足労ありがとうございます！」

レネ、お前、口を慎め！ そして俺を巻き込むな！」

「すみません、リーダー！」

慌てて謝るレネ。

「それで副団長、団長はどちらに？」

「前回の件から洗い直すと言っていた。こちらは俺に任せるそうだから了解しました」

びしつと敬礼する青年。

なんだか忙しそうだと思ったフィオナは、レネにそつと声をかける。

「あの、それじゃ、私もう行きますね。お仕事頑張ってください」

そのまま場を離れようとしたが、ロベルトが片手を上げて止めた。
「フィオナ殿、今日は連れはいいののか？」

「はい。家族は皆、忙しくて……」

でも目つぶし水がある。そう付け加える前に、更に問われる。

「このまま家に帰る？」

「いいえ。その肉屋に用がありました」

「そうか、では帰りにまたここに寄ってくれ。送っていこう」

「へ……？」

びつくりしてロベルトを見上げる。

「そんな、いいですよ。送っていくだなんて。私、貴婦人ではありませんし」

「いいや、君が良くてもちからは良くない。この辺は今、物騒なんだ」

そこでふいにロベルトは身をかがめ、フィオナの耳元に顔を寄せ、口元に手を当ててひそやかに言う。

「その通りで、昨日、強盗に入られて人が一人死んでいる。君くらの年頃の娘だ。犯人はまだ捕まっていない」

ぎよつとロベルトの感情の薄い顔を凝視する。

それならば、ロベルトが異様に心配するのも頷ける。そんなことがあったのも知らなかった。女が一人でうろついているのは、警備団員としては心配して当然だ。後で家族にも注意を言っておこう。

「まだ昨日のことで、情報が行き渡っていないのだろう。十分に注意してくれ」

そう言うと、ロベルトは、必ず立ち寄るように念を押してから、薬屋の中へと入っていった。

呆然と立ちすくむフィオナ。

どこに犯人がいてもおかしくないのだ。急に気温が下がったような気がした。

「おどかしてしまつてすまないね、フィオナ。何も正直に教えなくてもいいのにな。副団長は、ちよつと融通がきかないところがある

からなあ」

レネが小声で呆れ気味にぼやいた。

「い、いいえ。教えて頂けて良かったです」

「それならいいけれど。ああ、ちゃんと立ち寄るんだよ。せっかく副団長が送ってくれると言ったから、甘えてしまえばいい。大丈夫、この街で一番腕が立つ方だから、一緒にいれば滅茶苦茶安心だ」
そう快活に笑うと、レネは、じゃあ仕事があるのでと自身も薬屋に入ってしまった。

（そ、そりゃあ、その点では安心だろうけど……）

フィオナは顔に急速に熱が集まるのを感じた。

なにせ、前にパニックになった時になだめられた前科があるのであれ以来、久しぶりに会ったので、二人きりになったらどうしていいか分からない。

「と、とにかく、お肉、お肉……」

自分を落ち着かせる為に、ぶつぶつと呟いて、フィオナは薬屋の前を離れた。

十章 - 1 強盗事件（後書き）

十章だけ、十章 - 1 というように番号を振る形式にします。

作者の独り言

少なめの分量ですが、事件物な空気を漂わせて、再度スタートです。（エセっぽい空気漂ってるけど……）推理物ではないので、その辺の期待はしないで下さいね。

十章は、章を分けるのが微妙でしたので、番号振ってサブタイトルつけていく形式にします。

話が切り替わった感じを出したかったのもありますが。まあ、読み終われば意味が分かるんじゃないかなという仕様です。

十章 - 2 浮気現場、目撃

もう大丈夫なのか。

そう訊いたら、緑のフードを被った頭がこくと頷いた。

ロベルトの見た目の鉄仮面ぶりは変わっていないが、内心、頭を抱えていた。

南通り周辺が物騒なこともあり、久しぶりに会ったので調子はどうか聞きたかったのもあり、つい送るなどと申し出たのが迷惑だったのだろうか……。約束通り薬屋に立ち寄ったフィオナはうつむいていて、最低限の返事しかない。

もしかして嫌われたんだろうかと思うと、冷や汗が出てくる。こんな善良そうな娘に嫌われるとなると、真剣に自分の顔を呪いたくなる。母には産んでもらった恩があるから決して恨みことはないが、神様に対しては呪いたくなる気がする。

「……あの、レネさんからお聞きしたんですが」

「ん？」

困り果てて天を仰いだところで、ふいにフィオナがぼそぼそと切り出した。相変わらず小さい声だが、昼間の喧騒の中でもなんとか聞こえる。

「うちの商会に、何度か注意にいらっしやっていたとか……」

「……ああいう輩はしつこいからな。様子見だ」

ほとぼりが冷めた頃合いの方が危ないが、警告して一週間は念を入れておいた方がいい。あっちの諦めもつきやすくなる。

東通りの見回り担当には、フィオナを知るレネ以外には詳しいことは話さず、嫌がらせを受けているから特に注意するように言っておいた。レネに話したのは、女性同士の方が気がつくこともあるだろうという配慮で、ハンスに話したのは、当日に一緒に行動してい

たはずだからだ。

ハンスの場合、ロベルトが注意しなくても落ち込んでいたし、なにより、ハーシエルに張り込みがばれて、説教に加えて雑用を一日中回されてひいひい言っていたから、ロベルトが言うことは特になかった。はつきり言って、説教するならハーシエルの方がずっと上手いし効果的だ。後日、見舞いにも行ったと言っていたし、十分懲りただろう。

「私も呼んで下されば良かったのに……。ちゃんとお礼を言えていなかったで、気になっていて。……ありがとうございました」

急に足を止めたフィオナがぺこりと頭を下げる。

ますますどうしていいか分からなくなるロベルトである。思えばフィオナには礼を言われてばかりだ。

「いや、仕事であるし、それに一応は知人だから、少し鼻屑にしていただけだ。当事者である君が気負うことはない」

結局、堅苦しいことしか口に出来ない。もっと上手い言い方を思いつけばいいのだが。

ロベルトの視線の先で、フィオナがまた深くうつむいた。

「……やっぱり、優しいですね」

ふふつと空気が揺れる。どうやら笑ったようだ。

その一つにとつともなく安堵するロベルト。そして、フィオナの拳動一つで浮いたり沈んだりする自分がおかしくもあった。

その後、また南通りを北上しながら、他愛の無い話をする。フィオナはハンスの彼女であるアイラと友人になつたらしく、家に遊びに来たアイラと妹のアイシスと三人で、ガールズトークで盛り上がったとかで、それが楽しかったらしい。笑みを含んだ声音で話していて、聞いているこちらも楽しくなった。ガールズトークというのがどういうものを指すのか、母一人子一人の家で育ったロベルトにはいまいち想像がつかないが、女同士で弾む話もあるのだろう。

まだ顔を見せるのは恥ずかしいというフィオナは、フードを目深に被っていて、前と同じで顔は見えないが、口元だけは覗いている

から、笑っているのは分かる。顔が見えないのは少し残念な気もするし、同時に安心もする。虫がごろごろ湧いてきて、あのハサミ男みたいな面倒な輩が増えるのは心配だ。

そうして話をしながら、街の中央にある広場にだいぶ近付いたところで、ふいにフィオナがぴたつと足を止めた。まるで警戒する猫みたいな動作に驚き、フィオナが見ている方を見……ようとして、腕を掴まれて、猛然と物影に引つ張りこまれた。

「!? どうし……ああ」

道の端に積まれた木箱の陰から、道を覗くフィオナの視線を追い、フィオナの動作の意味を、ロベルトはものすごく納得した。

（おいおいおい……）

と同時に、人目もはばからず、頭を抱えたい衝動に見舞われる。フィオナの視線の先には、ハーシエルがいた。道端で、恥じる様子も無く、見知らぬ女性を口説いている。

「……………あの」

木箱に張り付いたまま、フィオナにしては妙に低い声がロベルトに投げられる。

「……………なんだ？」

恐ろしい声音に冷や汗をかきつつ、親友にして乳母兄弟を心から罵るロベルト。何も、今、そこでそうしてなくてもいいだろうに。

「あれってハーシエル様ですよね？」

「……………ああ」

「私の見間違いではなく？」

「……………俺にもそう見えるな」

「……………そうですか」

その後の押し黙った沈黙が、暗雲を思わせて恐ろしい。

（修羅場確実か……？）

フィオナがアイシスに話せばそうなるだろう。これはどう見ても

浮気現場だ。

どうせ浮気するなら、せめて人目につかない所でしろよとロベルトはハーシエルの拙さを罵り、そしてその一方で怪訝に思う。

ハーシエルは確かにもてるし、色んな女性と付き合ってきたが、一人の女性と付き合っている時は他の女性には見向きもしないのが常である。その辺は潔癖らしく、しつかりしていた。領主家の次男として、数人の女性を掛け持ちするような醜聞は避けているようだったのに。

（それに、あの女性は金髪ではないしな……）

ハーシエルは金髪の女性が特に好きみたいで、次々に変わる恋人は金髪率が高かった。今、口説いている女性は茶色い髪をしている。顎に手を当て、真剣に考え込んでいたロベルトだが、ハーシエルが女性の腰に手を回し、近くの家が消えていくのを見て焦った。どうする？ 妹の彼氏が浮気している現場など、フィオナには毒ではないではないか。

「あいつ」

「！ な、なんだ？」

不覚にもびくついてしまった。

（なんだ、これは。俺が浮気をしたわけでもないのに、なんで俺がこんなに気まずい……？）

ゴホンと咳払いをして、場をとりなす。

身内の恥を見られたみたいで、どうしようもなく恥ずかしい。

あいつ、後で問い詰めてやる。

無関係なのに気まずい思いをさせられたことへの報復を内心で誓う。ハーシエルにしてみれば、理不尽な理由だろうが。

「今見たこと、アイシスには内緒にしておいて下さい……」
どこか気落ちした声と言う。

フィオナは怒るよりも落ち込んだらしい。

やっと落ち着いて外に出られるようになったのに、また落ち込ませるとは。ロベルトが原因ではないのに、ロベルトまでへこむ。「ああ、俺からは何も言わんと約束する。だが、まあ、あいつにしては珍しいから、何か理由があるのかもしれない。少し様子見してみないか？」

そう、ハーシエルらしくないのが引つかる。

フィオナはロベルトを見上げ、こくりと小さく頷いた。

「そうですね。私も黙って様子を見ていることにします……」

シヨックを隠せないのか、沈んだ声で返事するフィオナ。

ロベルトは後ろ頭をかき、胸中で溜息を漏らす。絶対に後で問い詰めよう。

その後は、特に会話もないまま、トレーズ商会への帰路についた。

*

帰宅したフィオナから南通りで起きた事件のことを聞かされた家族は、それぞれ仰天したようだった。

護身道具があるからって一人で家から出すのではなかったと、めいめいが心配し、事件が片付くまでは、必ず最低でも二人で行動することが義務付けられることになった。勿論、フィオナだけではなく、アイシスやレティシアやノルマンでもある。

しかし、痛ましい事件よりも切実な悩みがフィオナにはあった。

今日目撃したことをどうすべきか分からないでいたのだ。

最初はロベルトと並んで歩くだけで猛烈に恥ずかしく、顔も見れないでうつむいていたのに、浮気現場目撃後は、そっちが気になってぼーっとしているうちに家に着いてしまった。

少しもつたいないことをしたような気がする。もう少し、落ち着いて色々話をしてみたかったような気もするし、でも気恥かしから家に着いてしまつて良かったような気もする複雑な気持ちだ。

（とりあえず、様子見しておくわ。でも、次にまた見かけたら、私、どうすればいいんだろう）

ハーシエルがアイシスを傷つけるかもしれないという心配が現実になりそう、フィオナは気分が重かった。

夜になり、いつものように部屋着姿でフィオナの部屋に押し付けてきたアイシスが、今日あったことや面白かったこと、腹立つことを身ぶりを交えて好き勝手に話しているのにも、身を入れて聞けないくらいだ。

——というか、顔を見れない。

何があっても受け止められるようにしようと、アイシスがハーシエルと付き合うことになった日に決めたのに、なんて情けない。

「姉さん、どうかしたの？」

姉の態度のおかしさに、アイシスが怪訝な顔をする。

「う、ううん。なんでもないの……。いたっ」

針で指を刺して、声を漏らす。蠟燭ろうそくの明かりを頼りに、刺繍をしながら話を聞いていたのだ。

アイシスは驚いたようだった。

「姉さんが針で指を刺すなんて……！ 昼間のことがよっぽど怖かったのね。今晚はもう寝ちゃいなさいよ。私、静かにしてるから。

じゃあ、おやすみ」

そう宣言するや部屋を出ていくアイシス。

「おやすみ……」

気を使わせて申し訳ないが、今は顔を合わせないでいるのはとても助かる。

（駄目ね、私。隠し事が下手すぎるわ……）

小さく溜息を吐き、刺繍道具を机に纏めて置く。刺繍しかけの針は布の端に刺し込んで固定し、残りは針山に刺して、本数を数え直してから裁縫箱を閉じる。

不調な時に作っても、いい作品にはならないので、続きをするのは諦めた。

いつそ、アイシスの言う通り寝てしまつて、頭を切り替えるべきなのかもしれない。フィオナは蠟燭の火を吹き消すと、もやもやする気持ちを胸に抱えたまま、掛け布の中へと潜り込んだ。

十章・3 春の女神は苛烈に笑う

（嗚呼……。どうして様子見しようと思った矢先にこうなるのかしら……）

暑い日差しの中、冷や汗が出る状況に、フィオナはこの先の展開を思つて、一人がたがた震えていた。

今この瞬間までのことが、走馬灯のように頭の中を駆け抜ける。

ハーシエルの浮気現場を見たのが二日前。

アイシスに、買い物に行きたいから一緒に来てと頼まれたのが三十分前。

そして、フィオナがそれを見つけて、凍りついたのが三秒前のこと。なんでこんな道端で女性を口説いてるんですか、ハーシエル様！ 心の中で絶叫する。

「アイシス！」

フィオナはやおらアイシスの名を呼ぶと、アイシスの腕を掴んで勢いよく引つ張った。

「あつちに行きましょう」

引つ張られたアイシスはきょとんと翡翠のような緑の目を瞬かせ

る。

「え？ あつちつて、姉さん。時計屋に何の用があるの？」

「と、時計屋じゃなくて、そっちの花屋に用がね。うふふ」

「待つてよ、先にあつちの果物屋に行かせてちょうだい」

アイシスが右を振り返りそうになり、フィオナは「きゃーっ」と悲鳴を上げる。

「なに？」

びつくりして、顔をフィオナに向けるアイシス。

「あ、ごめんなさい。虫に驚いて。ほほほ」

我ながら胡散臭い返し方だ。

フィオナは心の中で頭を抱える。

「虫？ どこにいるの？」

きよろきよろするアイシスに慌てて謝る。アイシスは蛾やトンボが苦手だ。羽虫だと思ったのか、警戒している。

「もう飛んでつちやっみたい。ごめんね。さあ行きましょ」

「だから姉さん、果物屋……に……。……………」

ひいひいひい

とうとうその光景を見てしまったアイシスに、フィオナは内心で絶叫する。

ハーシエルは、こないだとは違う女性の腰に手を回し、そっと引き寄せてこめかみにキスをした。

（今、しなくてもいいでしょーっ！）

心の内では、ばたばたと駆け回って抗議しているフィオナだが、現実ではそれを口に出来ず、沈黙したままどうなることかとフィオナとハーシエルを見比べる。アイシスは黙り込んだまま動かないが、目はハーシエルを凝視している。

……………怖い。

「おや、フィオナ殿にアイシス殿、姉妹仲良く買い物か？」

「ふ、副団長さん……………」

後方からの声に、フィオナは飛び上がるほど驚いて振り返る。

うだるような暑さの中、黒衣を身に着けたロベルトが、フィオナは知らない部下二人を伴って、南通りを歩いてくるところだった。抑揚の無い声なので、口調だけ朗らかである。

「ハーシエルを探しているのだが、見かけなかったか？」

「……………」

フィオナは無言のまま、そつとハーシエルを指差した。

お相手の女性の長い髪を指先ですくいあげ、とろけるような笑みを浮かべている。

「？」

フィオナとアイシスの様子に、怪訝に眉を寄せつつ、示された方を見るロベルト。瞬間、口元が引き結ばれた。後ろの警備団員二人も、表情が強張る。やっべー嫌なもん見ちゃったよ、というように苦々しい顔を見合わせる二人。

「これは……」

ロベルトがちらりとアイシスを見る。フィオナもアイシスを見て、動かないでじつとハーシエルを見つめ続けていたアイシスの体が、ぶるぶると小刻みに震えているのに気付いた。

（……まずいわ。これは）

特大級の癩癧^{かんしゃく}を予測して、フィオナの身は硬直する。

「あ、あの、アイシス……？」

恐る恐る声をかけたフィオナに、愛らしい顔立ちの妹は、にっこりと微笑んだ。そのこめかみに青筋が浮かんでいるのには気付いたのは、フィオナだけではない。ロベルトの頬が引きつり、警備団員二人の顔が青ざめた。

嵐の前の静けさ。

そんな言葉がフィオナ、いや、その場にいる四人の脳裏に浮かんだ。

アイシスはつかつかとハーシエルへ歩み寄ると、一見すると機嫌の良さそうな笑みを浮かべた。

「……ハーシエル様、ごきげんよう？」

が、それが、怒りの裏返しであるのは、対するハーシエルの顔ま

でも引きつったことからもお分かり頂けると思う。

春の女神と称えられる、可愛らしく可憐な少女の苛烈な微笑は、恋の手練と名高い青年にも痛烈なダメージを与える。

「や、やあ。アイシス嬢……」

頬を引きつらせながらも、なんとか根性で微笑を返すハーシエルはすごい。フィオナだったら、すでに泣きだして謝り倒しているはずだ。

「うふ。そちらの素敵なお嬢様はどちら様かしら？　もしかして遠縁の親族様とかですか？　とても親しくていらっしゃるんですね……」

笑顔で淡々と追及するアイシスに恐れをなし、口説かれていた女性性は、「用事があるので失礼しますわ」とあっさり逃亡した。アイシスはそれには構わず、ハーシエルをにこにこ見上げるだけだ。

「ハーシエル様」

「ハイ」

返事するハーシエルの声が、やや裏返る。

「少々、こちらでお待ちになっていて頂けます？」

「……勿論です。僕の可愛い花」

アイシスの不思議なお願いに、ハーシエルは気障ったらしく返す。アイシスは一際鮮やかに微笑むと、一礼して歩きだす。近くの商店へ、迷うことなく。

傍観するフィオナ達まで気圧され、息を飲んで成り行きを見守る。誰も声を出せないような恐怖が場を支配していた。

盛夏の日射しですら、凍えた空気を温めることは出来ない。

戦々恐々と見守っていると、やがてアイシスが戻ってきた。左手に水の入った桶おけを持って。

そして、まっすぐにハーシエルの元まで戻ると、いっさいの躊躇ちゅうちよもなく、桶の中身をハーシエルにぶちまけた。

そんなハーシエルを、可愛らしく小首を傾げて見上げ、アイシスは鼻で笑った。

「っていうか、恋に長けてるなんて嘘ですね。どうせ浮気するならばれないようにするのが、ほんとの恋多き方でしょう？　ぜんっぜん駄目ですね。失格です」

冷笑混じりの言葉に、え？　と周りは目を瞬く。そんなところに怒っているのかと度肝を抜かれ、呆然とする。

恐らく似たような心境と思われるハーシエルが口を閉ざしているのをいいことに、アイシスはにっこりと特上の笑みを浮かべる。花が咲くような可愛らしい笑みでありながら、背後に火山でもあるような迫力を背負い、

「いつそのこと、私から振って差し上げます。さようなら、ハーシエル様。あなたの恋愛連勝記録にとどめをさせて、私、とっても光荣ですわ！」

素晴らしい捨て台詞を吐くと、アイシスはせいせいしたとでもいったげに、清々しく立ち去っていく。途中で桶を店主に突き返すのは忘れずに。

ずんずんと南通りを広場に向けて歩いていくアイシスを、啞然と見送っていたフィオナは、はっと我に返るとハーシエルに頭を下げる。

「妹が水なんてかけて申し訳ありません！」

「あ、いや……」

呆然としたままハーシエルが片手を上げて返事しかけるが、フィオナも怒っていたので、やや低めの声で突き返す。

「でも、自業自得ですよね」

「ぐっ」

「早く着替えて下さいませ。それでは失礼いたします」

痛恨の一撃に胸を抱えるハーシエルを尻目に、フィオナはアイシスを追いかけて走りだした。

アイシスはきつと激しく傷ついている。ああやって笑顔を浮かべているのは、泣きたい衝動の裏返しだとフィオナは知っていた。

（ハーシエル様の馬鹿っ。川にでも落ちて、ザリガニに鼻を挟まれちゃえばいいわっ！）

フィオナは内心で憤然と悪態をつきつつ、ひた走る。これがフィオナの精一杯の罵倒なのだった。

*

一方。

取り残されたハーシエルやロベルト達警備団員の間にはというと、なんともいえない気まずさが漂っていた。

笑った方がいいのか、慰める方がいいのか、それとも不誠実を怒ればいいのか分からない。

ただ、水をかけられたハーシエルは、不思議と様になっていて、格好良く見えないどころか普段にない色気すら漂わせているようで、部下二人は、美形ぶりに腹が立って、振られてざまあみると思っていた。顔には出していないが。

ロベルトは肩を落とし、小さく息を吐く。

「フィオナ殿の言う通り、自業自得だな。捜査なら別の手法をとれば良かるうに」

二日前に問いつめた結果、ハーシエルが女性を口説いて回っているのは情報収集の一環だと知ったロベルトは、こいつは頭良い癖に馬鹿だよなあと思え返っていた。

そして、慰めるようにほんとハーシエルの肩を手で叩く。いつも

「これはハーシエルの役目だ。顔を怖がられて落ち込むロベルトに、ハーシエルがする仕草である。逆のことをする日がくるとは思いもしなかったが。」

「ハーシエルはうつむき、肩を震わせ、やがて腹を抱えて笑い出す。『は、はははは、ははははは！』」

突然の大爆笑に、振られたせいで頭がわいたのかと、部下二人はさつき罵ったことを、やはり心の中で謝った。

「どうした？ 振られて頭がやられたか？」

ロベルトが気味が悪そうにハーシエルに問う。

「ち、違うよ。はははは！ こんな盛大な振り方する女性は初めてだよ！ なんて面白いんだ、アイシス・トレーズ！」

「……………」

ひいひい笑っていたかと思えば、じつとアイシスが立ち去った方を見つめるハーシエル。その横顔をなんとなく見て、ロベルトはあーあと天を仰ぐ。

青い目には、光がゆらゆらと揺らめいている。恐ろしく真剣な光。どうやら火がついたらしい。

こんな、顔だけはいいくせに性格がひねくれている男に本気で好かれる羽目になんて、アイシスは運が良いんだか悪いんだか。

「結構気に入ってはいたんだけど、ますます気に入ってしまったな。まったく、父上といい兄上といい、僕までこうだなんて、焼きが回っちゃったなあ」

言われてみれば、前領主の妻や現領主の婚約者である姫君は、どちらとも苛烈な性格をした女性であるので有名だ。強く激しい女に惹かれるのは血のせいと言いたいらしい。

「振られたばかりのくせに、手に入れる気満々なのか？」

不思議な男だとロベルトがハーシエルを見やれば、どこからきたのか、自信たつぷりに首肯するハーシエル。口元に手を当て、にやりと笑う。

「彼女は僕が好きだよ。だから大丈夫さ」

「……………そうか」

その悪役ばりの笑みすら、妙に様になっていて、ロベルトは腹の奥がもぞもぞした。……………なんだかイラッとする気がするのは、たぶん気のせいではないだろう。

十章・3 春の女神は苛烈に笑う（後書き）

フィオナもロベルト達もいいとばっちりです。

十章 - 4 春の女神と王子様

「やつちやったああ。うわあああんつ。でも私、悪くないもんつ、悪いのはハーシエル様だもんつ」

「……うん、うん。アイシスは悪くないわね。悪いのはどう見てもハーシエル様ね」

自分の部屋でベッドの敷布団に顔を押し付けて泣きに泣いているアイシスを見かね、その隣に座ってよしよしとアイシスの頭をなでるフィオナ。わあわあ泣く声の間、途切れ途切れに混じるアイシスの愚痴に、うんうんと頷きを返す。

あんまり酷い泣き方に父親のノルマンは心配していたが、母であるレティシアは、満足げに首肯していた。曰く、振り際に一発かましてくるなんて流石私の娘、よくやった、ということらしい。

フィオナが大層呆れたのは言うまでもない。

この場合、ノルマンの反応の方が正しいと思うのだ。

「なによ、あの女つ。私の方がずっといい女じゃないつ。ハーシエル様の馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿。見る目なさすぎのポンコツ野郎おおっ！」

バコバコと敷布団を叩いていたかと思えば、うつつとつめく。

「でも、うつつ、好きなのよお。うわあああんつ。なんで振っちゃったのよお、私いつつ！」

すつきりしつつも後悔しているらしい。

まああれだけ夢中だったのだから、そう簡単に諦めきれないだろう。

アイシスは自分の思い切りの良さをうめいているわけだ。

浮気されるよりマシではないかと思っただけで、火に油を注ぐだけだと思い、フィオナは苦笑するだけで何も言わず、背中をポンポン叩いてやるだけだ。

そうして、アイシスが一晚中泣き続けて、泣き疲れて眠るまで、フィオナはずっと側にいて慰め続けていた。これくらいしか出来ることがないのが、フィオナには申し訳なくてたまらなかった。

その翌日。

午後を過ぎた頃の訪問者に、徹夜したせいで眠い目をこすりながら対応したフィオナは絶句した。

そこにいたのが、何故か大輪の薔薇の花束を抱えたハーシエルだったのだ。

「あ、な、なに。なんで……？」

もう会うこともない。会っても見かける程度だと思っていたフィオナからすれば、この訪問の意図はさっぱりだった。

ハーシエルはにっこりと穏やかに微笑む。

「フィオナ嬢。良ければアイシス嬢にお目通り願いたいのですが」
「……………」

キラキラとした笑顔を振りまくハーシエルを、フィオナは警戒たつぷりに見つめる。困惑よりも、疑心の方が強かった。

「……まだ、妹を傷つけるおつもりで？」

小さい声だが、低い声が出た。あれだけアイシスを泣かせておいて、今更のこのこ現れるなんて冗談ではない。姉として本気で怒っている、ハーシエルはおやというように片方の眉を軽く引き上げる。フィオナが攻勢に出たのは意外だったらしい。

「昨日の件は申し訳ありませんでした。少々、犯人探しに手間取ってしまして。ああ、もちろん浮気ではありませんのであしからず。お陰さまで犯人も見つかりましたし」

「……犯人？」

「なんのことかと首をひねる。」

「ほら、南通りの強盗事件の」

「ええ！？ あの事件のですか！？」

もう片付いたのか。

目を丸くして驚いていると、ハーシエルはにこりとする。

「恋敵への憎悪ってやつですよ。犠牲者の女性には、恋人がおりまして。きっとその辺が怪しいと探っていたのです。薬屋の件は、それを強盗でカモフラージュするためだったようですね。少々手荒に進めたので、アイシス嬢には悪いことをしてしまいました。——あ、もちろん、これは捜査上の秘密に触れるので、アイシス嬢やご家族の方以外には内密にお願いしますね」

「はあ……」

気が抜け、肩を落とす。

なんでもないことのように言っているが、なかなかとんでもない捜査手法な気もする。女性を片っ端から口説いて、情報を集めるってどうなんだそれは。

「それでなのですが、姉上」

「……あねうえ？」

何かすさまじく変な単語を聞いた気がして、フィオナはフードの下で壮絶に変な顔になった。

「不肖、ハーシエル・クレスシエン・ウォルトホルは、昨日のことでああなたの妹君に心底惚れてしまいました。よければ改めてお付き合いを申し込みたいのですが、その機会を与えて頂いてもよろしいでしょうか？」

あまりに慇懃^{いんぎん}に問うので、フィオナはたちまちしどろもどろになる。こんな風に訊かれる機会などないので、どう返していいものか

悩み、とりあえず玄関口で待つてもらうことにした。

「……アイシスと呼んできます。でも、失礼ですがそちらにいて下さい」

妹を傷つけた男というのに変わりはないので、アイシスが良いというまで、敷居をまたがせる気はない。きっとノルマンやレティシアもそう対応するだろう。父母はフィオナだけではなく、アイシスにも心から甘いので。

「了解しました、姉上」

「……………」

だから、姉上って、なに。

いつからフィオナはハーシエルの姉になったのだ？ よく分からないもやもや感を胸に覚えながら、フィオナはきびすを返して二階への階段に向かう。

そして泣きすぎではれた目蓋を、濡れタオルで冷やしているアイシスに用件を告げると、アイシスは仰天して数秒フリーズした後、慌てて身なりを整え、階下にすつとんで行った。

気になるので後を追いかける。

階下に下りると、ハーシエルが薔薇の花束をアイシスに捧げたところだった。

「アイシス・トレーズ嬢。昨日のことで、あなたのことに本気になってしまいました。もし許して頂けるなら、結婚を前提にお付き合いいして頂けないでしょうか？」

胸に手を当て、恭しく申し出るハーシエル。

硬直してじつとハーシエルを見上げ、目を見開いたアイシスは、うつつとまた泣きだした。緑の目から雫が零れ落ち、やがてくしゃと涙に歪んだ顔になる。

「ひ、ひどいです。こんな顔してる時に、そんな素敵なことを言わなくても……………」

アイシスの答えはこうだった。

そのまま薔薇を放り捨ててハーシエルに抱きついたアイシスを、ハーシエルは満足げに笑って受け止める。

「許して下さるんですね？　ありがとうございます」

「うつつ。もう、浮気しないで下さいよ……！」

「ええ。神とあなたのご家族に誓います」

ハーシエルはあっさり宣誓までしてのけた。

後ろから見守っていたフィオナは、本気なんだと驚き、呆然と佇んでいた。なにごとかを話しかけられる雰囲気ではない。

その後、感極まったアイシスが、わっと泣き出した。

「うわーん、大好き——っ！」

そして大声で告白して、わんわん嬉し泣きし始めた。

「僕もです。可愛い花」

とろけるような笑みを浮かべ、ハーシエルはアイシスのこめかみに軽くキスをした。

もちろん、直視してしまったフィオナは、わたわたと二階に逃げた。

（そういうことを、玄関先でしないで下さいつつ）

顔を真っ赤に染めたまま、部屋のベッドに倒れ伏す。

今度はフィオナが泣きたい気がしてきた。

嬉しいような、妹をとられたようで寂しいような。二人が結婚したら、あんな義理の弟が出来るのかと思うと恐ろしいような。

複雑すぎて目を回しながらも、フィオナはとりあえず心の中で妹に祝福の言葉を呟く。

おめでとっ、アイシス。あなたの恋が、夢ではなく本物になって良かった。

十章 - 4 春の女神と王子様（後書き）

作者の独り言

十章 - 4 だけ、妙に短いですが。

十章完結です。

妹の恋の結末でした。ありがちすぎて面白くなかったら申し訳ないですが；

アイシスの暴走っぷりは書いていて楽しいです。

てゆか、ハーシエルの台詞が書いててかゆかった……。こういうの言っちゃっても全然平気な美形さんです。似合うからまた腹立つ、みたいな。

アイシス編は終わりですが、お話はまだ続きます。

急いでとりあえず上げました。誤字脱字とか見つけたら、後でまた訂正にきます。とりあえず寝ます……。明日も朝が早いのです。

十一章 目隠し姫の親友

カランカラン……

馴染みの雑貨屋の扉を開くと、扉につけられたカウベルが涼しげな音をたてた。

「あら、いらっしやいフィオナ」

「こんにちは、ニルマ」

音を聞きつけ、店の奥から顔を出した赤茶色の髪をした少女――ニルマ・オールデイスが笑顔で挨拶をするので、フィオナもはにかんだ笑みを浮かべて返す。

「頼まれた物を持ってきたの……、どうかしら？」

「見本品ね！　ありがとう、見せて」

ニルマは濃い緑の目を明るく輝かせ、カウンターを回って店内側に出てくる。フィオナは籠から髪飾りを取り出し、ニルマに渡す。

長い髪をお下げにし、鼻の辺りにそばかすの浮いた、やや浅黒い肌をしたニルマは赤色のエプロンドレスの裾を翻して颯爽と歩いてくる。ニルマは姉御肌で快活に笑うところがかっこ良く見え、親しみやすい印象の少女だ。アイラと友達になるまでは、フィオナのたった一人の友人であり、そして幼馴染でもある。フィオナが大人しいせいでニルマの方が年上に見られがちだが、同い年である。

「おお、やつぱりあんだのセンスはいいわね」

青地の大きめのリボンに、細いレースリボンを飾り付け、結び目の辺りを赤や黄色の飾りボタンで飾っている髪飾りをかざして持ち、ニルマがうなる。この雑貨屋で売っている飾りボタンやリボン、端切れなどを使って作った見本品の制作を頼まれていたので、その完成品をフィオナは届けに来たのだ。

「あたしも裁縫は得意だけど、小物はフィオナには敵わないわ」

「ありがとう。でも、ニルマの人形には私だって敵わないわ」

「ふふっ、褒め言葉どうも。でも、あたしだって人形師のはしくれですからね。そうそう負けてらんないわ」

ニルマはにっこりと笑い、片目を軽くつまむってみせた。

雑貨屋オールデイスの店内は、半分が雑貨屋、半分が人形の並ぶ区画というように分かれている。店自体はニルマの母親とニルマが取り仕切り、店の裏にある工房では人形師であるニルマの父親が人形作りに精を出している。ニルマの父親は、ウォルトホル領内でも一、二位を争う腕の人形師で、店に並んでいる品も質が高い。貴族やお金持ち向けの精巧な人形から、平民が買えるような布製や毛糸製の人形までさまざま取り扱っている。ニルマの父親は、基本的に肌の部分を木を削って作る人形が得意らしい。

ニルマもまた、そんな父親の背を見て育ったせいかな、雑貨屋を手伝う傍ら、人形師の仕事をしている。父親にはまだまだ追いつけないらしいが、それでもフィオナからすればずっと上手で可愛らしい人形を作る。ニルマは布製の人形を得意としていて、とてもレベルが高いのだ。

「今度、人形に着せる服のことでアドバイスちょうだいよ」

「……私なんかの言葉で良ければ」

フィオナの受け答えは控えめだ。フィオナは趣味や家の手伝いで裁縫が上手くなっただけで、本職ではないからあまり期待されても困ってしまう。

フィオナの気の弱さを知っているニルマは、フィオナの心配をあとさり笑い飛ばす。

「大丈夫よ。こっちとこっち、どっちが可愛いと思う？　っていう程度だから。お客さんにもたまに聞いてるんだから、重くとはなくていいって」

「それならいいけれど」

ほっと胸を撫で下ろす。

本当のところを言うと、自分の家の手伝いならともかく、友達の

店の見本品まで作るのは気が引けたのだが、幼馴染のたつてのお願いだつたので引き受けたのだ。雑貨屋の常連であるフィオナに、ときどきおまけしてくれることもあるので、それへの礼も兼ねて。

「ああ、そうだ。フィオナ、アイシスのこと聞いたわよ！ 往来で、団長さんに水ぶつかけたんだって？ あの子、ほんっと気が強いわよね。笑っちゃったわあ」

ふと手を叩いたニルマが、からから笑いながら言う。

「ええっ、もしかしてもう噂になっているの……？」

「当たり前でしょ！ 昼間に、あの団長によ！ なんでも団長の浮気に切れてのことらしいじゃない？ 公衆の面前で盛大に振ったんだから、噂になるわよ、そりゃあ」

「……………」

怒っていたアイシスを思い出し、フィオナは無言になる。あの恐ろしさを知らないから、噂で盛り上げられるのだと思う。

「アイシスって、美人なの鼻にかけないところはいいけど、気が強いでしょ？ つい、小さい頃、この近辺のガキ大将までノックアウトして、それ以来、へこへこされてたの思い出しちゃったわよ」

そういえばそんな時期もあったなあ。

フィオナは小さい頃のことを思い返す。

確かアイシスが十歳かそこらの頃のことだっただろうか？ 好きな子をからかう男子というのはどこにでもいるもので、それに怒ったアイシスが、取っ組み合いの喧嘩をし、勝利して帰ってきたのだ。泥だらけの服を洗った覚えがある。

妹のじゃじゃ馬ぶりを思い出し、フィオナはこくこくと頷いた。

それを見たニルマは、腕を組んでうなるように更に言う。

「あんたは知らないでしょうけど、アイシスの美人っぷりをねたんだ女の子達が、地味ーに悪口言ったり微妙な嫌がらせしてたのも、ぜーんぶ、自分で向かってってやめさせちゃうんだからすっごいわ

よね。しかもあんたを『目隠し姫』呼ばわりしてからかった男連中も、アイシスが口喧嘩と平手で叩き潰しちゃうしね。ほんとすごいわ」

「……………え？」

なにそれ。今、ものすごく凄い事を聞いた気がするのだが。

確かに、アイシスをねたんだ女の子による些細な嫌がらせがあったのを知っていたが、我慢できないことに対しては、アイシスは該当する女の子の所に行き、相手が泣きだすまで徹底的に口喧嘩していたのも知っている。それで、そのうち、アイシスに何かすると倍返して返ってくるのを学んだ女の子達からは何もされなくなった。しかも彼女達とは不思議な友情を育んだらしく、憧れの眼差しをアイシスに向けるようになっていた。たぶん、嫌がらせを受けた女の子を見たアイシスが、その相手にも向かっていったせいだ。かつての敵が味方になった状況に、前に嫌がらせをした側は心を打たれたようだと推測している。

だが、後半については初耳だ。

目を丸くして固まっているフィオナを置き去りに、ニルマのお喋りは続く。

「春の女神みたいって言われるくらい可憐なのにね、ほんとと真っ直ぐな性格してるからねえ。あんな振り方されたのに、逆に本気になっちゃったっていう団長さんは、かなりの変わり者だったんだって皆思ったみたいでさ。思ったほど、女の子達から不満は出てないわよ。全ては団長さんの好みがおかしいんだってことでまとまって……………って、どうかした？」

「い、いえ。アイシスはおてるのに、変人っていうのがよく分からなくて……………」

「あの子がもてるのは、見た目しか知らない相手からだけでしょ？ 性格を知ってたり、昔泣かされた連中の間だと、アイシスを好き

になる奴は少人数ね。逆に良いつていう奴もいるわ。でも、大半は、あれは自分の手には余るから、遠くから見て、目の保養にしてるだけでいいって言っかな」

あっさり返されてしまい、フィオナは沈黙するしかない。

「なんでそんなに詳しいの……？」

「あら。雑貨屋のお客さん達の井戸端会議をなめちゃ駄目よ」

「…………ごめんなさい」

完全になめてました。

トレーズ商会でも女性客が井戸端会議をしていることはあるが、雑貨屋も女性客が多いから井戸端会議が始まるのだろう。店番しているニルマが情報通になってもおかしくはない。

カラララン

扉につけられたカウベルが涼しげな音を立て、若い娘が三人、お喋りしながら入ってくる。

「いらっしやい」

「こんにちは。ニルマ、リボンを見せてもらっわね」

「そっちの棚のをどうぞ。一番左のが入荷したばかりのものよ」

「ありがとう」

娘三人、巻いたリボンが並んでいる棚に向かい、きゃいきゃいと話し合います。

それを見ていて、フィオナは不思議に思う。フィオナの家の店のように、この雑貨屋も、わいわい立ち話だけして帰る者が多いのだが、買う気満々のようだ。

「最近、うちの店もお客さんが多いのよね……。祭りの前でもないのに、どうしたのかしら……？」

貴族と違い、平民は、余程気合を入れない時だけ仕立屋に行くのが普通で、ほとんどは自分で服を作る。服を作るのは家庭を支える妻や娘の役割の一つに考えられていて、裁縫の腕を磨くのは花嫁

修業の一貫だとも考えられているくらいだ。服だけではなく、皮製などの技術がいる物以外の鞆や小物などの類も自分達で作る傾向が強い。

トレーズ商会では布しか売っていないが、雑貨屋は糸や飾りボタンやリボンを置いているので、それを目当てにしているのだと思う。服を作るにも金がかかるので、毎日品が売れるわけではない。たいてい、季節の変わり目や、祭りの前に新しい服をおそろと考えた客によって売れることが多い。

季節の変わり目ではないし、収穫祭は二ヶ月後だから、一ヶ月後ならまだしもこんな風に売れる理由はないのだが……。

「なに言ってるのよ、フィオナ。二週間後に花嫁パレードがあるでしょう？ お祭り並みに屋台も出る予定らしいし、皆が浮かれて服を新調して当然じゃない」

ニルマが呆れて口を出す。

「花嫁パレード？」

フィオナがきょとんとすると、ニルマは信じられないというようにカウンターをばしつと叩いた。

「はあ！？ まさか知らないの？ 二週間後、正確には十五日後に、シエディール様が南のリューエン領のヨランダ姫を花嫁に迎えられるのよ。その時に盛大にパレードをするってわけ。前領主様の時以来だから、二十八年ぶりの御祝い事ってことで、浮かれてるってのに……。自分の住んでる領地のことくらい、ちゃんと把握してなさいよ」

フィオナは首をすくめる。

「そうだったのね。私、必要最低限しか家から出ないから……。両親もそんな話をしてなかったわ」

「知ってて当然だと思ってたんでしょ。でも、あの話好きなアイシスちゃんがいるでしょ」

「アイシスはハーシエル様のお話ばかりよ」

「……なるほど」

ニルマは重々しく頷いた。

知っているだろうと何も言わない両親と、パレードそっちのけのアイシス。そんな家族に囲まれ、ときどきしか外に出ないのでは、自然と情報が行き届かないのも分かる。フィオナは疑問に思っても自分から問うてまで疑問解消を頑張るタイプではない。たいてい、当日になってそんなことだったのかと慌てふためくことが多い。おっとりしている上に、引込み思案なのがいけない。

ニルマは気を取り直して、笑みを浮かべる。

「ま、私達は売上が上がって万々歳よ。どう？ フィオナも一つ買っていけない？」

フィオナはじつと考える。

花嫁パレードかあ。人混みは苦手だが、アイシスと見に行ってみようか。きっとハーシエル様は警備でアイシスとデートというわけにはいかないだろうし……。周りがお洒落をするのなら、フィオナも少しくらいお洒落をしても浮いたりはいしないだろう。

「そうしようかな。レース用の白い糸と、青いリボンを二メートル分下さいな」

「お買い上げ、ありがとうございます」

につこり笑顔で一礼するニルマ。

フィオナとニルマは、顔を見合わせて笑った。

「あ、やっぱりここにいた。姉さん！」

「あら、アイシス」

フィオナが買った品を籠に仕舞っていると、扉のカウベルが鳴り、アイシスが顔を出した。

アイシスを見たニルマはにやりと笑う。

「いらつしい、アイシスちゃん。ちょうどあんたの話で盛り上がってたところよ」

アイシスは怪訝な顔をする。

「ニルマ、余計なこと言つてないでしょうね？ あることないこと姉さんに吹き込むのやめてよ。姉さん、信じやすいんだから」

牽制を仕掛けるアイシス。ニルマは面白いと思うと、そのことを他の人に話す時にやや誇張して話す癖があるので、警戒しているのだ。

「安心しなさいよ。あることとあることしか言つてないわ。あんたが小さい頃にどれだけじゃじゃ馬だったかって話よ。あ、今もそうか。ごめんね」

にやにや笑うニルマを、アイシスは頬を膨らませて睨む。

「ニルマってほんと意地悪よね！ 姉さんには優しい癖に」

「あら嫌だ。あたし、あんたにもちゃんと優しいわよ。親友の妹だもん。それで、お姉ちゃんが大好きなアイシスちゃんは、何でお姉ちゃんを探してたのかなあ？」

完全にからかいモードになっているニルマの冷やかに、アイシスはますます膨れ面になる。

「子ども扱いしないでよ！ 馬鹿ニルマ！」

「あーら、そういうこと言っちゃう？ あんた、家の手伝いやハーシエル様もいいけど、たまには女友達とも遊びなさいよ。男ばっか追いかけてると友達いなくなるわよ」

「マーサやエミリーとも遊んでるわよ！ 失礼ね！ ニルマだって、人形ばっかり作つてると、いかず後家になるわよ！」

憤然と言い返すアイシスに、ニルマはにやにや笑いを崩さず、肩をすくめてみせる

「残念でしたあ。あんたと違って、あたしは追いかけるんじゃないかって追いかけられる方なの。心配しなくてもあたしの旦那はもう決まってるんだから」

ふふんと豊かな胸を反らし、自慢げに言い切るニルマ。アイシスは悔しげに口を引き結ぶ。

二人の遣り取りを見ながら、フィオナは苦笑混じりの笑みを零す。口が達者なアイシスを言い負かせるのは、レティシアかニルマくら

いなものだろう。

あんまり放置していると、アイシスの機嫌がどんどん下降してくだるうことは目に見えているので、そつと口を挟む。

「ええと、それでアイシス、どうしたの？ 何かあった？」

アイシスはパツと膨れ面をやめ、フィオナを見る。

「うん。あのね、納品を頼まれて、近いし量もそんなにないから、私と姉さんで行って来てってお母さんが」

「どなたの所？」

「バギンズさんの仕立屋よ」

「ああ、マイラおばあちゃんの所ね。それなら差し入れも持つて行かなくちゃ」

おやつにと作って冷ましていた焼き菓子があるから、それを持つていこう。

フィオナは自宅の台所を思い浮かべ、持っていくものを考える。

マイラは店に近くから通いで来ている手伝いの少女が一人いるだけの、一人暮らしの老婦人だから、納品を兼ねて様子を見に行くことにしているのだ。ノルマンが小さい頃によく世話になっていたらしく、氣遣うように頼まれている。フィオナやアイシスが行かない時は、両親のどちらかがときどき顔を出している。

「じゃあ、ニルマ。またね」

「うん。見本品、ありがとね。またいつでもおいでよ。ついでにアイシスも」

「“ついで”は余計よ！ じゃ、お邪魔しました！」

憎まれ口は返しつつも、ちゃんと礼を言うのは忘れないアイシス。すたすた歩いていくアイシスの背中を追いかけて、変な所で素直な妹だと感心するフィオナだった。

十一章 目隠し姫の親友（後書き）

ちょっと入れるか悩んだけど、フィオナのお友達を出してみました。

十二章 鉄仮面さんと幸せの在り処

「マイラおばあちゃん、元気そうで良かったわね」

西通りにある仕立て屋への届け物の帰り道、空っぽの籠を提げ、フィオナはアイシスと並んで西通りを歩いていた。

「うん、そうね」

アイシスは機嫌良く返す。

マイラは優しい容顔をした温和な老婦人なので、アイシスはとても懐いている。父方の祖父母はもう他界していないし、母方の祖父母は健在だが隣町に住んでいるので滅多に会わない。それで、余計に祖母のように思っただけだ。アイシスだけでなく、フィオナもそうだ。父親が恩人のように思っただけにしている人なら尚更である。

「……あら？ アイシス……？」

道の端をゆっくり歩いていたフィオナは、ふと右隣を歩いていたはずのアイシスがいないのに気付いて、驚いて周りを見回した。後ろの方、反対側の道の端に金色を見つけて、首を傾げる。

焦げ茶色の髪をした女性が、道端でしゃがみこんでいて、アイシスはその女性の側にしゃがんで気遣っている様子だ。目端のきく妹に感心すると同時に、ただならぬ雰囲気ドキッとする。

「アイシス？」

道を横切り、フィオナは戸惑い気味にアイシスに問う。

女性は苦しそうに胸を押さえていて、げいげいと息をしている。額に脂汗が浮いていることから、思わしくない容態なのは一目瞭然だった。

「大変！ お、お医者様……っ」

おろおろと女性と周囲を見回すフィオナの前を、アイシスはスカ

―トを翻して走りだす。

「お医者さん、連れてくる！ 姉さんはここにいて！」

「わ、分かったわ……」

そう返事した時には、アイシスの後姿はだいぶ小さくなっていた。自分の情けなさに落ち込む反面、どうしたらいいのかとおるおろしつつ、女性の側にしゃがみこんで、女性の肩に触れる。

「大丈夫ですよ、すぐにお医者様がいらっしゃいます。もう少しの辛抱ですよ」

苦しそうなのに背中をさすっていいのかも分からず、とりあえず励ますことにする。左手をそつと握ると、女性はぜいぜい言いながら、まるでフィオナの右手をよすがにするみたいにぎゅうぎゅうに握りしめてくる。

掴まれた手が痛かったが、フィオナはもう片方の手もその手に添え、声をかけ続けた。

やがてアイシスが大柄な青年を伴って戻って来て、青年は女性を抱え、四人で診療所に走った。

「お嬢ちゃん達、よくやってくれたよ。ハンナさんを連れてきてくれてありがとうな」

三十代くらいだろうか、無精髭を生やした、野暮ったい印象の医師の青年は、灰色の目を細めて言った。この医師はダンカンという名で、さっきやって来た大柄な青年は、診療所手伝いのディケルという名らしい。

「いえ、そんな、私は何も……。妹が気付いたお陰で……」

フィオナは困りきり、ちらりとアイシスを一瞥する。

「私だって、ただ気付いてディケルさんを連れてきただけよ。お礼を言われることじゃないわ。気付いてたら誰だってそうしてた」

アイシスはきっぱりと返す。そして、診療所内の粗末なベッドで眠る女性――ハンナを見る。

「この人と先生ってお知り合いなの？」

「まあね。俺はハンナさんの主治医でね。今日が診察日だったんだ。ここに来る途中で具合を悪くしちゃったんだろ。不整脈もおさまったし、薬も飲ませたから、あとは安静にしてれば大丈夫だ」

ダンカンはその言うと、困ったようにぼりぼりとぼさぼさの茶色の髪を掻く。

「でだ。ちよいと悪いんだが、お嬢ちゃん達、この人の息子さんが帰るまででいいんだが、ハンナさんの家で傍にいてやってくれないか？　ここは手狭で、いつ他の患者が来るとも限らん。冷たいかもしれないが、ずっとここに寝かせてやつとくわけにもいかなくてな……。あ、もちろん運ぶのはこいつだから、そこは気にしないでいい」
アイシスはきつい目でダンカンを見る。

「でも、また具合悪くなったらどうするのよ。私達は医者じゃないのよ」

「具合悪くなったら、こいつを空に飛ばしてくれ。すぐに駆けつけるからよ」

ダンカンは窓辺に行き、木製の鳥籠をフィオナ達の方に突き出す。中には白い鳩が一羽入っていた。

「容態なら十分に落ち着いている。ただ、ここじゃ寝かせてられないから、場所を変えるってだけだ。な？　頼むよ。人助けだと思ってさあ」

パンと両手を合わせ、拝む仕草をするダンカン。フィオナとアイシスは顔を見合わせる。

「アイシス、ついててあげましょうよ。病気の時に目を覚まして、誰もいなかったら寂しいと思うわ」

フィオナがやんわりと取り成すと、アイシスは渋々というように頷いた。

「姉さんがそう言うなら……」

それから、キッとダンカンをねめつけ、威勢良く言い放つ。

「ほんと、鳩が飛んできたらとつと来なさいよ！　藪医者！」

「俺は藪じゃねえ！」

すぐさま反論するダンカンは、ぼさぼさ頭に無精ひげ、よろよろの白衣姿のせいで、まるつきり藪医者にしか見えないのだった。

*

「悪いな、二人とも。よろしく頼んだよ」

厳つい顔に似合わず、穏やかな声で頼むと、ディケルはハンナの家を出て行った。

頼まれたフィオナとアイシスは、そつと顔を見合わせる。

幸いにしてハンナのスカートのポケットに家の鍵があったから良かったものの、あの騒ぎの中で失くしていたらえらいことになっていたと思う。

ダンカンの説明するところによれば、ディケルは傭兵上がりらしく、怪我をして行き倒れている所を拾って以来、診療所兼自宅であるダンカンの住まいに住みついているのだとか。それで家賃と称して使い走りをさせているらしい。使い走りにする方もどうかと思うが、それを受け入れているディケルもよく分からない男だ。

がつしりした背中が遠のいていくのを何となく見送り、家に入る。灰色の石造りの、こぢんまりした平屋の一軒家だ。井戸を探しに勝手口から外に出ると、勝手口のすぐ前に井戸があり、更に向こうには家より広い庭があった。野菜やハーブ、花が植えられている。

ハンナが起きたら、何か食べさせて薬を飲ませるように指示をもらっていたので、フィオナはアイシスにハンナの側にいてもらい、悪いと思ったが勝手に台所を使ってスープを作った。食材も台所に置いてあるものを少し失敬した。

（あ、そうだ。生水はきつと良くないわよね……）

冷たい水で身体を冷やすのは悪いだろうと思い、井戸水を沸かして、冷ましておく。

「アイシス、ハンナさんの様子どう？」

ハンナの自室のベッド脇、適当に運んできた椅子に座って様子を見ていたアイシスは、抑えた声で答える。

「静かに眠ってるわ」

「そう。よかった……。こっちの用意も出来たわ」

フィオナも小さな声で返す。

すると、アイシスは静かに立ち上がる。

「じゃあ、姉さんがついててあげて。私、ひとつ走り家に帰って、母さん達に一言言つて来るから。何か食料も見繕ってくるわね」

「アイシスばかり走って悪いわ。私が行ってくるわよ」

「駄目よ。姉さんまで途中で倒れそうなもの。ここにいて。それから、フードは外してた方がいいわよ。起きた時にフードを被った怪しい人って思われて驚かせたら悪いわ」

「う……」

フィオナは緑色の外套に手を当てる。確かに驚かせそうだな。

それに地味に衝撃を受けている間に、アイシスがするつとフィオナの横を通り抜けてしまう。

「あ」

慌てて呼び止めるもむなしく、アイシスは素晴らしい早さで外に出て行ってしまった。健脚ぶりが恨めしい。

フィオナは小さく息を吐き、諦めてすぐごとハンナの寝室に向かい、ベッド脇の椅子に座る。そして外套を脱ぐと、椅子の背にかけた。

（やっぱり変な感じ……）

視界が広がりすぎて落ち着かない。

誰に見られているわけでもないのに、フィオナはおどおどと肩をすくめ、ベッドで眠る女性を見つめる。

やや青ざめた顔をした、中年女性。焦げ茶色の髪は後ろで編み込まれていたが、寝ているからとほいておいたので、胸元まである髪が枕に広がっている。少し痩せているけれど、温和そうな女性だ。突出した美人というわけではないが、好ましい印象を与えるすつき

りした容貌をしている。

これでもう少し血の気が良かったら魅力的な女性だろうと思う。
石造りの家は、窓を開けているから、風が通っていて涼しい。
フィオナはゆるゆるとした空気の中、じっと座ったまま、ハンナ
が目覚ますのを待った。

三十分くらい経ったが、まだアイシスは帰ってきていない。

フィオナが玄関の方を気にしていると、ふいに声が聞こえた。

「……し………」

視線を戻すと、ハンナがフィオナの方を見て、口を動かしている
のに気付く。

「目が覚めたんですね。具合はどうですか……？」

枕元に近寄り、静かに問いかける。

ハンナは緑色の目でぼんやりとフィオナを見ている。

「？ 具合は、どうですか？」

聞こえなかったのかと思い、もう少しはっきりした口調で、ゆっ
くり問う。

だがハンナから返ってきた言葉は意外なものだった。

「天使………」

「……………え？」

きょとんと目を瞬く。

気のせいかな、今、天使と言わなかっただろうか。

そう思ったところで、ハンナがフィオナに視線を向けながらも、
どこか虚空を見ているようだと思いき、背筋がぞつと凍る。

（これは、息子さんをお呼びした方がいいんじゃない………）

もしかして臨終の場面なのだろうかと思つと頭が真っ白になる。

「とうとうお迎えがきたのね………」

ハンナはかすれ気味の声で呟く。

ますますフィオナが戦慄したところで、玄関の方からガタンとい

う音が聞こえ、バタバタと駆けてくる足音がした。

「母さん！ 倒れたって……っ」

物音にぎよつとしていたフィオナは、現れたのがロベルトだったことに尚更仰天した。椅子の上で硬直する。

が、ロベルトはこちらには気付いておらず、警備団の本舎から走ってきたのかぜいぜいと肩で息をしながら、ハンナの寝ている寝台に近付く。

まだぼんやりしているハンナの額に手を当て、首筋に指を当てて脈を診始め、納得した様子で安堵の息を吐く。

「熱はなさそうだし、脈も落ち着いている。大丈夫だ」

しかしハンナはまだぼんやりしたまま、フィオナの方を見て言う。

「ロベルト、大変よ。天使さまがいらっしゃるわ」

「天使？ 母さん、大丈夫か？ 発作のせいで幻覚が見えるんだとしたら重傷だな……」

母親の発言を重くとらえたロベルトは真面目に呟いて、それからハンナの見ている方を見る。黒目を大きく見開いた。

「なっ。フィオナ殿？ まずいぞ、母さん。俺も幻覚が見えるみたいだ……」

ロベルトとハンナともども幻覚扱いされたフィオナは、ちよつと泣きそうだ。

「姉さん、戻ったわよ。ハンナさんの具合どう……？ あれ？ あっ、鉄仮面！ じゃなかった、副団長さん！」

食料の入った籠を抱えたアイシスが戻って来て寝室に顔を出し、驚いた顔をする。さりげなく失礼なことを言ったので、フィオナは冷や汗をかいた。

「まあ。天使が増えたわ。ありがたいことね……」

恍惚とした表情で、ハンナは幸せそうに拝みだす。

「へ？」

拝まれたアイシスは頬を引きつらせ、フィオナは困惑の極みで泣きそうになっている。

その後、幻覚ではなく本物だと気付いたロベルトが謝り、ハンナの誤解を解いてくれた。

＊

母が発作で倒れた。

警備団の本舎に知らせに来てくれたディケルの言葉にロベルトは大層仰天し、ちょうど居合わせたハーシエルの許可が下りたのもあって急ぎよ帰宅した。

六年前に心臓を患って以来、住みやすいようにと領主家を辞して丘下の街で暮らし始め、最近は容態も落ち着いていたところに突然だ。

最悪の事態を想像して血の気が引いたものの、落ち着いた容態の母の姿にほっとした。

ロベルトの家は母子家庭だ。ロベルトがまだハンナのお腹にいた時に、ロベルトの父親が事故で亡くなり、未亡人になった為だ。それで働き口に困っていた母は、たまたまハーシエルの乳母を探していた領主家に仕事場を見つけ、一時期領主家に仕えていたのである。母親に苦勞をかけていると自覚しているロベルトは母親に頭が上がりないし、乳呑児ちのみいを抱えて困っていた母親に仕事場を提供してくれた領主家にも頭が上がりない。領主家を辞しても、警備団に入っているのは、領主家の力になれる場所だったからだ。会ったこともない父親譲りの剣の腕があったというのも理由の一つだが。

「天使さまの料理を食べるなんて、幸せだわあ……」

母であるハンナ・アスレイルは、とても嬉しそうにぼやんと手

を合わせる。ありがたいものみたいにスープを拝み、幸せそうにスープを食べる。

たまたま倒れた母を医師の所まで連れて行ってくれた上、看病までしてくれていたトレーズ姉妹はというと、物言いたげにじつとロベルトを見てくる。

「……母さん、この二人は天使ではなくて人間なんだが」

「ええ、ええ。分かってるわ。人間の姿をしているのよね」

「……………」

ちゃんと訂正したのだが、これだ。

ハンナは昔からおっとりしている上、思いこみが激しいところがあったが、ここまで頑なに信じるのは珍しい。

まあ、死にかけて、目が覚めて最初に見たのがこんなに綺麗な少女二人なら、そう思い込みたくなる気持ちも分からないでもないが「とつてもおいしいわ。ありがとう、天使さま」

につこりと無邪気に微笑むハンナ。心からの礼を言われて、フィオナの頬が僅かに赤くなり、恥ずかしそうにうつむいてしまう。どうやら料理を作ったのはフィオナらしい。

「ど、どういたしまして……」

はにかんで消え入りそうな声で返すフィオナを、ハンナはにこにこ見つめている。

「それを召しあがったら、お薬を飲んで下さいね。お医者さんから預かってますから」

「ええ、ありがとう」

穏やかに微笑むハンナと、その笑顔をやや眩しげに目を細めて見るフィオナ。椅子に座るフィオナの横では、アイシスも親しげに微笑んでいる。

なんだろう、この空気。

ロベルトだけ蚊帳の外に放り出されているような疎外感に、居心地の悪さを覚える。

「二人とも、母を助けてくれてありがとう。後日、礼に出向かせて

貰う。もうすぐ夕方だから、明るいうちに帰った方がいい。本当は送りたいのだが……すまないな」

倒れたばかりの母親を放置して出かけるわけにはいかない。ロベルトが申し訳なさいっぱいに謝ると、アイシスとフィオナは両方とも首を振る。

「気にしないで下さい！」

「そうです。お母様の側にいて差し上げて下さい」

二人とも気にすると言う。

椅子に座っていたフィオナが立ち上がろうとすると、ハンナがフィオナの左手をそつと掴んだ。

「もう帰ってしまうの……？」

とても寂しそうなハンナの眼差しに、フィオナが目に見えて動揺したのが分かった。

「は、はい。ゆっくり休んで下さい」

逡巡した後、その声をかけるフィオナ。

フードを被っていない為に見える儂げな面立ちは、ハンナが天使と呼びたくなるのも分かるもので、ほとんど知らない他人のはずのハンナをフィオナの青い目が心配そうに見つめている光景は、ロベルトの胸にぐつと押し寄せるものがある。

——もし。

そう。もし、フィオナがうちに嫁に来たら、きっとフィオナはハンナを大事にしてくれるだろう。老いた母親をそつと支える嫁の図が自然に思い浮かぶ。

そんな考えが頭に浮かんで、ロベルトはたと我に返る。

今、何を考えた。

ちよつと母親を大事に扱われたくらいで、そこまで飛躍した考えを抱くとは。

息子の自分が面倒をかけた分、母親には幸せな余生を暮らして欲しいから、自分の妻になる女性は母親を大事にしてくれそうな人を選びたいと思っているし、仕事が警備職で殺伐としているので、穏

やかな家庭を築くのが夢なのだ。

まあ確かにフィオナのことは、性格面を見ても好意的に思っているが、だがしかし……！

思いがけない自分の考えに混乱の縁に叩き落とされているロベルトの前で、ハンナはフィオナに話しかける。

「天使さま、ときどきでいいから、遊びにいらっやって。いつでも歓迎しますわ」

「へ……？ あ、あの、私達、そもそも天使じゃ……」

否定しかけて、フィオナが口をつぐむ。ハンナの無邪気な笑みに、何も言えなくなったらしい。

フィオナは困ったようにアイシスを見て、アイシスがフィオナの肩を軽く叩いたので、またハンナに視線を戻して小さく頷く。

「じゃあ、あの、ときどき……来ます」

この様子でこれ以外の返事を出来る強者はそういまい。

ロベルトは申し訳ないと思う半分で、ハンナの心情を思っ嬉しくもあった。ハンナは庭いじりが唯一の楽しみといった感じの人だから、他に楽しみを見つけるのならその方が体にも良いと思ったのだ。

そうして、引き止めるような視線を向けるハンナに、フィオナやアイシスはやや後ろ髪をひかれつつ、アスレイル家を後にした。

「母さん、もう一度言うが、あの二人は天使ではなく人間だ」

トレーズ姉妹が帰った後、薬を用意してやりながら、ロベルトはもう一度言った。

ハンナは窓の外を見ながら、ふふつと微笑む。

「そうね。最初は、本当に天使だと思ったのだけど……」

どうやら分かってはいるらしい。

ロベルトは肩をすくめる。

「あまりからかわないでやってくれ。親切な人達だ」

袋から出した飲み薬を、ハンナの膝に乗っている盆の上に置く。
グラスの水が少ないのに気付き、注ぎ足してから、ハンナがロベルトをじっと見つめているのに気付く。

「……どうした？ 嫌でも薬は飲んでくれよ？」

母親相手だからか、自然と語尾が柔らかくなる。警備団にいるような断定口調をハンナに使ったら、親に対する敬意が足りないと言教されるのは分かりきっている。ハンナの説教ときたら、穏やかに淡々と話す割に、全体的を射ているので、ぐうの音も出ないほど説き伏せられてしまうので苦手だ。

「あなた、あの黒髪の天使さんのこと好きでしょ」

「は？」

危うく水差しを落としかけた。

「ふふっ、動揺してる。凶星ねえ」

くすくす微笑むハンナは、とても楽しそうだ。

「ま、まあ、好ましい印象の女性だとは思うが……」

言葉を濁すロベルト。

もしかしてハンナの言う通り、そうなんだろうか。自分のことながらよく分からない。

「セシリア様以来ね」

ロベルトの言葉など無視してハンナは微笑んでいる。ロベルトは流石に顔をしかめた。

「十年以上前の話を持ち出すの、やめてくれ」

セシリアというのは、現領主の妹姫のことだ。現領主が一番上の兄で、その次の兄がハーシエル、その下に妹のセシリアという家族構成になっている。

年下ではあるが、小さい頃は、セシリアとはハーシエルを交えて共に遊んだのだ。可愛い姫君だったし、多分、ロベルトの初恋の相手だったのだと思う。それがセシリアのもたらす「修行」という名のからかいと虐め（に近いと思っている）により、元々感情に乏しかったのが鉄壁の無表情になった。その頃にはセシリアは無理

難題をふっかけてくる恐ろしいお嬢様という認識へと変貌していた。

だが、多分、あのしごきがあったからこそ、今の忍耐強さがあるのだとも思う。迷惑な話だが。

猪を狩るまで戻ってくるなと弓矢とナイフ一本だけを渡されて山に放りこまれたり（あわや遭難する所だった）、毛虫に刺されるとどうなるか実験台になれとか言われたり（実行された）、獅子は我が子を谷から落とすらしいから、大事な部下であるロベルトを谷に落としてみようと思うなどと言われたり（これは流石に周りが止めた）など、エトセトラである。思い出したことに遠い目をするロベルト。

「やっぱりあなた、お父さん似ね」

意外な言葉に、ロベルトは回想を中断して、きょとんとハンナを見る。ハンナは優しい目で息子を見ていた。

「朴念仁だけど、女を見る目はあるわ」

そうして、ふふつと悪戯っぽく笑うハンナ。

——私も良い女だからね。

そう言っておっとりと楽しそうに微笑むハンナに、ロベルトは僅かに笑みを零す。

「俺からすると、“良い母親”といったところだが」

ロベルトの言葉に、ハンナは緑の目を丸くした後、鮮やかに微笑んだ。とても嬉しそうに。

「それって最高の褒め言葉よ。ありがとう。あなたは“良い息子”だわ。どっちもそう思えるんだもの、私達は、とても幸せね」

「良い母親で、良い息子で、幸せ、か」
五日後。

集団墓地の一角で、ロベルトは花束を携えて立っていた。

ハンナがとても幸せそうに笑っていた日から三日後。ここ最近で一番の猛暑日に、ハンナは発作を起こして亡くなった。

六年前に病気が分かってから、ずっと覚悟はしていたけれど、あまりにも突然の死に心が追いついていかない。

十日後に現領主の結婚式が控えていることもあり、亡くなった日の翌日に、葬式はひっそりと行われた。乳母として慕ってくれていたハーシエル他には、近所に住む数人程度が集うだけの小さな葬式だ。唯一の救いは、たまたま約束を守りにきたトレーズ姉妹にもハンナの死が知られることになり、彼女達も参列してくれたことだろう。たった一度会ったきりの相手なのに、アイシスは周りが貰い泣きするくらいの勢いで声を上げて泣き、その隣ではフィオナがハンカチを目元に当てて静かにすすり泣いていた。

対極的な反応ではあったが、身内の為に泣いてくれたことが慰めになった。あの少しの会話だけで、姉妹には何かが残ったらしい。それが漠然と嬉しいとも感じていた。

ウォルトホル領では土葬が一般的で、棺桶の中に遺体と、参列者からの花が添えられる。蓋を閉じ、その上に花輪を置き、土をかけて埋める。そうしてから、聖職者のもと、祈りが捧げられるのだ。葬式は昨日のことで、今日は単なる墓参りである。葬式後一週間は、死者の身内は喪服を身に着け、早朝に花を供えるしきたりがあるのだ。

何ともやるせない。

今までは、生活の為に、女手一つで育ててくれた母に楽をさせてやりたい為に働いてきた。生きる意味を失くしてしまったような空虚感にさいなまれる。

自分はちよつとは親孝行が出来ていたのだろうか。

“良い息子”。そう言ってくれたハンナを思い出し、きっと出来ていたのだろうと言いつける。

残った自分は哀しいが、生前、寂しげに空を眺めていたハンナは、天国で父と再会して幸せにしているかもしれない。

喪が明けるまでの一週間だけでいい。それだけ沈んだら、今度はシェディール様の結婚を祝える心持になれるだろう。

「あと六日よろしく、母さん」

墓に一言話しかけ、花束を置くと、短く祈ってから立ち上がる。

「……ありがとう。片親しかいなくても、俺も幸せだったよ」

小さく呟いて、黒衣を翻して歩きだす。

その背後で、朝の冷たい空気の中、灰色の墓石は朝露に濡れ、朝日を弾いてきらめいた。まるで、どういたしましてと笑うみたいに。

十二章 鉄仮面さんと幸せの在り処（後書き）

蛇足的コメント

だいぶ迷走してました。

この回も入れるか番外編にするかで迷ったけど、入れてみます。

一応、恋愛小説ですよ……。

十三章 鉄仮面さんの休日

「ああ、まったくついてない。こんなお祭りの時に警備だなんて」

執務室の机で頬杖をついて溜息を吐きながら、ハーシエルは憂鬱そうに言った。手元にはロベルトが持つて来たばかりの書類や手紙が山になっている。

「何言ってるんだ、お前は弟だろう。シェディール様に一番近い場所、ちゃんと警護してやれ」

「うんうん、それは名誉なことだよ。でもさ、祭りの時は、僕らはいっつも警備なんだよ。たまには祭りで恋人と甘く語りたいと思っても無理ないと思うけど？」

「……毎日語らっているだろうが」

ロベルトは呆れ混じりに突っ込んだ。

ハーシエルときたら、アイシスと結婚前提に付き合いだしてからというもの、仕事帰りにトレーズ商会を訪ねるようになったのだ。

二、三言話して満足して帰るようだから迷惑にはなっていないようだが。

（分かりやすい奴だ……）

恋人のことでこんなにマメなハーシエルを見たことがあっただろうか？ いや、記憶ではないはずだ。

「忙しくてデートする暇もとれないんだよ。数分話ただけで満足出来ると思ってるのかい？」

ハーシエルの言いたいことは分からないでもない。会いたい人に会えても、数分しか話す余裕がないのだから、さぞかし面白くないだろう。

「そう言ってもな。パレードまで五日しかないんだ、一昨日から街に人が増え始めている。仕方がないだろう？」

ロベルトは何度目かになる言葉を紡ぐ。ハーシエルは朝からこの調子なのだ。そして、ふと好奇心を覚えて訊いてみる。

「……そんなにアイシス嬢が気に入ったのか？」

「もちろん！」

即答するハーシエル。金髪碧眼の王子のような顔立ちが、キラキラと輝きだす。

「あんなに面白い娘は見たことない。女性を振った時だって、彼女達はさめざめと泣くか平手打ちをするくらいだったのに、アイシスは水をかけたんだよ。しかもバケツで！ わざわざ近隣の店から借りてきて！ 面白すぎるだろう！？」

「面白いか……？」

乳母兄弟ながら、訳が分からない男だ。

よく分からないが、あの時のアイシスの暴拳が大変お気に召したことはだけは分かった。……変な奴。

「それに彼女は、“領主家の次男”じゃなくて“僕自身”を好いてるんだ。可愛いよなあ」

でれでれと花を飛ばしているハーシエルの態度に、ロベルトは藪蛇だったかと身構える。ハーシエルのろけにうんざりしてきているというのに、自分から話題を振るなんてどうかしている。

しかし、そこでハーシエルは真面目な顔に戻った。ひどく申し訳なさそうにロベルトを見る。

「ロベルト、まだ喪中だつていうのにすまないね。本当なら喪中くらい休ませてあげたいんだけど……」

「気にするな。忙しい方が気が紛れるからな」

そう返したが、無意識に溜息が零れていた。

家に帰っても誰もいないので、なんとなく帰りづらく、遅くまで本舎で仕事しているのだ。

病気の母親の為に仕事をして、料理以外の家事の手伝いもしていたから、暇な時間の方が少なかった。急に出来た時間をどう使っているか分からず、戸惑ってしまうのだ。

「でも君、ちょっと働きすぎだよ。部下達が心配している。いつも以上に黙々と仕事をしてるってね」

「……………」

「これで今倒れられても困るから、明日は一日休みなさい。一日くらいならどうにか出来るから」

「なっ、それは——」

「反論は聞かない。明日、ここに来て追いつ返すから。分かったね？」

ハーシエルが笑顔で念を押すので、ロベルトは渋々頷いた。頑としてきかない時のハーシエルだ。明日ロベルトが本舎に来たら、恐らく門番に追いつ返されるだろう。

「分かった。明日は休む。それでいいんだろう？」

そう返すと、ハーシエルは困ったように笑うのだった。

*

花嫁パレード一週間前くらいから、町中がすごいことになってきた。

（ご成婚おめでとうケーキに、ご成婚おめでとうタペストリーに、ご成婚おめでとう人形に、ご成婚おめでとう……）

あちこちの店先に大々的に宣伝されている品を横目に見つつ、フィオナは口元に手を当てる。

（うちは何もしてないけど、大丈夫なのかしら）

お祝いに便乗しての商売根性のすごさに感心しつつ、自分の家の商会のことを思い出してフィオナは父親を思い浮かべた。布地商だから、結婚祝いの品など作れないから当然なのだが、そういえば割安で他の商会に布を提供していた。値引きしているのももちろん利益は低くなる。本当に大丈夫なんだろうか。

籠を腕に引つけて、道の端を歩いて西通りを歩きながら、フィオナは街の人々の熱気と浮かれ具合に自然と気持ちが和らいだ。た

だ、パレードを見る為に見知らぬ人間が増えているので注意した方が良さそうだ。

今は、東の森シェーレにある花畑に花を摘みに行った帰りだ。まだ午前中なので涼しい。

そのまま西通りを抜け、西門を出てすぐの所にある集団墓地に顔を出す。

ハンナが会った後すぐに亡くなったのには驚いたし、少し話しただけでとてもいい人だと思ったので哀しかった。知人が少なかったようで、葬儀では数人程度しか集まらなくて、それがまた哀しかったから、なんとなく花を供えに来ていた。ロベルトがいるだろう早朝は避け、昼間のうちにこっそりと。

ハンナが亡くなったのは、今年一番の猛暑の日だった。街でも、その暑さにあてられて何人が亡くなったようだ。

ふと、葬儀の時のロベルトを思い出す。

普段よりも無表情ぶりに拍車がかかっていたようだが、大丈夫だろうか。

実の母親の葬儀なのに、泣かないで無表情でいる息子に、葬儀に来ていた街の人間の何人かが、なんて冷血なんだろうとぼやいていたけれど、そうではないと思うのだ。きっと、辛すぎて、そのせいで涙が出てこないのではないかと思う。

「おや、お嬢ちゃん。今日も来たのかい？」

集団墓地の入口にある柵状の扉を開けた所で、掃除をしていた墓守の老人に声をかけられた。灰色の髪と青い目をした、灰色の口髭がたつぷりとした厳つい老人。帽子を被った影の下で、眼光だけが異様に鋭い。

「……は、はい」

フィオナが怯えたのが分かったのか、老人は視線を緩めた。

「身内でもないのに偉いことだ。ハンナも、寝こんでいる時以外は毎日ここに来ていたよ。死んだ旦那の墓参りだ。ハンナは死人を追いかけてすぎて、引つ張りこまれちゃったんだろうな。あんたはそう

ならないように気を付けな」

ぶつきらばうに言つと、老人は箒を片手に墓地を出て行つた。繋ぎを着た後ろ姿を見送つて、フィオナは首を僅かに傾げる。

（もしかして、心配されたのかしら……？）

そんな気がする。

別に、死人を追いかけているつもりはない。

ただ、なんとなく可哀想になつて来ているだけで、完全なる自己満足だ。同情だなんて、抱くだけでも厚かましいと思う。また来ると約束したのに、それを果たす前に亡くなられてしまい、約束の行き場を墓参りに置き変えているのだと思う。たつた、それだけ。

アイシスは葬儀の翌日だけ墓参りに来て、あとはさっぱりしたようだった。あの子は良くも悪くも思い切りがいい。未だ鬱々としているフィオナが女々しいのだろう。

フィオナはハンナの墓の前に来ると、摘んできたばかりの花を供え、祈りを捧げる。

ハンナの墓は、ハンナの夫の墓の隣にある。そちらの方にも花を供えた。

身ごもっている間に夫に先立たれ、死んだ夫を想いながら、生まれてきた子どもの面倒をみる。フィオナは自分が女だからか、ハンナの人生を思うと、どうだったのだろうと考えてしまう。

数言話ただけだから、予想もつかない。けれど幸せであつたなら、と思う。そうだったら、きつと、残された者も幸せだろう。

墓の前にしゃがみこんだまま、しばし思いを馳せる。やがて、墓を吹き抜けた寂しい風にハツとして、籠を持って立ち上がる。

（もう帰ろう……）

そう思いながら、うつむき加減に考える。

ロベルトはご飯をちゃんと食べているだろうか。眠れているだろうか。追い込まれていないだろうか。

心配になりながら、自分が心配する資格なんてないだろうと自嘲する。

（私みたいなのに心配されたって、余計な御世話よね……）

ふうと溜息を吐きながら、墓地の入口に向けて歩いていく。
なんだかだんだんクラクラしてきた。

（やだ、立ちくらみかしら……）

額に右手を添え、眉を寄せる。少し気持ち悪い。

ここ最近は調子が良かったから、油断していた。店に客が多いから、一人で出てきたけれど、やはりアイシスに頼んで一緒に来てもらえば良かったかもしれない。

（どこか日陰に……）

とりあえず日陰で休んで、それから帰ろう。入口脇に生えている大木に目を向けて、フィオナはふらふら歩いていくと、大木の影に座りこんだ。

木にとまったセミが喧しく、逆に頭痛がするけれど、セミを追いかつ元気もなくてそのままぼんやり座っていた。

肩をゆさゆさ揺さぶられ、フィオナは薄らと目を開けた。

何事かと目を瞬くと、肩を揺さぶっていた手の主は、安堵したみたいな深い息を吐いた。

（……え、え、副団長さん！？）

内心で悲鳴を上げて飛び起きる。心臓がバクバク鳴りだした。

「フィオナ殿、こんな場所で昼寝など、不用心だろう」

「……………！？」

ロベルトの言葉に、フィオナはぎょっと息を飲む。わたたと周りを見て、ここが集団墓地の入口側だと気づき、自分の不用心さにひやりとした。

どうやらいつの間にか寝ていたらしい。

「う、ごめんなさい……。具合が悪くて……休んで……」
顔を真っ赤にしてうつむく。

「いつの間にか寝ていたみたいです。恥ずかしい……」

身を縮めて、あまりの恥ずかしさに泣きたくなってくる。おろおろと視線をさまよわせると、太陽は中天を過ぎたくらいで、まだ昼間だと気付いてほっとする。夕方だったらもつといたたまれなかった。

「具合が？ 大丈夫なのか？」

眉をひそめたロベルトが、右手をフィオナの額に当てたので、フィオナは心の中で絶叫しつつ固まった。

剣ダコがあるのか、固い手の平の温かい感触に頬に血が昇る。体温が高めなのか、夏だからなのか、熱いくらいだ。

（熱い……？）

フィオナはぎょっとした。慌ててロベルトの手を掴んで外すと、僅かに身乗り出す。

「副団長さんの方が熱いですよ！ 熱あるんじゃないですか？」

反対に額に手を当てられたロベルトはぴたりと動きを止める。しかし慌てていたフィオナは気付かず、自身の額に左手を当てて、熱を比べてみる。

「うーん……、普通、なのかしら？ でもちよつと高いような……」

「フィオナ殿の手は冷たいな。だからではないか？」

そつと右手をどけられて、フィオナは首を傾げる。

「だったらいいんですけど……」

よく考えてみれば、家族以外の熱を計ったことはないの、平均値が分からないのだった。

「それで、君は大丈夫なのか？ 医者へ連れていこうか？」

「だ、大丈夫です。だいぶよくなりましたから。いつもの貧血だと思います」

黒い目が心配そうな色をたたえてじつと見つめてくるので、フィオナはますます顔を赤くして、フードを目深に引き寄せた。

「顔が赤い。熱中症かも……」

ロベルトは良い人だが、朴念仁だと思う。失態が恥ずかしいだけだと察して欲しい。

「大丈夫ですつ。あの、ところでどうしてここに……」
そう呟いたところで、自分の失言に口を押さえる。

ここは集団墓地だ。母親を亡くしたばかりのロベルトがいるのなら、墓参りに来たに決まっている。

「すみません……」

フィオナは、ずうんと落ち込んでうつむく。その向こうで、ロベルトが弱ったように後ろ頭をかいているとは知らないで。

「気にしないでくれ。今日は一日休みでな。暇を持て余して、なんとなくここに来てみただけなんだ。仕事や家事ばかりしていたから、暇という時間の処理の仕方が分からなくてな。だが、来て良かった。でなかったら、君が倒れているのに気付かなかっただろう」

困った様子でとつとつと語ったロベルトは、自分の選択に満足しているようだった。それから、至極不思議そうに問う。

「それで、何故、君がここに？」

「え、ええと……」

視線をうつつかせ、思わずまだ花が幾つか余っている手元の籠を見る。花を供えに来たのだと正直に言えばいいのだろうが、言いにくい。これはフィオナの自己満足で、ロベルトに知られたくないことはないのだ。

フィオナの視線を追って籠を見たロベルトは、合点した様子で頷いた。

「——ああ、あの花は君だったのか。俺以外の誰が墓参りに来てくれているのだろうと不思議に思っていたんだ」

「ごめんなさい！」

「え？」

フィオナが勢いよく頭を下げると、ロベルトは軽く目を瞠った。
「これは私の自己満足で……、副団長さんにしてみれば不愉快でしょう。わ、私、約束したのに、守れなくて……。それが、すごく、哀しくて……」

目蓋が熱い。じわつと目尻に涙が浮かんでくる。

駄目だ。泣くなんて卑怯だ。

目元に力をこめて耐える。

「そんなことか」

だから、あっさり呟かれて拍子抜けした。同時に苛立ちに似たもやつきが胸に浮かぶ。

「そんなことって……っ」

フィオナにとっては大事なことだ。それを一言で片付けられてしまい、フィオナは軽くロベルトを睨んだ。フードを被っているので顔は見えないだろうが。

「そんなこと、だ。母は、君達に重石を背負わせたくてあんな約束をしたのではない。重くならないでくれ。でないと、母は逆に落ち込んでしまうと思う」

静かな声で諭すように言うロベルトは、困ったように眉尻を下げる。

「あの通り、母はおっとりした気安い人だったから」

フィオナはハンナを思い出して、その通りだと思った。思い込みが激しそうだったが、優しくそうとつつきやすそうな雰囲気の人だった。

「……そう、ですね。でも、また来てもいいですか……？」

フィオナが恐る恐る問いかけると、ロベルトは驚いたように目を睜り、わずかの間を置いて、笑った。

「ありがとう。母も喜ぶ」

そう言った顔は、今にも泣きそうな笑みだった。

（この人、こんな顔もするんだ……）

胸がどくと音を立てた。

いつそ泣いてしまえば楽だろうに。この人は泣かないのだ。でも、心は泣いている。

なんだかたまらなくなつた。こういう時、かける言葉をフィオナ

は持っていない。情けなくて、哀しくて、気付けば目からぼろぼろ雫が落ちていた。

「っ、フィオナ殿!？」

ぎよつと焦った声を漏らすロベルト。それが少しおかしくて、フィオナは泣き笑いになる。

やっぱり優しい人だ。

「副団長さん、ちゃんとご飯食べてます？」

そう言う代わりに、こう訊いたら、面食らったようだった。

それもおかしくて、フィオナは小さく笑う。

——今だけは、あなたの代わりに私が泣くわ。

*

女性というのはよく分からない。

何故か急に泣きだしたと思ったら、食事の心配をするのだから。

訳が分からないけれど、フィオナからの心配だと思うとくすぐったい気分になった。

しかし、自分以外の誰かが墓参りに来てくれているのは気付いていたが、フィオナとは思わなかった。そこまで約束を重くとらえているとは、生真面目そうなフィオナらしい。

こちらとしては、葬式に出てくれただけでも十分だったのだが。

（だが、ここに通っているせいで調子を崩されては本末転倒だ……）
暇を持て余してなんとなく墓地に足を運んでみて、入口付近の木の根元に倒れている人を見かけた時は驚いたが、それがフィオナだったと気付いた時は血の気が引いた。

（俺はどうやら、病弱な人間に縁があるらしい）

フィオナと初めて会った時も、貧血を起こして座りこんでいる時だったのだ。

「フィオナ殿、ここに来るのは構わないが、調子が悪い時は無理を

するな」

そう言つと、意図は伝わったようだ。申し訳なさそうにややうつむく。

「……すみません。最近、調子良かったから、過信してました」

「ああ、いや。分かってくればいい」

困った。

落ち込ませるつもりではなかったのだが。

弱り果てて空を仰ぎ、後ろ頭をかく。それでも、傍目からは無表情そのものだったが。

「——あのっ」

フィオナに視線を戻すと、一大決心でもするみたいに両手を握りしめ、ぶるぶる震えながら必死で切り出す姿があった。

なんなんだと身構えつつフィオナの言葉を聞き、ロベルトはますます面食らった。

まさか食事を作らせてくれと言われるとは思わなかったのだ。

（うーむ。なんでこうなったんだ……？）

はてさて、よく分からない。

分からないが、顔色が悪いから手伝わせて下さいと必死で頼みこまれ、気付けばフィオナを家に上げていた。

顔色が悪いのは、むしろフィオナの方だと思うのだが。

やはり女性をよく分からない。

分からないが、自宅の台所で料理しているフィオナを見ると、なんだかぬるま湯に浸かっているような幸せを感じる。

帰宅途中で材料を仕入れ、（もちろん、材料費はロベルト持ちだ）、フィオナは普段の気弱さを全く感じさせない動きでぱたと台所を駆け回り、昼食をこしらえてくれた。

「はい、どうぞ」

ちよっとだけ気恥かしそうに配膳して、自身は茶だけを用意して

ちよこんとロベルトと対面するようにテーブルについた。

豚肉のハーブソースかけと、卵スープ、サラダ、パンという組み合わせだ。ごく一般的な昼食メニューである。

緊張した様子でじつとロベルトの動向を見守るフィオナの視線をやや居心地悪く思いつつ、ロベルトは食前の祈りを呟いてから昼食を食べる。

「……美味しい」

なんだこれは。

どれもこれも絶妙な味付けで、うっかり涙が出そうになる。美味しい。

この料理の腕が、結婚出来ないだろうから頑張って覚えたという理由によるのが切ないが、おいしいものはおいしい。

ロベルトの感想に、フィオナはあからさまに安堵したようだった。視線がようやく反れる。

室内だからフィオナはフードを外しているのも、綺麗な顔立ちが表に出ていて視線のやり場に困る。綺麗過ぎるのも目に毒だ。

「良かった」

「む？」

「ご飯を食べられるんなら、安心です。それに、お腹空いてると、哀しいのが余計に哀しくなりますから」

「そうか……」

そういうことかと、フィオナの申し出の意図をようやく合点する。精神的に参っていると、自然と食欲が落ちるものだ。それを案じての申し出だったのだろう。

「フィオナ殿」

「はい」

「……気遣い、感謝する」

口から出るのはぶっきらぼうな言葉だけだったが、感謝の気持ちを込めている。

フィオナは無言のまま僅かに頬を赤らめて、こくりと小さく頷い

た。

——ああ、どうしよう。

ロベルトは内心、苦笑する。

（母さん、どうやらあなたの言った言葉は正しいらしい）

どうやら自分はフィオナのことが好きらしい。

なんとなく守りたくなるし、こうして話しているだけで、心が満たされていく。何かがあるわけでもないのに、側にいるだけで歯車がぴたりと噛みあつたような充足感がある。とにかく優しくしたい、そんな気持ちになる。

姿形ではなく、彼女の気遣いや心が、なにより好きなようなのだ。もし良かつたら、今度、食事をご馳走させてくれ」

気持ちを感じてしまえば、そう口にするのも躊躇わなかった。遠回しに、また会う約束をこぎつける。

「いえ、そんな。滅相も……」

「出来れば断らないでくれ。君からは貰ってばかりで、何も返せていないんだ」

「……？」

なんのことだというように、フィオナがきよんとする。分からなくてもいい。自分が分かっているからそれでいい。

「ああ、だが、フィオナ殿に決まった人がいて、俺と食事するのは困るというなら考えるが……」

意外な言葉だったのか、フィオナは啞然とした後、ぶんぶんと首を振る。

「そつ、そんな方いませんから、大丈夫ですよ。……あつ」

思わずというように答えて、ぎよつと口元を押さえる。

ロベルトはつい笑ってしまった。なんだろう、ウサギが畏にかかった気分だ。

「では、決まりだな。休みが出来たら、話に伺う」

「……………わ、分かりました」

困ったように首をすくめて頷くフィオナ。ちらちらとロベルトを見上げ、ぼそぼそと問う。

「でも、副団長さんこそ、決まった方がいるんじゃない……」

「いないから安心しろ。女性は怖がって俺には寄りつかん」

「う。ご、ごめんなさい……」

理由を察したフィオナはますます縮こまる。

気にするなとロベルトは上機嫌に口の端に笑みを乗せる。約束をとりつけてしまえばこちらのものだ。

少しずつでいい。ただの街の警備団の副団長としてではなく、ロベルト自身を見てくれるようになってくれたら。

見た目のせいで女性に敬遠されがちなロベルトは、とりあえず嫌われないようにしようと警戒する。フィオナに嫌われるのは、ちょっとどころかかなり落ち込みそうだ。

でも、もし、奇跡が起きたら。そんなことは千分の一くらいの確率かもしれないけれど、もし起きたら。

それは、とても幸福なことだろう。

何もしないよりはマシだろうから、奇跡を掴む為にじたばたもがいてみることにしよう。

普段の無表情ながら、機嫌が良く見える気のするロベルトを見て、フィオナは不思議そうに小首を傾げる。

あまり男の一人住まいに若い女性がやって来るものではないと教えた方が親切だろうか。隠遁生活が長い為かその辺の采配に欠けるフィオナを見て、ロベルトは結構本気で考えこむのだった。

十三章 鉄仮面さんの休日（後書き）

蛇足的コメント

ぐああ、やっぱり気恥かしー！ ぜいはあ。
でもちよつとやり遂げた感があります。

あと、ハーシエルの変な人ぶりを書いてちよつと嬉しかったりする。

十四章 目隠し姫、花嫁パレードを見に行く

淡い青の布地の、シンプルだけれど白いリボン飾りが清楚な服。普段ならセンスの良さにうっとりするフィオナだが、その日は違った。盛大に慌てていた。

「お、お母さんっ！？ 無理、こんな、アイシスならともかく私だなんて！」

花嫁パレードに合わせ、服を新調しようと仕立屋に連れていかれていたから、そのうち服が出来るだろうことは分かっていたけれど、今更灰色以外の服が自分に似合うとは思えなくて、フィオナは困っていた。

仕立屋から届いた服を、レティシアに意気揚々と着るように言われ、自室で箱を広げて硬直したのが三十分前なら、無理だ無理だと言いつつ、そのうちアイシスまで参戦して二人がかりで着付けられてしまったのが五分前。

大人しめなフィオナの雰囲気によく似合う服だったが、当のフィオナだけはそうは思っていなかった。

しぶとく反抗する娘に、レティシアの額に青筋が浮かぶ。

（あ、いけない……）

癪癪スイッチを押したようだと気付いた時には、もう遅い。

気付けば、いつの間にか着替えたアイシスともども、家の外に放り出されていた。

「いつまでもぐじぐじ言わないの！ 今日ほそれで出かけてきなさい！ 三十分もしないで戻ってきたら、お母さん怒るわよ！ いい、自分に自信をつける為の特訓なの、これはっ」

最初はただ単に娘におしゃれさせたかっただけなのだが、いつの間にかレティシアの中では問題がすり変わっていた。

「お小遣いよ！好きな食べ物でも買って、楽しんでらっしゃい！いいわね！」

怒鳴るような口調で、小遣い入りの財布をアイシスに放りつけ、レティシアはボタンと扉を閉める。遅れて鍵のかかる音もした。

「あ、あわわ……」

青い顔でその扉を見つめるフィオナ。

後ろではアイシスが呑気に笑っている。

「あははは、こんな怒り方して追い出す母親って珍しいんじゃない？お小遣いまでくれて、楽しんでこいだなんて……。さっすが姉さん、怒られ方も一味違うわね！」

お腹を抱えて笑っているアイシスは、淡い緑色のワンピースを着ている。ところどころに花をかたどった黄色いモチーフで飾られていて、可憐で可愛いアイシスの外見によく馴染んでいる。さながら“春の女神”。花嫁パレードという、おめでたい日に着る服にはぴったりだ。

「なにが流石なの……？」

ふるふる震えるフィオナの目には薄らと涙が浮かびだす。

フード付き外套はここにはないから、顔が外に出てしまっていて落ち着かない。うつすら化粧を施され、艶やかな黒髪はゆるく後ろで編み込まれて青いリボンで束ねていて、それも落ち着かない。いつもは上の方で半分だけゆるく纏めて、後は背中に流すままにしていたので。

夏の日差しが目にも痛い。いつもはフードで遮られている日射しに、さっそくフィオナはたじろいだ。

しかも、目的地は南から北へ抜けるメインストリートだ。違う町から見物客も来ているし、きっと激戦区さなからだろう。

たくさん人がいるなんて、そんなの怖い。

「姉さん、大丈夫よ。おかしい人がいたら、私がちゃんとしばき倒して道に転がしとくから」

「アイシス、そんないい笑顔で言うことじゃないわ……」

可憐な笑顔でなんて恐ろしいことを言うのだ、我が妹は。

アイシスはさらりと流して、笑顔で続ける。

「だからね、今日は思い切り楽しましょ！　はい、こっちは姉さんの分ね」

お小遣いを半分こにして、フィオナに財布を渡し、自分の取り分は鞆から取り出した財布におさめるアイシス。喧嘩にならないように、最初にきちんと等分するのは流石アイシスだ。しっかりしている。

「ありがとう……」

一応、肩から提げるタイプの鞆は持たされていたので、そこに財布を仕舞う。

「よろしくね、アイシス。人混みって苦手なの……」

「分かってるわ、任せといて」

ぱちつと片目をつぶり、アイシスはどんと胸を叩いた。

人が多く、あちこち花やりボンで飾られた街は、いつもの街ではないように見えた。

着飾った娘達や、それを冷やかす若者、老人達は祝い事に酒を飲んで顔は赤くし、商人達はここぞとばかりの勢いで品を売る。笑い声や喧騒に溢れ、賑やかで、明るい雑踏だ。

快晴の空の下、アイシスと屋台巡りをして、飴菓子に舌鼓を打ち、果実水で喉の渴きを癒し、通りがかった花売りから白い花を買い、もうすぐ花嫁パレードが来るという時間に向け、花を片手に南北に抜けるメインストリートへと足を向ける。

なんでも今回の花嫁さん、隣の領地から愛竜を連れてくるらしく、地竜に引かれた馬車を見れるらしい。行商人でもない限り、隣の領地まで行く者は少なく、初めて目にする地竜に皆興味津々だ。

そんな竜が来るというので、パレードが終わるまでは南北に抜けるメインストリートは封鎖され、街の東西間の行き来は出来ないこ

とになっている。

「すごい人だかり。これじゃ地竜どころか花嫁さんの姿も見えそうにないわね」

封鎖された道の前には、黒山の人だかりが出来ていた。

早めにきて陣取っていたのだろう。

上を見上げると、屋根に上っている人達も見える。通りに面した家に住んでいれば、二階から見えただろうが……。

「この辺りは中心街だし、仕方ないのかな。ねえ姉さん、南門の近くまで行ってみない？」

「北門でなくていいの？」

「あつちは領主家に近いから、警備が厳重だと思うのよ。南門ならそうでもないんじゃないかなって。ここより人は少ないんじゃないかしら」

そわそわしているアイシスの意見にフィオナは頷く。

「いいわよ。じゃあ行きましょう」

いい加減、人だかりにいるせいで冷や汗が止まらないのもあったので、ここより人が少ないのならとフィオナはその意見に飛び付いたのだった。

路地裏を通り抜けて目当ての場所までやって来ると、通り沿いには人はいたけれど、さつき程多くはなく、隙間からなんとかパレードの光景が見れそうというくらいだった。

とはいえ、メインストリートの各所には、張られた縄から中へ人が入らないよう、棒を持った領主家の私兵が点々と立って目を光らせている。私兵と分かるのは、私兵は赤色の制服を着ているせいだ。パレードに合わせた正装姿なのか、白い半分丈のマントをつけていて、布地にはぱりつと糊がきいていて立派そうに見える。頭には赤い房飾りのついた鉄製の兜を被っているが、顔は見えているので、そこまで威圧感はない。

やがて、門の方でわつと歓声が上がり、パレードの到着を告げた。
「わあ、あれが地竜なのね！」

「……………」

馬三頭分くらいにはなりそうな、茶色い皮をした大きなトカゲが、ゆつくりと馬車を曳いて歩いてくる。金色の目はどこか眠たげだ。耳につけられた白いリボンが、どこことなく珍妙に映る。

そんな地竜に曳かれた馬車は、白く塗装された上にあちこちに花が飾りつけられている。そして、その上には――。

「あれがヨランダ姫！？ すっごい綺麗な人！ ね、ね、姉さん見てる！？」

「見てるわよ、アイシス。シェディール様も素敵ね」

金髪碧眼の精悍な顔をした若者と、白い花嫁姿の、きりつとした目が印象的な、燃えるような赤毛の女性が並んで座っている。ときどき、仲睦まじそうに握った手を握り合い、目を合わせて微笑みを交わす様は、まさしく理想の結婚式そのものだ。

ヨランダ姫は外見こそ美しいけれど、なにより、幸せそうな姿こそが美しく見えた。

両手を合わせ、フィオナはほうつと熱い息を吐く。

こんな素敵なものを見れたのだ、外に出て良かった。

フィオナは街の者達に混ざり、馬車が通り過ぎる時に白い花を投げる。この街では、花嫁に花を降らすのが慣例なのだ。

その花のせいで、鼻がむずむずしたらしい地竜が、ガフォツと盛大なくしゃみをし、周囲をどよつかせたが、特に暴れ出すこともなく、のしのしと馬車を曳いてメインストリートを北上していった。

「す、すごかったわね、アイシス……………」

半ば呆然と地竜を見送るフィオナ。

「変なくしゃみ！ 地竜って面白いのねえ」

アイシスは手を叩いて笑っている。

面白い？

フィオナはどっちかというと怖く感じたのだが。

やっぱりうちの妹はすごい。フィオナはつくづく感心し、流石ハ
ーシエル様を射とめるだけはあると納得したのだった。

花嫁行列が完全に通り返ぎた所から、徐々に封鎖が解けていった。

「帰りましょ、アイシス」

「そうねえ」

祭りの後の寂しさを感じながら、フィオナはアイシスのワンピースの腰当たりを引っ張った。

アイシスはぼんやりと片付けていく様を見つめ、やがてハツとしたように顔を上げる。

「姉さん！」

「なに……」

近くにいるというのに、急に大声を出したアイシスに驚いて心持身を引きつつ、フィオナは問い返す。

「せっかくおめかししたのに、鉄仮面……じゃなかった、副団長さんに見せなくていいの!？」

「ふえ!？」

フィオナは仰天して一步下がった。

「な、な、なんで副団長さんが出てくるの!？」

裏返った声が出た。

だってびっくりしたのだ。こんな所でロベルトの名が出たのが。

「だって、兵士さんが通るたびにじっと見てるじゃない。探してるのかと思って」

「ち、違うわよっ!」

なんていう観察眼。

確かに見ていた。警備団の知り合いがいるかなあと、なんとなく目が追っていたのは認める。でも、ロベルト限定ではない。

「レネさんとか、ハンスさんとかもいるかもでしょうっ」

なんとなく慌ててしまう。

アイシスは緑の目でじーっとフィオナの青い目を見て、やがて、ふっと笑った。

「分かった。そういうことにしておいてあげるわ」

「ええ？」

なにその上から目線。何かに負けたような気分になりつつ、フィオナはアイシスの手を引つ張る。

「い、いいから、帰りましょう」

「もう、仕方ないわねえ」

困った姉さん、と、アイシスは大人ぶって呟く。

フィオナからすれば困った妹なのだが、口にする気もなく、いそいそと帰り道につくことにする。

しかし、数歩も行かないうちに二人して足を止めた。

見かけない顔の若者が三人、通り道に立っていたのだ。

「やあ、こんにちは」

一人がにこやかに言い、フィオナはきょとんと首を傾げる。

「こ、こんにちは？」

何なんだろう。知り合いでもないし、お客さんにいたんだろうか。

頭の中で知り合いリストをめぐっているフィオナの手を、今度はアイシスが引く。

「馬鹿ね、姉さんたら。挨拶なんか返さなくていいのよ。行きましょ」

「？ え？ そうなの？」

どうしてかアイシスの機嫌が悪くなったのを怪訝に思いつつ、フィオナはアイシスに引つ張られるまま、若者達の横を通り抜ける。いや、した、というのが正しい。完全に通り抜ける前に、左腕を掴まれてよろめく。

「きゃ」

「おっと、大丈夫？」

大丈夫も何も、そっちが引つ張ったからよろけたのだが。

右肩をぽんと掴まれ、そのまま抱きこまれるような形になり、ん

？ と固まる。

「ちよつと！ なに姉さんに気安く触つてんのよ！」

アイシスが眉を吊り上げて怒る。

これはいったいどういう状況なのかと、フィオナは困惑しきりでアイシスを見る。思考がついていかず、動きを止めていた。

「え？ この子、君のお姉さんなの？ どっちも綺麗だけど、似てないね」

別のもう一人がにやにやして言う。

「知ってるし、余計な御世話よ！ 軟派野郎なんかお断りよ、とつとどこかに行けば！」

かつかと怒るアイシス。だが、若者達には効かない。

「うわあ、怒った顔も可愛いなあ。ねえ、せつかくだし、祭りを一緒に回ろうよ」

「そうそう。楽しもうぜ」

軽い調子で笑う若者達は、見るからに軽薄そうだった。しかも薄らと酒のにおいがしている。

見知らぬ男性にいきなり肩を抱かれたことなどないフィオナはというと、驚かされた猫みたいに硬直していたが、だんだん冷や汗が出てきた。ここは間違いなく顔を赤らめる場面なのだろうが、それよりも人見知りが発動して、気分が悪くなってきたのである。

フィオナの顔色が真っ青なのに気付いたアイシスも焦る。

「もう！ いいから姉さんを放しなさいよ！」

姉の腕を掴み、思い切り引っ張ろうとして、別の一人に肩を抱き寄せられてしまう。その瞬間、アイシスはぷちんと切れ、左足の踵を思い切り男の足の甲に振り下ろした。

「いつ！」

悲鳴を上げてうずくまり、足を押さえる若者。

今度こそ間違いなく姉の腕を掴んで引っ張ると、アイシスは姉を若者の手から救い出した。

「大丈夫？ 姉さん、走るわよ！」

「え、ええ！」

硬直は解けたが、ふらふらしながら、それでもフィオナはアイシスに手を引かれて走りだす。

「あつ、逃げた！」

「待てよ！」

後ろから声がして、追いかけてくるような足音まで聞こえてきた。
「な、な、なんで追ってくるの……？」

フィオナは意味が分からなすぎて、涙目で走る。

「たぶんお酒入ってて、そこで綺麗な女の子見かけたからデートに洒落こもつとしたのよ。私達って本当に罪な顔してるわよね！ いい迷惑だけど！」

しっかり肯定はしつつ、それでも吐き捨てるように言うアイシス。格好良い。

「達って、私は違うわっ」

「何言ってるのよ！ 姉さんったら、ここに来るまでに男の人が振り返りまくってたのに、気付いてなかったの！？」

「それは、だって、皆、アイシスを見てたんでしょ？」

「それもあるけど、私だけじゃないわよ」

自分の長所をしっかり理解しているアイシスは、迷うことなく肯定し、それでもそう言った。自分を見ているか見ていないかくらい、相手の目を見れば分かるのだ。

ワンブロック程走り抜けた所で、フィオナはよろよろとアイシスに訴える。

「あ、アイシス、私、もう無理……っ」

元々そんなに体力の無いフィオナは、すでにバテバテである。やむなく減速したところで、またとっ捕まった。

「捕まえたっ。鬼ごっこは終わりだよ」

後ろからふざけた調子で抱きつかれて、フィオナはひっと悲鳴を漏らす。

（うつ、お酒くさい……）

いったいどれだけ呑んだのか知らないが、絡み酒など迷惑な話である。

「こんの酔いどれ変態っ！ さっきから、私の姉さんにべたべたべたべたとおっ！」

キーツとアイシスが怒っている。完全に戦闘態勢に入ったアイシスは、腕まくりをして、拳を固めた。

「東街の元ガキ大将をなめんじやないわよっ！」

「ちよつとアイシス——！？」

誰か呼んでくるとか色々選択肢はあるでしょうに、何故、真つ向から喧嘩する道を選ぶの！？

フィオナは青ざめたが、そこで他に乱入者が現れたことでハツとする。

「警備団だ！ そのお前ら！ フィオナさんに何してんだ、シメるぞ！」

ハンスだった。

警備していたのか、赤色の懸章を肩から掛けている。

警棒片手に突っ込んできたハンスを、若者達はちらりと見る。

「なんだこのチビ」

そして可哀想な警備団の新人少年は、一人の若者の一撃であっさりノックアウトされてしまった。

顔面に拳をもろにくらい、鼻血を出してひっくり返るハンス。

「きゃああ、ハンスさん！？」

フィオナは悲鳴を上げ、アイシスは舌打ちする。

「使えない奴」

「こら、アイシス！」

流石に黙ってられずに叱るが、アイシスはぺろつと舌を出して、どこ吹く風の体である。

「あの、あのあの、とにかく放して下さい。お酒を飲むのでしたら、酒場はあっちにありますから……」

酔っぱらっている人相手に熱くなっても仕方がないので、フィオ

ナは抱きついてきている男の腕を軽く叩いて、店のある通りを示す。
「よっしゃ。じゃあ一緒に行こう」

「酌してくれよ、お嬢さん」

「行こう行こう」

「え、えええええ。ちよつと、困ります！」

ずりずり引きずられるように歩きつつ、フィオナは腕から逃れようと必死になる。

それを見て、今度こそ突っ込もうとしたアイシスだったが、右肩をぽんと叩いて止められ、動きを止めた。白い衣服に赤い懸章をかけた黒髪の青年がすいと横を通り過ぎるのを、目を丸くして見送る。黒髪の青年——ロベルトは静かにフィオナに抱きついていて、若者に近付くと、その腕を片方だけ掴んだ。そのまま容赦なくひねり上げる。

「いだだだだだっ！」

若者は悲鳴を上げ、フィオナから手を放す。離れたのを見ると、ロベルトは空いている左手でフィオナの肩をそつと引いて、若者から引き離れた。そのままアイシスがフィオナの腕に抱きついて、場から引きはがす。

「せつかくの祝い事だ。酒を飲むのは構わんが、少し遊びが過ぎるぞ」

「なんだと、てめえ！」

静かに言うロベルトに突っかった別の一人は、ロベルトが無言でじつと見下ろすだけで、うつとたじろいだ。もう一人も声無き威圧に尻ごみしている。

「祭りなのだ、楽しく飲みたいだろう？ ……それとも、残りの時間は牢で頭を冷やすか？」

黒い双眸が冷たくにらむ。

その目と言葉の内容に、若者達三人は一気に目が覚めた。

「すみませんでした！」

「申し訳ございませんでした！」

「もうしません！ 大人しく家で飲みます！」

がばーっと頭を下げる三人に、ロベルトは鷹揚に頷く。

「そうするといい。――二度目はないと思えよ？」

ただし、そう付け加えるのは忘れずに。

にこりともしないで付け加えられた言葉に若者達は震えあがり、もう一度謝ってから、すくすく去っていった。

若者達が去ったのを見送ると、ロベルトは引っくり返っているハンスに近付く。

「――おい、大丈夫か？」

傍らに膝をつき、ロベルトがハンスの肩を揺ると、ハンスはハッとして我を取り戻す。

「うう、ぐす。すみません、副団長お」

ハンスは起き上がり、鼻を押さえたまま悔しげに泣く。

「俺、情けないっす。一撃でのされちまうなんて……」

「……うむ、確かに見事にやられていたな」

「少しは慰めて下さいよお……」

肯定されて、ますます落ち込むハンス。

「大丈夫よ、少年！ 誰にだってミスはあるわ」

アイシスが優しく微笑むが、ハンスは恨みがましくアイシスを睨む。

「さっき“使えない奴”って言ったの、ちゃんと聞いてましたよ」

「あ、あら。おほほほ。そんなこと言ったかしら」

アイシスは明後日の方を向いて、わざとらしく口笛を吹き始める。それをじつとりと見るハンス。

フィオナはハンカチを取り出して、そっとハンスに差し出す。

「えと、あの、でも来てくれたのは嬉しかったです。ありがとうございます。さいました。ハンスさん、もう立派な警備団員さんですね」

そう言つと、ハンスはまたぐずと泣いた。

「フィオナさんは優しいですね……。こっちこそありがとうございます。……後生ですから、アイラには黙って下さいね」

付け加えられた言葉に、こくりと頷く。

「ええ、もちろんですよ。約束します」

そりゃあ悪い人に格好悪いところなんてばれたくはないだろう。

フィオナはしっかりと頷いた。

「でも、良かったですよ。ちょうど持ち場から警備団の本舎に帰るところだったんです。副団長も一緒に、たまった仕事の予定を話してて……そしたらあんなことになってるから、思わず突っ込んだじやったんですけど」

ハンスはぐじぐじと呟き、ちらりとロベルトを見る。

「最初から余計なことはせずに副団長に任せておけば良かったです……」

しゅんと首をすくめるハンスは、どこから見ても落ち込んだ子犬にしか見えない。

ハンスには悪いが、つい、きゅんとしてしまうフィオナである。可愛いのである。弟だったら是非家に一人は欲しいと思うくらいには。

ロベルトは仕方なさそうに息を吐き、ハンスの頭をぐしゃぐしゃと掻き回す。

「俺は迷わず突っ込んでいったのを見て、こんな部下を持って誇らしいと思った。そう落ち込むな。若いうちは失敗などたくさんすればいいんだ」

「若いうちって……。副団長も若いじゃないですか。二十四でしよう?」

「俺からすればお前くらいの年代は小僧もいいところだ」

苦笑するロベルトを、ハンスは少し面白くなさそうに見る。

「ほら見る。年齢のことですぐにムキになるのが良い証拠だ」

「俺もいつか副団長みたいになれるんでしょうか……」

「俺みたいになりたいのか? だったら領主家に仕えてこい」

「全力でお断りしますっ!」

ハンスは震えあがって即答した。

それを見てフィオナはつい笑ってしまったが、同時に、ここまで怯えられる領主家ってどうなんだろうと思った。

「それにしても、おかしい人達でしたね。私なんかにお酌をさせて、何が面白いんでしょう……」

心底不思議だと呟く。

我ながら自分などとお酒を飲んでもつまらないと思うのだが……。

「何言ってるんですか、フィオナさん！　ちゃんと顔を見たのは初めてですけど、すごい美人じゃないですか！　男は美人な女性とおいしい食事に弱いものなんです！　俺は可愛い娘が好きですけどね！」

何やらハンスが力説している。

「は、はあ……」

僅かに身を引きつつ、首をひねる。

美人なんだろうか。我が事ながらよく分からない。

「今日はフードはどうしたんだ？」

ロベルトの問いに、うつと詰まる。

「母に、人目に慣れる練習だと放り出されてしまいました……」

うなだれるフィオナの横から、アイシスが楽しげに笑って補足する。

「本当はお洒落をさせたかっただけなのに、姉さんがお洒落するのを渋りまくったので、母が切れちゃいまして。面白かったですよ。小遣いあげるから楽しんでこいつて怒ってて」

「さっすがフィオナさん、怒られ方が斜め七十五度くらい違いますね！」

鼻をハンカチで押さえたまま、上を向いて、ほとんど首の裏を叩きつつ、もごもごとハンスが言った。

「こんな格好、身に余ります……。いい気になってすみません」

どよおんと落ち込むフィオナ。男性陣に見られるなど、恥のなものでもない。

「そんなことはない。君の目と同じ色で、とてもよく似合っている」

ロベルトの言葉に、フィオナは頬を赤くし、パツと顔を上げる。

「ほ、ほんとですか!？」

「ああ」

見れば、ロベルトは薄らと笑っているようだった。

本当なんだ。似合ってるんだ。

フィオナの心はふわっと浮き上がった。

「ありがとうございます！ お世辞でも嬉しいですよ」

他の誰に言われても信じられなかったのに、ロベルトに言われるとすんなりと認められる気がした。

「むう。なんで私の言う事は信じないのに、副団長さんの言う事だと聞くのよお」

その横で、頬を膨らませるアイシス。

「日頃の行いじゃないですかね」

それにハンスがしれっと呟き返し、ハンスはアイシスにぎろっと睨まれた。

「副団長さん副団長さん」

アイシスは気を取り直し、ロベルトに声をかける。ロベルトはちらつとアイシスを一瞥する。

「なんだ、アイシス殿」

「この後、暇ですか？」

「ちよつとアイシスさん！ 団長というものがありながら！」

ハンスが青ざめておろおろする。アイシスはふんと鼻で笑う。

「馬鹿ね、そうじゃないわよ！ 少し時間があるなら、姉さんと祭りを回って下さい。私といるとすぐに帰るって言い出すんです。少しでもいいですから！ 私、もう少し屋台を巡りたくて……」

もちろん方便であるが、アイシスは鈍感で奥手な姉の為に一芝居打った。

「ついでに家まで送って下さると嬉しいですけど」

手を組んで、うふつと可愛らしく微笑むアイシス。そして、ハンスの小脇を肘で小突いた。

「副団長、書類の整理ならしておきますから、休憩時間にして下さい。お昼もろくにとつてなかったでしょう?」

ハンスもにやりと笑い、事実を織り交ぜてそう言った。

ロベルトはアイシスとハンスの意図を正確に理解したが、ここは芝居に乗ることにした。

「……ふむ、そうだな。休憩ついでに遅い昼食をとつていくか。フィオナ殿、妹殿もこう言っているし、一緒にどうだ?」

「へ!? あの、でも……」

ここで分かつていないのはフィオナだけである。まさかの妹からのいきなりの置いてきぼり宣言に、青ざめておどおどする。

一人でこの人混みを帰るのは怖いけれど、だからといって忙しい人を巻き込むなんて出来ない。

「もし良かったら、付き合ってくれないか? この祭り一人で食事というのも味気ないから」

一人。その言葉に、フィオナはずがんと打ちのめされた。

そうだった。ロベルトは母親を亡くしたばかりである。一人は寂しいだろう。

「わ、私で良かったら……。えと、でも……」

「大丈夫、食事をしたら、すぐに家まで送ろう」

その言葉にほっと息を吐く。それなら大丈夫だ。

「じゃあ、俺はもう行きますね」

「あ、私も! じゃあね、姉さん。楽しんできてね!」

いそいそと場を離れるハンスとアイシス。見えない位置で、それぞれガッツポーズをする。

立ち去る二人にロベルトは手をひらつかせて見送りつつ、心の中で、今度何かお礼をしなくてはなと考えた。

取り残されたフィオナは寂しげにアイシスを見送って、それからどきまぎとロベルトを見上げる。

「あの、食事をされるんでしたら、東西に抜ける通りの方が屋台がたくさんありましたよ。そちらに行きませんか?」

「ああ、是非そうしよう」

すぐに了承が返ってフィオナは嬉しくて微笑を零す。まさかロベ
ルトが、人が多い方がフィオナ狙いの害虫に良い牽制になるなどと
考えているとは思ってもせずに。

どちらにせよ、二人は口にも態度にも出さなかったが、それぞれ
浮かれているのだった。

十四章 目隠し姫、花嫁パレードを見に行く（後書き）

久しぶりすぎてすみません。

色々悩んだ挙句、最初に予定してたプロットを少しいじりました。
あと数話で終わらせられる……のか？

とりあえず次はせっかくなので、デートもどきを入れようかな。
その方が面白い気がします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5483u/>

目隠し姫

2011年10月12日03時02分発行